THE CENTRAL REVIEW

中央公論

東京音樂學校學友會

電話下谷一一六三番

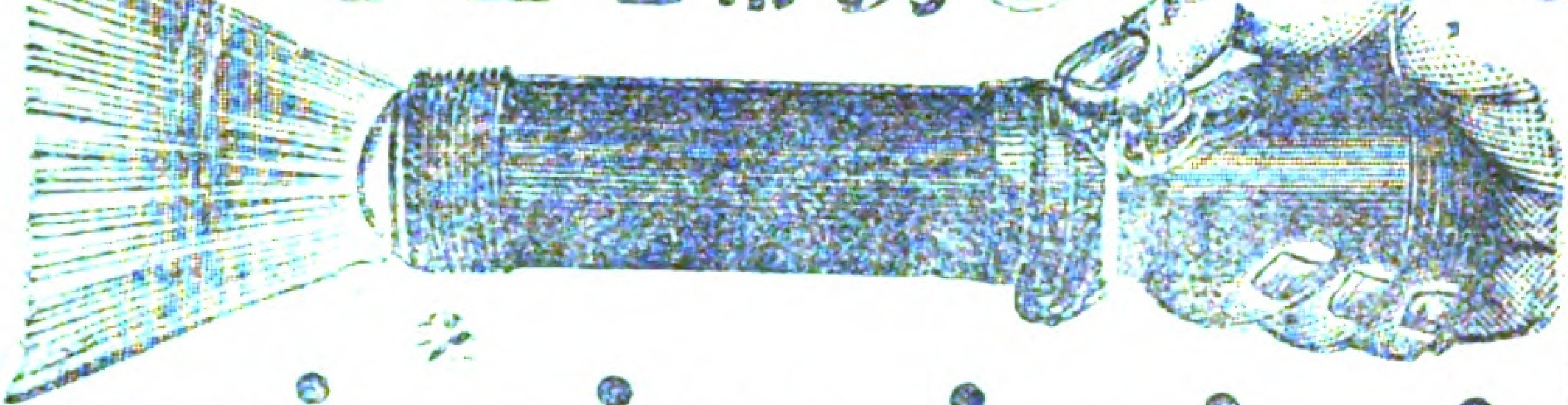
第廿五年第二號

第二百五十一號


歐米に於ける最近流行の
空中飛行機は
日本に於ける紳士貴婦人
の愛用せるダイヤモン
ド入人身装飾の如く流
行せり
今般新荷着ダイヤモンド
は純白色にして無疵な
り
價格(壹個に付)
金百八拾圓より
金壹千五百圓まで
外に金參拾圓以上各種
東京市京橋區八官町
小林時計店
電話新橋一〇〇三

此廣告によりお申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

携帯電燈



●携帯電燈は圓い筒形の金屬製で上に美しい人造皮がはつてあれば頗る優美高尙で中なる電池さへ入替へれば何年でも使はれ甚堅牢です。

●電池は化學的藥品を固めたもので之を器械の中に入れ圖の如く鉛を押せば電光一射、大形は十時位小形でも四五時間もつのです。

●旅行や夜間外出には勿論來客の送迎、便所の往復、物が搜す時などランプ提灯の必要がありません、便利重寶な實用品で不時の用意として殊に必要ですから東京では近來の大流行品になりました。

●弊店發賣のものは最確實なる良品にして電力亦頗强大ゆゑ亂用さへせずば一個の電池にて大形五六ヶ月小形でも二三ヶ月を保ち其後入替の電池も左の通り安價です。

●弊店は精良品故割引又は景品付販賣は致しませんが殊に至急注文の方には小包送料荷造箱入等を弊店にて負擔致します振替貯金なれば注文賣用も要せず店て御買上と同じ一層す至急申込願ひます。

定價表

			入替電池
最良	德用大形（長サ八寸）電池附屬	三圓半	五十五錢
上製	實用中形（長サ六寸）仝	二圓半	四十五錢
並製	輕便小形（長サ四寸）仝	一圓廿錢	二十錢

右の外卷煙草入形懷中電燈あり定價同額但し小形なし

東京市神田錦町三丁目二、（振替貯金口座二萬八十二）

携帶電燈
懷中電燈

柳沼商會

實業研究會編

全一册 送料共 廿四錢（郵券代用三十八錢）

（大好評）

少額資本實業成功法

◉如何せば少資本にて成功し得べきか？

◉赤手空拳以て巨萬の富を積むは實業家也、見よ今の大富豪の多くは皆少額の資本を以て實業に從事し着々成功せしものにあらずや。玆に於てか本社は東京四大新聞に廣告して實業成功の考案を募り、内六十餘種を選拔して本書を編輯し更に實業研究會の所見を掲ぐ、眞に一字千金、一讀以て成功の光明を認むべき良書也

本書內容

▲緒言
▲百圓以內の資本にて成功し得べき職業（合計五十余種）
其一 人の氣づかぬ新事業
其二 外見惡くも大利ある業
其三 高尙にて利益ある業
其四 地方田舍の有望事業
▲何故に東京に出でゝ失敗するか
▲驚くべき計算表
▲資本金を得る法
▲借金償却法
▲不景氣利用法
▲四種の商略
▲最有望なる實業學校
▲日本財產家一覽表
●增補
▲如何せば五百圓以內の資本金にて大成功を得べきか（七種）
▲本社代理店及販賣員の好況
▲結論

以上皆其營業法に至るまで詳細に記述し調査確實、何人にも直に實行するを得、「機敏なれ」「決行せよ」これ成功の秘訣也。實業界に大成功を得んとする者は速に本書を讀め。

學友社編 **立身案內**（送料共 廿七錢）

盛文社編 **就職榮內**（送料共 廿九錢）

官費學校案內▲短期卒業有望學校案內▲最よき苦學の方法等地方及東京に於ける諸官廳銀行會社大商店大工場の就職手續

東京神田錦町三ノ二 振替東京一六一八番 **學友社**（振替送金必二錢增）

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

上古より維新前に至る本邦教育書の精粹
八百巻を包容せる未曾有の大文庫

日本教育文庫

内容見本 進呈 送料二錢

全十二冊 紙數八千四百頁

◎評議員
文學博士 井上哲次郎君
文學博士 芳賀矢一君
文學博士 三宅米吉君
文學博士 辻善之助君
文學士 白石正邦君
編輯主任 黒川眞道君

我邦上古より明治維新に至るまでの家庭教育＝學校教育＝社會教育＝專門教育＝教育家史傳等に關する有らゆる珍籍稀覯書を蒐集し士農工商各階級の金科玉條を一部に大成したる大叢書＝世界史上に燦然として異彩を放てる日本文明の精華は悉く収めて此に在り＝全十二冊一冊約七百頁總計八千四百頁に達し收むる所の書籍凡そ八百巻の多きに上る＝直接間接に教育に關係ある者は勿論苟くも日本の事を念とするの士は必ず之を備へざる可らず

收容書目

家訓篇	一冊
訓誡篇	三冊
女訓篇	一冊
孝義篇	二冊
學校篇	一冊
教科書篇	一冊
心學篇	一冊
宗教篇	一冊
遊戯及衛生篇	一冊

東京神田區表神保町
振替口座東京一三三五

同文館

電話本局特四三七番
電話本局長一五三九

市内は御一報次第直に御一覧に供し可申、地方の御注文は直ちに發送する手筈整ひ居候

靴とかばん

内地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は舊トモエヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處合名會社トモエヤ解散後は同店を辭し右の場所に合名會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遲れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候

敬具

●市内は電話又は御一報次第早速店員御用伺に參堂可仕候

●地方の御注文は迅速御發送申上候

アヲキ商店

京橋區南傳馬町二丁目東側

電話本局一三八二番

沙翁傑作唯一の好譯本

ハムレット

洋裝天金頗美本　紙數約三百頁　全一冊

◉正價金壹圓三拾五錢◉郵稅金八錢◉

◉再版、三版忽ち盡き◉

沙翁の最大傑作**ハムレット**は我劇場に演ぜられしこと前後六七回の多きに及びたれども眞に原作の面影を傳へたる翻譯は未だあらず、坪内逍遙博士早稻田大學にて沙翁を講ずること茲に二十年、今回**沙翁傑作集**を公刊せらるゝ先驅として本譯を公にせらる、其特色(一)原文は如何なる難句も剩す所なく悉く逐語的に譯し(二)而も流麗明晰雅潔簡勁よく原文の意味と調子と風韻とを傳へ(三)直に舞臺にも應用し得べく(四)滑稽戯謔の句の如き地口語呂の如きをも巧に適當なる邦語に移し(五)雅致に富める**アーギング**版の挿畫數十個(精巧なる木版)及び美麗なる三色版(名優**アーギング**の扮せる**ハムレット**像)(六)作の由來に關する譯者の見解を添ふ(七)用紙舶來上質、裝釘高雅清麗

坪内逍遙譯

◉今や第四版を發行す◉

東京牛込早稻田
早稻田大學出版部
振替一一二三番

發兌

東京神田裏神保町
合資會社 冨山房
振替五〇一番

靴とかばん

市内は御一報次第直に御一覽に供し可申、地方の御注文は直ちに發送する手筈整ひ居候

內地小包料は代金引替手數料共金貳拾錢臺灣樺太滿韓送料は金卅五錢

弊店主任高橋彌四郎儀は昨トモヱヤ支店長として廿有餘年間勤務せし處合名會社トモヱヤ解散後は同店を辭し右の場所に合名會社アヲキ商店を組織し多年練磨研究の功を實地に應用し各位をして後顧の憂なく且流行に遅れざる品物を確實廉價に販賣仕候間何卒御引立之程奉希上候

敬具

●市內は電話又は御一報次第早速店員御用伺に參堂可仕候

●地方の御注文は迅速御發送申上候

アヲキ商店

京橋區南傳馬町二丁目東側

電話本局一三八二番



中央公論第廿五年第二號目次



尾崎行雄論

Der Eremis



By ARNOLD BÖCKLIN PINX

中央公論



第二十五年
第貳號
第二百五十一號

米國の提議に就て日米兩國を非難す

（一）

米國政府が列國の合資を以て滿洲諸鐵道を清國に買收せしめ、シンヂケートの手に管理して、之を政治上軍事上に使用するを禁じて、以て日露再衝突の禍因を除かんと提議したるは、實に去年十二月下旬にして、米國國務卿ノックス氏が今春一月六日之を公言するに及び、世界の論壇は爲めに一時色めき渡りたりき、我が國の新聞紙は一齊に米國の提議の輕卒なるとを非難し、强硬に之に反對すと雖も、未だ政府及び國民をして自省せしむべき誠實なる議論を爲すものを看ず。

是れ吾人の慨然として、一面には米國の不誠實なるを攻擊すると共に、又併せて日本政府從來の措置

を非難し、以て我が官民をして聊か反省せしめんと欲する所、又敢て玆に此の言を爲す所以なりとす。

(二)

日露戰役後、日本が盛んに滿洲方面に活動するや、北京外交團に於ける日本の評判は甚だしく不良となれり、日本を非難するものは必らずしも日本を猜忌し中傷せんと欲するもののみならざりき、去れば倫敦タイムスの如きは、在東京の通信者ブリンクリー氏の所報と、在北京のドクトル、モリソン氏の所報と著るしく懸隔ありて、殆んど其の眞相を知るに苦みたる結果、外報主任チロル氏を東洋に派遣したりき、斯くてチロル氏は我が東京に來り、ブリンクリー、モリソンの兩氏を招きて巨細に事情を聽取したる後、日本政府當局者に面晤して其の所説を諒としたりしが、更らに北京に至りて各外交家を歷訪し、尙ほ親しく滿洲の實地を目擊するや、日本の措置にも頗ぶる非難すべき點あるを發見し、急に再び東京に歸り、日本政府の當局に切實なる忠言を致して、然る後倫敦に歸りしといふ、所謂チロル氏の忠言なるものは、吾人未だ其の精詳なるを聞くに至らざるも、公平なる第三者の眼より視て、我が日本の滿洲に於て多少の缺點あるや推知するに餘りありとす。

其の何人の眼にも映すべきは、南滿洲鐵道會社が、大連繁榮の策と唱へて、近き營口と遠き大連とを同一運賃と規定し、著るしく營口を窘めたりし一事とす、營口は淸國の一開港場にして、冬季結氷期を除くの外は、列國の船舶多く輻湊し、而して列國の商人多く居留し、其の領事も亦悉く公館を設けて執務する所たるに、然るに滿鐵の措置や斯の如し、其の傍若無人にして列國を眼中に措かざると想ふべき

也、彼の奉天に於て京奉線の連絡を許さゞりし亦其の一例に擧げらるべし。

軍政時代には、素より萬事粗大を尚びて、多く細項を顧みざりしなるべし、是れ已むを得ざるのみ、軍政撤せられて、民政之に代るに至ては、門戸開放機會均等の聲明世界に公けにせられて、日本の信用玆に繋る、宜しく此の精神に由て、公平無私を主とせざる可らず、然かも動もすれば軍政時代の遺習を去らず、無遠慮に清人を虐待し、外國人を疎外し冷遇せしと絶無とす可らず、殊に何等かの企業を試みんとする清人の背後には、外國人の潜在するを知らずして、清人を輕侮するがまゝ之を許さず、或は清人の既得權を奪へるが如きとも必らずしも絶無なりしと做す可らざるに似たり。記せよ、日本政府及び國民は、曾て露國が滿洲に於て傍若無人の振舞を爲すを切齒し、正義人道を標として常に之を非難し、竟に延きて砲火相見ゆるの餘儀なきに至りし事を、咎めて而して之に倣ふ、誰か敢て與せんや、抑も正義人道の許さゞる所也、然かも況んや門戸開放機會均等の聲明を世界に公にしたるに於てをや。

必らずしも日本政府及び國民の意思に非ずとするも、韓國に於ける日本人が韓民を虐待する形迹は未だ全く絶ゆるに至らず、滿洲に在る日本人の清民に於ける、亦往々之に類するものなきに非ず、韓人の無恥にして而して頑迷なる、之を撲ち之を蹴るの外なしといふと素より全くの無法ならざるべし、東清鐵道の各驛に於て、露國驛員が乘客たる清人を視ると豚犬の如く、動もすれば鞭ちて之を追逐する、亦必らずしも好みて然かするには非ざらん、即ち清人猶ほ韓人の如きを免かれざるべし、然れども白日公

然之を挨ち之を蹴り、若くは斯の如く甚だしからざるも、輕侮嘲笑を以て之を迎へ、待つに自個より劣等なる人種を以てするは、啻だ滿人の憤恚する所たるに止まらず、又歐米人の視て以て非とする所ならざらんや、抑も又人道の容さゞる所ならずや、而して是れ亦滿洲に於て、日本の專橫なりと見らるゝ一原由ならずや。

（三）

日本の關東都督府を設置せる、亦少くも外國人の誤解を招く一大骨子たらずんばあらず、夫れ日本の清廷より租借せるは金州半島の南一部のみ、幾んど旅順と大連とのみ、之を內地に例すれば一府縣にも足らず、極めて些細なる小縣のみ、然るに此の猫額大の地に堂々たる都督府を設け、陸軍大將を都督とす、假令權力小なりといふと雖も、其の形容已に列國の目を聳てしむるものあり、若し日本にして、眞に滿洲を列國に開放し、機會均等主義を實行する以上、條約に由て得たる鐵道以外の利益の外は、主として南滿洲鐵道の經營に全力を注ぎ、其の沿線の庶務衞生敎育の如き、寧ろ擧げて會社に一任するに如かず、其の形全く實に過ぎて、却つて列國の猜忌を招き易き都督府を設くるが如き、寧ろ拙策中の拙策たり。

記せよ、露國が極東大守を置き、之に軍事外交一切の權限を委托したりし一事は、假令其の經營上必要なりしにせよ、爲めに列國の指彈を受けて著るしく專橫擅恣の名稱を蒙むりたりし事を。

試みに其の必要上より視よ、關東都督府は實際幾許の價ありや、長春、鐵嶺、吉林、奉天、安東縣、

營口、遼陽を始め、此の沿道一帶の居留地には、我が領事館ありて之を管掌し、而して鐵道附屬地の事務は南滿洲鐵道會社之に當る、都督府が租借地以外に爲す所は唯だ鐵道守備兵の指揮のみ、而して領事監督といふは空名のみ、然れども我が陸軍は精鋭十萬の血を流せし所と稱し、强ひて堂々たる都督府を設く、一種のヴアニチイと視るの外、殆んど名稱の下し得べきなし、陸軍の賢からざる虛名のために重要の官廳を置て、內は徒らに國帑を靡し、外は列國の猜忌を受く、吾人は竟に何の心たるかを知るに苦む。

遮莫、列國人は此の關東都督府なるものを視て、日本が條約以外更に大に爲すあらんとし、滿洲經營に全力を用ゐて、事實之を其の領域と爲すの禍心を包藏するものと爲さん、少くも露國の極東大守と同一に視ん、斯くして門戶開放機會均等の聲明を空名なるが如く誤解せしむ、愚に非ずして何ぞや。

露國が旅順大連を租借したりし後、着々滿洲を併呑して、竟に極東大守をも設くるや、當時の米國々務卿ヘイ氏は、滿洲の淸國領土たるとを唱へ、門戶開放機會均等主義を以て大に露國を責め、而して日本政府及び國民も亦同一態度を執りたりしにあらずや、然るに日本の戰ひに勝つて、露國の租借權を繼承するに方り、關東都督府てふ不似合千萬なる大官廳をも設け、恰かも當時の露國と同一筆法を用んとす、曾て露國を攻擊せし米國が今や日本に對して再び同一の非難を繰返すべきと、蓋し論理的必然の結定ならずや、米國が未だ陽に日本を非難せざるは、思ふに外交的辭令のみ。

日本政府及び國民は、嚮昔の心事に照して深く自省せざる可らず、旅順大連の租借權を露國より得た

るも、長春以南の鐵道線を得たるも、其の沿線に於ける利源開發の優先權を得たるも、總て戰勝の効果にして、廿億の巨資を投じ、十萬の生靈を殞したる主要なる結果に外ならずと雖も、門戶開放機會均等も亦露國及び淸國と約せし所たるに止まらず、實に列國に誓へる所ならずや、曾て露國を責めたる所を敢てするは、斷じて正理の許さゞる所ならずや、誠實に條約を履行し、人道正義に戾らず、戰勝の効果を正當適切に利用して、一步も不義不正の範域に踏み出さゞるは、日本政府及び國民の應さに眷々服膺すべき所也、若し敢て露國の疇昔に倣ふて、傍若無人の擧に出でば、更らに第二の日本來りて、正義人道を提げて其の罪を問ふとなきを保せず、否、正理は斷じて永く之を容さゞる也、列國は到底永く之を容認せざる也。

（四）

所謂滿洲鐵道中立と稱せらるゝ米國の提議は、多くの新聞紙の唱ふるが如き甚だ唐突なるものとは做す可らず、露國の滿洲經營に對して、第一着に門戶開放機會均等を提唱して、敢然として露國に當りしものは、日本の外先づ米國を推さゞる可らず、今や日本にして寸分だも機會均等門戶開放の聲明に反するの形迹又は傾向あらん乎、米國たるもの義として默止す可らず、必らずや應さに再び敢然として日本を責めざる可らず。

吾人の知る所によれば、南滿洲鐵道會社の將さに組織されんとする頃、日本は實に其の資本の調達に少からず當惑したりき、當時恰かも米國二大鐵道王の一人たるハリマン氏の來り遊ぶあり、井上侯の如

きは氏と會談を重ねて其の資金を内話し、而して氏は自から出資して南滿洲鐵道經營の一半を擔當せんと言ひ、侯等また甚だしく之を拒否せざりしが如し、而して侯の背後に於て一脉の政府當局と相通ずるものありしや疑ふ可らず、但だ事全く成るに至らざりしも、ハリマン氏は日本が米國の資本と協同して滿洲鐵道を經營する意向ありしと解せしも知る可らず、隨つて氏の歿後、氏の志を繼がんとする紐育邊の實業家が滿洲鐵道の協同經營を思ひ立つと、全く謂れなしとす可らざる也。

且つ露國も亦東清鐵道の一部、即ち長春哈爾賓間の線路を厄介視し、現に日本之を買取らんとすといふ噂さへ傳へられき、日本既に南滿洲鐵道を協同經營と爲すの意ありと信ぜる米國資本家等は、露國亦悦んで東清鐵道を賣却するものと信ぜしならん、現に浦鹽斯德に在る露人中には、黑龍江鐵道成る上は、東清鐵道を賣却し、而して日本の南滿洲線をも列國の手に移して、以て日本の滿洲方面に於ける野心を抑壓すべしと倣し、米國提議の黑幕中には、其の實獨逸の外、露國の潜めるとを想像するものありといふ、資本家の說に耳を傾むけ、兼て疇昔の門戶開放機會均等主義を懷ふ米國々務卿が、茲に滿洲鐵道中立案なるものを提議せる、斷じて唐突と稱す可らざる也。

（五）

然れども米國の提議は、到底實行す可らざるもの也、假令實行するも、却つて東洋に禍根を蒔くもの也、吾人は茲に於て米國の聰明を疑ひ、延きて其の誠實なるや否やをも疑はざるを得ざる也。

南滿洲鐵道は、素より日本が之を獲得する目的を以て露國と戰へるものに非ず、然れども日本か二十

億の巨資を糜し、十萬の生靈を殞するを顧みず、幾んど全く國命を賭して戰へる効果如何といはゞ、韓國に於ける宗主權を確立したる一事を除かば、甚だ馨しからざる樺太の南半部と、此の南滿洲鐵道とあるのみ、然り、之れを價に見積りて最も重要なるものは、單に長春以南の鐵道線と其の沿道の鑛山たる撫順炭坑とのみ、日本政府及び國民が此の苦痛慘憺たりし大戰役の紀念として、深く之を愛惜するは、應さに世界の諒とする所なるべし、隨つて日本政府及び國民が更らに多くの資力を投じて其の經營に鋭意するも亦列國民の諒とする所ならん。

故に日本をして南滿洲鐵道線路を手離さしめんと欲せば、義宜しく其の愛惜する所を賠償するに、相當の價を以てせざる可らず、日本が今日まで長春以南の鐵道に投資せる所未だ四億を超えず、然れども其の將來擧げ得べき收益を見込み、又吉林線其の他の布設權利を始め、鐵道附屬の事業をも買收せんと欲せば、少くも日本に與ふるに十億圓を以てせざる可らず、是れ亦世界列國の應さに諒として異言なき所ならん。

更らに長春以北の東淸線を買收するにも、少くも二三億の資本を要すべし、或は五億を要するも亦量る可らず。

試みに滿洲鐵道を買收するに、十二三億乃至十五億を要すとせよ、英米佛獨に加ふるに日露を以てせる六國のシンヂゲートは、素より之を負擔するに苦まざるべし、然れども此の巨資をシンヂゲートに仰ぎて而して鐵道を自國の有とする淸國は、果して此の負債を擔當するに耐ゆるや否や、強ひて之に耐ゆ

ると果して清國現在の利益なりや否や、抑も又永遠の利益なりや否や、或は之を管理するシンヂゲートは、滿洲鐵道を運轉して果して十二三億乃至十五億の出資に對する相當の收益を擧げ得るに足るや否や、一たび之を思はゞ、其の事の到底實行し能はざるを知ると、必らずしも智者を俟たざるべき也。

吾人はまた露國が容易に其の東清鐵道を賣らざるとを思はざる能はず、去年初冬西伯利亞を巡視し、現に哈爾賓に於て我が伊藤公と會見したりし露國大藏大臣コヽツオフ氏は、其の政府に復命するに、東清鐵道の重要にして斷じて手離す可らざるを以てしたりしにあらずや、露國は既に日本と戰ふて多くの生靈を殞し、多くの軍資を糜せるも日本に讓らず、否、日本以上の苦痛を喫したりしが爲めに、東清鐵道の新たなる價値は何人も之を爭ふ能はず、彼れが之を容易に賣らざるとは、猶ほ日本の如きのみ、日露兩國が絶大の苦楚を重ねて得たりしものを、一片の外交辭令に由て之れを收めんと欲するが如き、如何に黄金萬能の世なりとも、抑もまた無造作に過ぐ、日露兩國果して其の鐵道を手離さずんば、米國の提議は竟に之を奈何ともする能はざるのみ。

（六）

日露兩國若し幸ひに鐵道を賣却し、而して清國亦シンヂゲートの希望に應じたりとせよ、新たに滿洲鐵道を管理する方法果して如何ぞや。

若し列國シンヂゲートの委員に於て之を管理せん乎、列國委員間に利勢爭奪の暗鬪を生ずるや必然也、看よ、粤漢鐵道借款を引受たるシンヂゲートは、英佛獨に米國を割込ませて、僅かに四國に過ぎざる

尙ほ其の鐵道に供給すべき鐵軌車輛を始め、專門技術家等の分配に競爭あるがため、議未だ全く纏まるに至らざるとを。

滿洲鐵道には、馬賊の如き匪賊を豫防し守禦すべき軍隊と警察力とを要し、又其の鐵道附屬地の統治のためには、行政と若干の外交とを要す、普通に鐵道經營の外、此の政治的軍事的經營を併せ要す、此のシンヂゲートに加はれる列國委員の間、暗鬪を見ざらんと欲するも得べからざる也。

列國暗鬪の間には、淸國の外交また之に纏綿し夤緣すべし、即ち列國爭ふて淸國を操縱せんと欲し、奇變百出する間、竟に淸國をして土耳古たらしめ、滿州をして第二のバルカン半島たらしむるや必然也。

歐洲列國がバルカン半島の形勢を定むるや、伯林會議の結果洵に已むを得ざりしに出づ、然かも永く列國の煩ひを爲し、土國の禍機たりしと彼の如く、今尙ほ全く之を解決するに至らざるにあらずや、政治上の形勢未だバルカンの如き莫きに、好んで滿洲を第二のバルカンたらしむ、米國政府提議の意は、素より滿洲の平和に由て、關係列國の利益を策るに在ると論を待たずと雖も、其の提議を實行する結果は、其の目的と正反對に、却つて滿洲に永遠の禍原を据ゆる也、吾人は東洋の平和のため、世界の人道のため、未だ容易に米國の提議に與みする能はず。

知らず提議者たる米國政府は、能く之に處する方策を有するや否や、而して米國人も亦敢て平和の確保を證し得るや否や、吾人は先づ之を聞かんと欲す。

米國々務卿ノックス氏の提議が遥かに前國務卿ヘイ氏の清國に對せる態度に倣へるものたるや論を待たざるべし、然かも其の最大動機が其の國資本家の言に出でしや疑ふ可らざるに似たり。

米國の資本家は、幾んど世界無比の重き海關税に由て、多くの外國品輸入の口を杜ぎ、其の國內の製作品を高價ならしめて、以て思ふがまゝの巨利を占むるもの也、随つて彼等の組織せるトラストは、一面に黃金を政府及び政黨に與へて此の世界無比に重き海關税を支持し、苟くも機會あらば更に之を重くして益々暴利を貪ぼらんと期するもの也、彼等の資本は實に斯の如くにして作り上げられたるもの也、其の純正無垢のものと稱するを得ざるや勿論ならずや。

ピアルス氏曰く、米國は凡そ一千一百萬俵の棉花を産し、棉作地方には多くの工場ありて之を紡織し、而して其の職工賃銀亦英國よりも廉なるに、米國綿製品の輸出額は一千萬圓に過ぎず、然るに原料を米國より買ひ、太西洋を横ぎりて之を紡織する英國の輸出額は六億圓なりと、且つ同氏の計算によれば、米國の製鐵トラストが其の國內に賣付くる鋼鐵一噸の價は九十六圓なるも、英國に賣渡す價は六十圓に過ぎず、而して米國の輸入鋼鐵税は每一噸廿六圓八十八錢なりとす、故に米國の資本家は、未だ其の製作品を多く國外に輸出して以て英獨諸國と競爭することを得ず、唯だ海關税の甚だ高きを恃み、トラストの力に由り、高價に國內のみに賣付けて巨利を占むるもの也、随つて其の資本も、之を製作品に化して國外に輸出せず、單に資本其のまゝとして輸出せんと欲す、而して其の最先に目を着けられしは憐れむべき清國是れ也。

米國資本家は、淸國に於て先づ川漢粤漢四鐵道の借款に割込みを試みたりき、然かも其の事成れるが如くして未だ全く成らず、更に所謂錦愛鐵道(錦州愛琿間)を企てしも、露國が其の齊々哈爾聯結を悦ばざるがため容易に成立の見込あらず、玆に於て乎竟に滿洲鐵道買收を思ひ立つに至れる也。

彼等資本家は所謂商人利を見て義を見ざるもの也、否利益以外他の事情に通曉せざるもの也、素より日露兩國が滿洲鐵道を手離すの難易を解せざるべし、又素より淸國の利害を慮からず、素より東洋の治亂の如き、寸毫も念頭に措かざるべし。

ヘンリー、ジョージ氏曰く、米國の强盜は途中に人を捉へて突如拳銃を差向け、ホールドアップと大喝して双手を差上げしめ、悠々として其の人のポケットを探り、委く其の金錢を捲き上げて去る、彼の資本家が淸國に放資せんとする亦畢竟ホールドアップを叫ぶ也、强盜的に强いて其の資本を放下せんとす、果して放下したる後は、何等不正の事をも敢て爲さゞるなく、竟には政府を强ひて、海軍を擴張せしめ、砲火を淸國に用ひしめんと、言說矯激に過ぐと雖も、米國資本家がトラストを造り、政治を左右して憚からざるに視れば、何人もヂョージ氏の言を否定す可らず、吾人は米國資本家が政治を左右する實例を示すため、左に再びピアルス氏の說を引用せん。

米國の總選擧來る每に、人民に對する課税權トラストとの間に取引行はる、政黨の選擧掛は謂へらく、卿最も有利なるインヴエンストメントを爲さずや、若し我黨敗れんか反對黨は卿に與ふるに、卿を貧ならしむべき自由貿易を以てせん、卿宜しく現金を提げ來つて我れに計れと、斯くして多くの關税成立し保護税益々重きを加ふ。一八六七年太平洋汽船會社は政府より數百

萬弗の獎勵金を得、一八七四年其の滿期となるや、之を繼續せんとして其の社長ストウノツウエル氏は、百萬弗（二百萬圓）を周旋家アルウインの手を經て議員間に分配せり、議員シューイーカア氏の如き、他の議員にも分配する筈にて三十萬弗（六十萬圓）を受けたりといふ、一八九六年の總選擧後、紐育の國民市立銀行の役員は、大藏省に對して秘密の談判を開けるとあり、蓋し總選擧當時此の大銀行は政黨の資金掛を勤めたりし故也、斯くて三年の後大藏省は此の大銀行に對し、ウヲール街所在の當稅關の財産など實價の半額なる三百廿六萬五千弗（六百卅五萬圓）にて拂下げたりき、總選擧の時、全米國民の四割はレパブリカン黨に、四割はデモクラット黨に投票し、殘り二割の投票が兩黨の決勝點數なり、故に之を說くに利益の誘約を以てし、次ぐに投票の買收を以てす、而して其の費用は皆トラストの出す所也、世或は無政府黨の害を稱す、然れども彼等は單に一二大官に危害を加ふるのみ、トラストは全米國民を危害す。

トラストは新聞紙を腐敗せしむ、米國の大新聞紙は其の成立維持總てトラストの力に由る、新聞紙收入の大部分を占むる廣告料は大抵トラストの支拂ふ所なれば也、總選擧の時には最も多くの資金を新聞雜誌の操縱に投ず、故に米國の新聞雜誌は、其の眼中トラスト資本家の外に一物なし。

黄金萬能主義の最も露骨なる米國に於て、資本家が總ての政治を左右すると實に拒ぐ可らざる勢ひなるべし、其の資本家が今や國際的勢力となつて、遠く東洋に雄飛せんとするに當りても、亦其の慣用手段を用ゆると、亦避く可らざる狀勢乎、吾人は深く以て考慮する所莫かる可らざる也。

但だ斯の如き動機を主として、米國が所謂滿洲鐵道中立案なるものを提議するが如き、吾人其の聰明を疑はざるを得ず、而して其の確乎たる誠實の信念なき亦知るべきのみ、曾てワシントン、リンコーンを有する米國にして今則ち斯の如きは、吾人の痛恨嘆惜せざらんとするも得ざる所也。

吾人は思はず多言して玆に至れり、最後に結論として、吾人の希望を率直に言明し置くべし。

日本政府は宜しく關東都督府を全廢すべし、大島都督近時其の主張の容れられざるを理由として、公然辭表を提出せりといはずや、是寧ろ意外の好機也、都督の辭表を許すと共に、斷じて都督府をも廢すべし。

清國と交はるには、總て公平と誠實とを以てすべし、而して南滿州鐵道會社其の他官民共に、我が條約上既得の外は、總て門戶開放機會均等の大精神により、一視同仁の態度に出づべし、淸國人を輕侮して虐待す可らず。

滿州の如きは到底力瘤を入るべき土地に非ず、過度に之を愛惜するは、達識ある經世家の事に非ず。

米國政府は宜しく淡泊に其の提議を撤回すべし、徒らに之を固執して、其の間に不遑の外交家に乘ぜらるゝが如きは、決して東洋平和のために非ず、否人道のために非ざる也、若し日本政府及び國民にして、滿州に於ける門戶開放機會均等の聲明に反するが如き形迹又は傾向あらば、腹藏なく之を質問し忠言して其の矯正を計るべし、明治四十一年十一月の日米覺書は炳として存せるにあらずや、而して是れ親交國の情誼ならずや、而して又實に平和人道のためならずや。

新らしき家風

舊道德多く廢れて新道德未だ大に興らず、是れ我が國現在の一弊也、而して新らしき家風の未だ興らざる、また最も弊ならずんばあらず。

昔は武人の家に大抵家風なるものありき、其の養子又は妻を離緣するに、往々家風に適せずといふを口實にしたりしが如し、所謂家風なるもの何ぞやと問はゞ、常に家風を口にするもの具體的に之を說明し得ざりしやも知れず、否、多くは恐らくば能はざりしならん、然れども武人として、長幼の禮を正し、上下の分を嚴にして、交際の作法を定めて漫りに之を破らず、格式に應じて子女を敎養し、分に應じて生計を立つるが如き、自から侵犯し易からざるものあつて、所謂家風を馴致したりしが如し、必らずしも君に事へて忠、一身を君の馬前に捧ぐるのみの精神に止まらざりし也。

斯く一定せる嚴格なる家風あり、由て以て子女を煦育す、人をして型式に泥ましむる傾向なきにあらざるも、然かも武人の子女が概して品格嚴正に、自から氣高き風格を有せるは、實に此の家風に陶冶せられし賜ならざらんや、知るべし家風の必要なることを。

嘗て某藩の甲士、江戶參勤を終へて鄕に歸るや、友とし善き乙士を訪ふ、乙士慇懃を盡し、置酒して之を饗し、其の妻をして盃を侑めしむ、酒酣に興到るに乘じ、甲士詳らかに語るに芳原遊興の事を以てす、乙士の妻暫らくして其の室に退きて出でず、乙士呼べども應ぜず、怪みて襖を排し看れば、懸刃に

伏して既に歿せり、而して傍に一遺書あり、發きて之を披けば、其の大意に曰く、妾現に家に在て公等に侍す、然るに妾の前に於て公等縦に花街の事を語る、是れ啻だ妾を侮りて然るのみにあらず、實に家風を辱かしむる也、妾の在らざる處、我が家に在らざる處に於ては、公等何を語るも諱むを要せず、唯だ妾苟くも家に在り、茲に汚れたる花街の事を語談せらるゝに至ては妾活きて家祖に見ゆるの顔なし、死して以て其の罪を謝すと、兩士忸怩として愧づ、事藩主に聞ゆるに及び、深く死せる妻の貞烈を賞し兩士の行爲を以て武人に有るまじき仕業と爲し、嚴に閉門致仕を命ず、兩士益〻恥ぢ、竟に各剃髪して士籍を脱したりきといふ、婦の峻烈寧ろ常識を逸するに近きも、家風を主持するの嚴なる、寧ろ大に欽すべきものなくんばあらず。

此の點よりいへば、故伊藤公を始め、多くの貴紳が公然其の邸宅に卑しき婦女を出入せしめ、嬉戯談笑を縦にするが如きは、殆んど家風品位の何たるを解せざるものにして、實に言語に絶せる痴態とす、斯る家風に煦育陶冶せらるゝ士女にして、眞に尊ぶべき品格を有せんと容易に望む可らざる也。

英國人はホームを有す、是れ實に英人の誇りとする所たり、ホーム通常之を家庭と譯するも未だ當らず、蓋しホームなるものは、崇高にして極めて嚴正なる家風を有する家庭の謂にして、英國人は之を其の本來の誇とするに止まらず、苟くも寸分だも之を毀傷するを許さず、世界の估店殆んど利を看て義を知らざる間に於て、英國商人のみ義に堅く禮に嚴にして、曾て紳士の體面を汚すこと莫きは、實に此のホームの賜にして、英人一般の有する崇高なる人格は、全く此のホームの煦育し陶冶する所なりとす。

英國人はかの動もすればイングリシユ、マザアなる語を口にす、所謂英人の母の義にして、其のホームを主持する實に此のイングリシユ、マザアの責任とせらる、彼の某藩乙士の妻の如きは、恐らくばイングリシユ、マザアに酷だ相似て而して近きもの乎。

思ふに我が武人の家風なるものも、多くホームに類したるものならざらんや、玆に於てか吾人は我が日本の家庭に於ても、嚴正にして而して常識あり、敬虔にして而して崇高なる信念を確守する家風を馴致せんとを望む、今の稍々教育ありと稱せらるゝ婦女の如き、恰かも家を成すに大なる理想あるが如くに言做すも、其の所謂理想なるものは、畢竟一種の虚榮心を恣にするに過ぎず、稍々賢きものに在ても、事を規則的にして家を治むるといふに過ぎず、士女をして新らしき音樂其の他に趣味を有せしむるといふに過ぎず、嚴正にして常識あり、敬虔にして而して崇高なる信念を確守する家風を作るが如きは、殆んど其の想ひ及ばざる所なるが如し。

新時代には新道德を要す、最も新らしき家風を要す、一家の主たる男子殊に婦人は、深く考ふべし、婦人を以て情慾を恣にする玩弄物と做し、男子を以て錦衣繡帶、珠玉黃金を購ふビル、ペイヤアと做すが如きは、寧ろ亡國の先驅のみ。

公論

米國の極東策

田川大吉郎

一外交家と稱する者あり、如何の人なるやを知らざるも、昨年十月「米國の對外政策」と題する一書を著はし、較々中外の視聽を動かせり、中に「極東」と題する一篇あり、日本及び支那の近情にも論及して、格別事情を曲盡したりと謂ふに非ざるも、詞鋒態度、共に明白、日本外交家の半呑半吐の狀に似ざるを喜び、敢て大意を摘錄して、貴社に寄せ、江湖に問ひ、併せて自ら記憶に資せんと欲す、文字の粗笨は只愧縮するのみ、

吾人と極東諸國との關係は、共和の初政に當り、新英洲の商人が早くも支那海に旗を揭げし頃より始まり、其商戰には吾人は歐洲諸國民とつゆ差はざる足場を有す、現に日本島帝國は吾人が他の列强に先んじ世界商業のため開國せしめし所なり、左れば米國と極東諸國との關係は、米國の歐洲諸國に對する關係と全然別種の基礎に立つものなり、吾人は成し得る限り歐洲諸國との交渉を避け、一圖に米大陸の發達をのみ期圖したるも、極東に對しては必らずしも然らず、最初より歐洲諸國と同等なるべき主張を有したり、地理的にも政治的にも經濟的にも吾人の利益は吾人の此主張と正しく相一致す、

米國が極東に對して所謂モンロー主義以外の態度を執持すべき原因を、歷史的に辨證する所、以て著者

の抱負を窺ふべし、極東に於る米國の態度は、事實著者の謂ふ如く、其餘の諸國に對する態度と、夐かに其撰を異にするもの由來既に久し、

極東に對する米國の政策は常に平和的商業的にして、露佛二國が相胥ひて殖民帝國を支那に建設せんとし、獨逸も同樣の計畫を抱き、英國すら尚其分割を豫想せる危急の際にも、吾人は賢しく自ら抑制したり、吾人は彼等極東國民に對し、多大の友情を示し、公平なる行爲を示したる許多の明證を有す、

非律賓の領有は、吾人を極東勢力圏の一員たらしめ、從つて從前夢の如く考へたる極東の事相を、此時以後痛切に思考するに至りたるに拘らず、吾人と極東諸國との關係は少しくも渝らず、吾人は諸國の勢力平均を破らず、非律賓島民に對しても、同島民の國民性以外他の何等の向上心を阻害せず、此上極東に領地を擴むるの野心は固より無く、吾人は極東民に對し、政治的異圖を有せざる唯一の信頼さるべき國民として最も倚親せられたり、

其說述の丁重なるだけ其用意も深し、誰か米人の外交的手腕を粗笨なりと謂ふ者ぞ

此る好親の情の半世紀の久しきに亘りたる後、然も吾人が露國に對する傳來的情誼を無にしてまで日本に異常の好意を表したる曉、日米戰爭の噂は突如として起れり、輕微なる學童問題は轉じて太平洋の主宰者問題を喚起し、兩國の狂噪的論者は頗る敵意の喚發に力めたるも、幸に兩國の政府には人あり、本論爭の終に何等の目的を有せず、何等の問題をも解決するものに非ざるを看取し、悍然之を壓止し去りたり、太平洋は兩國の爲に極めて廣し、太西洋が現に一國の獨占を容さゞるだけ廣きよりも更に廣し、

洵に然り、太平洋の廣さは日米兩國を相駢んで馳逐せしむるに十分の廣さあり、日本は固より之を獨占すべき野心を有せず、米國たるもの少しも日本に戒心するに及ばざる筈なり、而るに比年、頻りに騷ぎがちなるは何ぞや、窃に疑ふ、米國は太平洋の廣さを知らざるに非ざるかを、

何人も太平洋航海權の大部分が、終に日本の手に落つべきを疑はず、彼等の海上生活に適當せる、其勞銀の低廉なる、其生活狀態の質朴なるに對しては、獨り吾人のみならず、總ての海上國は何れも其競爭を危殆に陷れらるべし、現に太平洋に泛べる少數の米國船は、日本諸會社との協約の効に依り僅に支持せらる、若し此協約なくば、政府が思ひ切たる大膽なる保護を與へざる限り、米國の商船は輙く同海面より驅逐せらるべきなり。

左れば太平洋上の日本船に對する米船の戰爭は到底不滿足の結果に終るべきも、然も兩國の一國が他の一國を擊破して完全なる優勝權を同海上に制せんことも亦期し難し、且又盛んに吾人の物貨を購ふ日本は吾人に取り望ましき顧客なることをも忘るべからず、兩國を結ぶの商業は互に兩國の益を爲すべし、其一方の疲弊は直に他方に反響すべし、幸にして兩國の外交には共通の利益に由り之を連結する資源極めて多し。

日本は朝鮮に對し或は極度の保護主義を適用することあるべきも之を滿州一帶に擴延し能はざるべし、吾人は極東に對し只門戶開放機會均等の利益に與からんことを求む、日本も亦同樣の態度を持すと聲言しつゝ其商業は既に多くの市場に於て着々其競爭者を凌駕しつゝあり、日本の工業は最早歐米諸國の競爭を怖るゝに足らざるなり。

米人の日本の商工業を視ること此の如きは實に過分日本の商工業家が甘んじて米人の此稱譽に當るを得べきは何れの日ぞや、

近時の兩國間難題の眞因は白人が黃人の不德を怖るゝよりは寧ろ白人勞働者が黃人勞働者の勤勉（德性）を怖るゝに在るべし、此關係に於て太平洋沿岸の諸國が其所謂「白人の國家」を維持せんとするに當り極東諸國の覺醒發達に伴ひ種々の故障を生し紛々止まる所を知らざるべきは自然の勢なり、問題は決して新しからず、白人の自治社會が黃人の經濟的競爭のため危險に瀕せりと感じつゝある所には何國にも此難題あり、現今の異狀は只日本國民が其受けたる別種の待遇と屆

辱とを憤慨すべき新占の位地を自覺したるに在り。

其論調の極めて激烈なるに徴すれば、意見の根本的乖離は到底避くべからざりしならんも、米國は日本の感情を此くまでに毀傷すること無くして今日と略ぼ同一の結果を收むるを得たりしならん、吾人は形式の必要を餘りに輕視するに過ぐ、特に東洋民族の如き天性多感にして儀式的なる國民に對し漠然之を不問に附し去りたるは輕忽の至りなり、例へば桑港に於る日本學童の入校拒絕は正當の處置なりしも、然れども此拒絕は須らく一般的なるべく殊別的なるべからざりしなり、先づ凡ての外國學童を拒絕し而る後個人的に例外復校を許容し、日本學童の少數をも又均しく此の如くなしたらば、所謂異種凌辱の不快を感ぜしめず、其忌はしき論爭は互に未然に防ぐを得べかりしなり、吾人は只此聊かの注意手加減を缺ぎ無用の凌辱を日本人に與へ意外の論爭を惹起したり、而も日本は吾人に對し尙感謝の負債を負ふ、其公論中には現時の不快を以て直に前時の記臆を抹殺せんと努むるものあらんも、從來和親の感謝的回顧は尙ほ優に事態を破るに至らざるを得べし。

將來を悲觀する理由なきも、無暗に樂觀するも亦太だ危險なり、移民問題の現解決は確に一時的なり、日本政府は其移民の制限を可とする間は忍んで之を繼續すべきも、論爭の骨子は依然懸案として存するにより何時再發せんも知るべからず、吾人の政策は此點に重きを置かざるべからず、吾人は未だ條約締結權と州權との關係に就き永久の解決を得ず、日本に對する將來の關係に就ても未だ確實なる調和的基礎を定め得ざるなり、

蓋國際的商議の成功は相互の利益の互惠的精神に本づくべし、而るに吾人は過去に於て何等の賠償を得ず若くば其要求だに爲さずして日本に對し外交的恩惠を與ふること寛に過ぎたり、千八百九十四年日本に於る我治外法權を抛棄するの日に當り現爭議の依つて係る勞働移民の制限權を得たるは事實なるも、然し乍ら當時に於ては今日よりも日本を讓步せしむること遙に容

易なりしならんに我政府は當時此權利の內容を一層遺憾なく明確ならしむるを期せず、近く日露戰爭の間にも吾人は日本に對し異數の好意的中立を守り同情を表し、更に朝鮮に於る吾人の利害の太だ大なるに拘らず、率先して京城公使館を撤廢せる如き、何れも吾人は對償なくして日本に惠與する所多かりしが、吾人の此の如き行爲は勿論機宜を制せるものなりしに相違なし——國際間に於る寬厚は必らずしも愚策に非ず——此際若し對償を要求せば、全力を盡して大戰爭に從事しつゝある際の日本は現紛議の發生を防ぐに足る多少の讓步を吾人に酧ゆるを以て日本のため得策なりと爲したるべきは理の最も睹易き所なり、而るに吾人は策此に出でず、近く協議の必要に會し、何か對償的讓步を迫らるゝの日は最早交換的利益の提供すべきもの無き今日と爲れり、

米人よ、〱、吾人は米人を友誼に厚き善隣の先進國として敬し、且其性質を率直、快活、大膽なる氣風の人柄として尊むに慣れたり、而も此數節の言は邦人の所謂めゝしき所あり、愚痴つぽき所あり、頗る平生聞きし所に違ふを遺憾とす、米人の再び此樣の言を爲さゞるを希ふと共に、米人をして此樣の感を懷かざらしむべく邦人の勉むべき途如何に就ては、讀者諸君の深く思ふ所あられんことを希望す、

太平洋より世界を周航したる我艦隊の示威的行動は大膽にして先見に富める企なりしことを證せり、世に平和の最も確實なる保障は他國の窺窬を容れざる程度にまで我武裝を嚴にするに在りと傳ふるもの宜なるかな、

米國は太西洋艦隊の回航を以て日本に對する示威と爲し、且能く其目的を達し得たりと爲せり、日本人特に外務省の感果して如何、

日米の間若し戰爭起るとせば、吾人の最も攻擊され易き地は日本人の多數を占むる布哇なることを忘るべからず、次てアラスカは我國を距る遼遠にして其住民の多からざる事情露西亞の樺太に於るに類す、又非律賓諸島あり、特に非律賓諸島に對する日本の位置は米

西戰爭に於ける米國の位地に顧する所あり、只吾人は當時の事情已むを得ずして同島を領するに至りたるも豫じめ同島を領有すべき何等の意圖も無かりしが、今日の日本も亦同島に對し何等の野心なき旨を聲言す、吾人は其聲言を疑ふべき理由なし、日本國民の手は今朝鮮に緊縛せらる、朝鮮國民の陰忍なる而して敵意の盛んなる、日本は現に豫想以上の難儀を甞めつゝあり、且滿洲及支那に對しても其爲さんとする所は殆ど意の如くならず、滿州統治權其他の問題に對する支那の執拗なる好爭的態度には日本たるもの殆んと意外の驚愕を喫せり、僅に事なきを得るは獨り臺灣のみ、此時に當り菲律賓を窺ふ如きは只さへ財政的危機を經過しつゝある日本の現狀に更に多大の窮乏を加へ危急に瀕せしむべし、加之、戰爭の曉に於ては現時の我が海軍力の優劣なる確に米國の勝利に歸すべし、固より吾人は戰爭を激發するの意なし、日本は善く忍ぶ、其報復に堪ゆる十分の實力を備ふるの日まで日本が善く隱忍するの適例は正に下の關平和條約の經過に明かなり、吾人は更に大に海軍の擴張を努むるに非ざれば到底今日の優劣を今後に繼續し能はざるべし、吾人は又、日露戰爭に際し日本が其渴望せる償金を得る能はざりしは平和の回復に對する我米國の干渉に基づくこと多かりし事情を忘るべからず、日本が有事の日を待ち米國の或領土を獲得するは之に對する報償として其當然に有する權利なりと思惟するは必らずしも偶然ならざるなり、

米人は日本に對し其艦隊の優勝を誇る、日本は米國に對し我艦隊の力果して劣弱なりと思惟するや否や、彼強しと信じ、我弱しと信ぜば戰爭の起るべき筈なし、日本は露西亞を以て畏るゝに足らずと信じ、露西亞は日本を以て一震の威輙ち倒すべしと信じ、互ひに他を侮りたればこそ戰爭は起りたるなり、米國の今此く信ずる所、露人の當年の所信に均しかりせは如何、危ふしとも危ふし、譯し來つて日米兩國のため危懼の情に堪へず、

但假令一抹の暗雲横はれりとも吾人にして軍事上及外交上に於る優勝の位地を失はずんば深く慮るゝに足

らざるべし、吾人は過去幾度か相互の利益のため進んで他國と協同したるの例あり、移民問題に於ても亦同一の途に出づべきなり、濠州、新西蘭、加奈太諸邦にて日本移民を排斥するの事情は正に吾人と同じく濠州にて亞細亞移民を制限する法律は吾人のよりも更に峻嚴なり、然れども其結果として收むる事態の容易ならざるべきは濠洲人の痛切に了解する所なれば、ディーキシ氏が今に當り强制的に國民皆兵の主義を採らんとするは、其亞細亞移民を排斥せる責任上至當の義務なりと稱すべし、

左れば將來危險の虞に對しては吾人は太平洋に面ずる英國の自治諸殖民地と合議する所あるべし、其一方法として吾人は歐洲諸國がブダペスト、カルカッタの如き首府に領事として外交官を派遣せる例に傚ひ、メルボーン、ウエリントン、及オッタワに外交官たるべき總領事を派遣せんことを期す、實に米國及び英領殖民地の利害は全く同一にして互に救援せざるを得ざるなり、英國は吾人が其諸殖民地と親和するを好意を以て見るの外なかるべし、我等の協同的働作は外交事件發生の際其主張に重きを加ふべければなり、日本は如何なる利害問題を論ずるに當りても其立場の吾人に反對なる以上同時に其同盟國殖民地の利害に反對するものなることを知らざる可らず、

去れど此に注意の必要は吾人が菲律賓諸島を領有せるより起る、吾人若し此等諸島を防備するの必要なくば、日本の吾人に敵するや全然無力なり、吾人は日本を閑却することを得、只夫れ之を所有するため英國と和協し有事の日に備へんとする必要に會するなり、日本は孤立を怖る、日本若し孤立せば國際間に無勢力となる、日本は之を知ること熟すれば、切に大英國と一體たらんことを望み、遂に英米兩國の相互的保證に同意すること其先年印度支那に關し佛國に對して互讓したると同一の結果に歸すべし、

且日英同盟は勢ひ永久なるを得ざるべき事情あり、清國に對する露國の侵略を防ぐは實に該同盟發生の基因なりしかど、事態は既に大に變じ、加之、英帝國の

國情より日本に對する利害の背馳反感の情漸く將に濃厚ならんとす、日露戰爭に於る日本の盛名は全亞細亞に響き渡り、曾て從順なりし亞細亞國民に往々獨立の夢想を喚起せしむるに至れり、日本の政治家は此頃印度に萌したる動亂の新機運を進んで利用せんとする意圖なきや勿論也、然も日本人が同一亞細亞人種をして印度人の英政府に對する憤怨愁訴に對し多少の同情を催ほすは人情の然らしむる所にして、其傾向は既に當初の動機以上の目的を達したる日英同盟の連鎖を解帶せしむるに至るべきなり、

日本は將來獨逸と親和するに至るべし、其全然軍隊的なる兩國の國家組織は互に好感を懷かしめ、そを背反せしむべき利害の衝突點毫も無く、且互に露國を怖るゝの情相同じ、支那に獨逸殖民帝國を建設せんとする希望は今や既に排棄せられ、其殖民地膠洲は譬へば擱砂の舟の如き位置に在り、又、抗爭の對手なし、

獨逸帝は曩に黃禍を警告せるに拘らず、日本は獨逸に取りモロッコよりも値へあり、其結合は平和の維持に多大の保障となり得べし、然も吾人は此結合より生ずる危機に注意する所なかるべからず、日獨の結合成らば菲律賓に對する獨逸の野心は、再び喚起せられん、此時吾人は英國と協力する外吾人の附屬國を維持し能はざるべし、斯る異變は萬々なしとするも、英國は吾人の領屬の所有に有効なる保障を與へ、及び吾人に敵意ある列強の侵害を抑止するに大効あるべし、

露國との協商に依り吾人の極東に於る位地を鞏固にするは又我が重要なる外交政策の一なり、今や極東に於る露國の野心は挫敗し、現狀維持を目的とする米露兩國の利益は互に一致すと謂ふべし、此くて米英露三國の協商成らば日本は勢ひ其要求に躊躇すべし、由來滿洲に於る清國は主權承認の希望は、露國の野心に胚胎したりしかど、今日は、露國の侵略的覇圖既に休せり此際米英露三國の協力を促すの必要は、數年前に於るよりも、又恐らくは數年後に於るよりも今日殊に善く諒せらる、理由あるべし、機會を捕ふるに可なる時に捕ふるは外交の能事なり、

満洲鐵道中立の論、如何にして起りたるかは知らず英露の二國が之に快諾を與へざりし事實も既に明瞭と爲れり、然れども米國の外交政策が英に結び露に結ばんとし、而して日英の同盟が中外より阻撓せられんとする形勢は日に〳〵急なるものあり、日本の政治家特に外交家が此際之に應ずるの策如何、朱欄高閣只鼾睡の響のみを聞くは長嘆の至りに堪へず、

吾人は支那の親切なる忠告者として從來の地歩を持續すべし、是れ決して困難の業に非ず、吾人の政治上の友誼は既に幾度か表證せられたり、最近拳匪の役の償金を同國に返付したる如き其動機は兎も角もあれ、尙ほ列强の退隨し能はざりし米國の好意に屬す、只、米人の深く自ら愼まざる、既に支那人にも往々不當の凌辱を加へ、遂に其反感を買ひ、米貨排斥の運動を惹き起し、餘波遠く新嘉坡行き貨物にまで及ぶに至りしを遺憾とす、支那に對するは猶ほ日本に對するが如し太平洋沿岸諸州の支那人に對し前述の勞なくして收むるを得ざりし成果の如きは、矢張、彼等の東洋的威嚴を害する多からざる範圍に於て、巧みに成功するを得べかりしなり、然も近年日本の支那に對する高壓手段により著るしく彼等の怨望を招ぎたるは吾人に取り不利益なる事情に非ず、日清二國に其共通的苦悶の餘、互に相提携するに至らしめざるを期するは、其事假令至難の業たるも、尙ほ我外交不變の目的たるべきなり、

此くて極東に於ける吾人の政策は、主として勞働狀態に胚胎し外交術の殆ど支配する能はざる動力により制限さる、然れども進んで我商業的利益を擴張し、且其最終の運命を吾人の決定に持ちつゝある菲律賓諸島を維持するは我確定の目的たらざるべからず、而して我外交の目標は勉めて移民排斥法の與ふる敵愾心を緩和する傍、併せて我防備を堅實にし以て何れよりも挑戰せらるゝ機會を稀小ならしむべく汲々努力暫くも息まざるに在り

米人の努力する固より可し、其努力の目標亦可なり、只米人の此く迄に努力する時、日本は如何に努力せ

ば可なるや、是れ大切の問題なり、余は此一部の書を得て米人多數の意思なりと謂はず、只此一部も亦米人一部の志を顯せるものなることを知り、日本與國の業、洵に容易ならざるを感ずること切なり滿洲鐵道は既に中立と爲らず、然れども滿州は終に中立地と爲らざるや否や、日本は之を中立地たらざらしむるの用意ありや、支那は之を中立地たらしむるに堪ゆるの實力ありや、滿洲の事も問題なり、太平洋の事も問題なり、多事の秋なり、日本與國の機此時に會す、日本たるもの頗る努めざるべからず、而して之を爲す如何、余は之を世に問ひ、且自ら問へざるを得ざるなり、

刑法政治

法學博士 花井卓藏

(一)

政治家の法律問題を閑却する今日より甚しきは無い、取り別け刑法問題はより多く閑却せられて居る、而して刑法問題の政治、經濟、道德、教育等に及ぼす影響を考へたならば其極めて重大なる關係を有することが分るであろう、罪惡の多きは良政治の反映でない、豊かならざる財政の下に罪惡の徒を養ふは國庫の歡迎する所でない。道德の進まざる教育の及ばざる是皆罪惡の源を爲すものである、如何にして罪惡を撲滅し健全なる國家の下に健全なる國民を作り成さるゝかを研究するは今の日本に於て急務中の急務に屬すると思ふ。

罪惡の社會に存在するは其國の貧窮なるよりも憂ふ可きことであつて、之あるが爲に社會の消費する金額の夥多なるを見ても、眞に憂ふべく恐るべきものであ

ると云ふことが分る、歐洲では罪惡の豫防に關する研究は實に進んだもので、學者、政治家は勿論、宗教家、教育家は熱心に攻究して居る、然るに我國では政治家は全く之を度外に措て顧みず、宗教家教育家も亦自己の職分外なるものの如く考へて、一に法律家の管掌すべき者の樣に心得て居る、併之は大なる間違である、此の如くにして政治、道德、教育の權威は光を失ひ、罪惡は茲に跋扈して來るのである、日本は實に數字上世界に於ける第一の罪惡國たることを示して居るが、誠に寒心すべきことである。

刑法は改正せられ、世界の模範刑法と迄推奬せられて居るが、御承知の通り刑法は唯紙であつてこれ自身に働の出來るものでは無い、政治家も之を助け、道德家も之を助け、教育家も之を助け、宗教家も之を助けて初めて運用の妙を爲すもので、獨り裁判官、辯護士に一任し置くべきもので無い。

（二）

刑法の閑却せらるゝに就いての不平談は暫く措き、既に罪惡の蔓り居る以上は、其禍根は之を絕たねばならぬ、而して罪人の數字を統計の中から少くしやうとして、それが爲に罪惡を見逃すといふ譯には固より行かぬ、斯る場合にありてこそ根本的療治を施して、禍根を長へに絕つの道を講ぜなければならぬ、それが爲一時牢獄に多數の罪囚を繫ぐことがあつても國家の將來の爲には忍ばなければならぬ。

我輩は差當り不快に感ずる罪惡は政治道德と商業道德の頽廢より來る犯罪である、官吏議員たる身分を有しながら賄賂の罪を犯すが如き、紳士紳商とも云ふべき人にして、財產に關する罪を犯すが如き、その影響するところは決して普通人の詐欺、竊盜の比ではない、所謂瀆職代議士として謳はれたるもの或事件の如き、詐欺橫領の罪ありとして檢擧せられたる某々會社の事件の如き類例は此外にまだ幾らもあらうと思ふ、此種のものに對する罪惡はドシドシ檢擧して遠慮なく處罰を施すが至當であると思ふ。

改正刑法の規定によれば賄賂に關する罪は之を收受

し、之を要求し、之を約束したる時は三年以下の懲役に處せらるゝのである、因つて不正の行爲を爲し、又は相當の行爲を爲さゞる時は十年以下の懲役に處せられる、仲々重い刑罰であるにも拘らず、彼等は或は運動費と稱し或は周旋料と稱へ、之を受くるを以て恰も職務上の役德てもあるかの如くに心得て居る、而して巧に罪迹を掩ふて世上を瞞過して居る、此の如き政治家が果して國民の儀表として許し得べきてあろうか、賄賂の罪は最古の法律ても嚴重に處罰せられたもので、所謂「カルパニヤ」法と稱するものは紀元前百四十九年に發布されたものだが、其法律に依れば賄賂に依て得たる財産の全部を沒收し、併せてその額に倍する若くは四倍する罰金を課し、官位族籍を褫ひ、時に或は遠島に謫せらるゝこととなつて居る、遠島といへば、今日の法律からいふと無期徒刑に當るのてある、それを今日の刑法が五ヶ月十ヶ月の刑に處するのは寧ろ寛大の處分といつて宜しい、然るに此の寛大なる處分すら勵行はせられて居無いのてある、多くは見て見ぬ振、

知つて知らぬ振てある而して彼等の罪惡を助長せしめるといふ事は[illegible]は常に逸せられて居るのである。政治社會の腐敗は人皆之を言ふ、然れども根本的に之を正とするの道に至つては、人の策を授くるもの無し、我輩は此點に向つて、刑法政治の威力を示したいと思ふ。

又信用を以て立たなければならぬ商業家は虛僞欺瞞を是れ事とし、黃白の前に正義なく、算盤の前に道德なしてある、所謂紳士紳商輩が、罪惡を資本として不正の利益を働くものの多き今日より甚きは無しと思ふ、見よ彼等の邸宅を、別莊を、何れか不義の結晶ならざらんやだ、御用商人としては官吏と結托し、會社重役としては彼等相互の懐を肥して株主の利害を顧みず、好んて其任務に背き、財產上の損害を生ずべき行爲のみを是れ事として居る、此の如き商業道德の頽廢は直に國家財政の上に至大の影響を及すものてある、現行商法は種々なる規定を設けて之が取締をなせりと雖も、多くは罰金科料の制裁に過ぎぬ、我輩は此等は

全く刑法管轄に移し、刑法政治の威力を以て根本療治をして遣りたいと思ふ、聞くところによると、目下法律取調委員會に於て議しつゝある商法改正案には、七年五年といふが如き自由刑が盛られて居るとの事だが、誠に快心の至に堪えぬ。

（三）

罪惡の發生する原因は多くは飢渇災厄に在る、所謂妻は病床に臥し兒は飢に泣くといふ憐むべき境遇から起るものだけれど、それ等の犯罪は、その心寧ろ憐むべきものであつて、又その害も比較的小なるものである、之に反し飽食暖衣より起るものに至つては、堂々たる政治家にして、實業家にしてその身は富有安樂の境に在りながら己れの位置と職分とを利用し、犯すところのものであるから、その心憎むべくその害も亦大なるものである、刑法政治の威力はその憐むべき者に専ならんよりは、その憎むべきものに専なるを必要とする、願はくは世の識者刑法を閑却するところなく、罪惡の爲に國家の被るべき損害の大なるを考へ、政治、經濟、道德、教育との罪惡に及すべき影響の少なからざる所以を考へ、此點に向つての救濟策を講ぜられんことを希望する、而して先づその大に國家社會に害毒を流し、幾多の犯人を威嚇するに値ある政治家實業家輩の罪惡を遠慮なく檢擧して刑法の威力の大なる所以を示さんことを望むの情に堪えぬ。（筆記校閲濟）

所得稅法改正案の内容

松山忠次郎

今度議會に提出せられた稅法整理案なるものは前から議會と約束のあつたものである。即ち日露戰爭中に

臨時に非常特別税を課し、戦争が終れば一年の中に之を廃止するといふ事であつて、是が財政が膨脹して一年経つても廃止することが出来ず、戦時税が永久税となつて了つた。其永久税とする條件として税法を整理するといふ事になつたのである。そこで昨年の議會にも税法整理案が提出された。然し其時には一向に人望がなく、其儘議會に握り潰された。そこで更らに調査して今度第二回目の税法整理案を提出したのである。第一回目の時にも無論所得税法を含んで居つた。否、第一回目の時は主もに所得税の批難が問題になつて議會に握り潰されたのであつた。今度の税法整理案にも更らに所得税法を改正して提出してある。成程今度の所得税法改正案は前回の改正案に比ぶれば餘程輕くなつて居る。が、然し、其主義方針は前回のと同一である。従て今度の税法改正案中でも所得税が一番の問題になるだらうと思ふ。

今度の所得税法改正案で著しく目に立つもの、即ち其特色ともいふべきものは、稍々社會主義の臭味を帯びて居ることで、従て累進率の程度は今迄より幾分か急になつて居る。之を言換へれば個人の所得については今迄は總て一様に課税して居つたが、今回の改正案に於ては財産から來る所得と勤勞から來る所得との二つに分ち、勤勞から來る所得に對しては財産から來る所得に對して二割を減じてある。而して累進率の最も急進するのは合名合資會社に對する税率である。要するに餘程社會主義的傾向を帯びて居る改正案である。

元來國家が課税權を利用して貧富の懸隔を救治せんとするは殆んど世界の大勢である。どこの國でも近來皆さういふ財政方針を執つて居る。英國でも現に議會解散の問題になつて居るのは、今の自由黨内閣で餘り社會主義を帯びた財政政策を取るとの批難があつた爲めである。従て日本で所得税に累進率を適用するのは天下の大勢に随ふのである。累進率の可否は今や殆んど問題に非ずして、只其程度如何が問題である。處で個人の所得には累進率を適用することが出來るが株式會社にはさうは行かぬ。株式會社の株主の中には金持

もあれば貧乏人もある。從て之に累進率を適用することが出來ぬ。そこで今度の改正案にも個人の所得に對しては千分の十七より千分の二百まで段々税率が累進するが株式會社は一樣に千分の六十二半を課することになつて居る。これは止むを得ない事であらうが、今一つの問題は合名合資會社の所得を如何にするかといふ事である。株式會社は澤山の所得があるにしても之を多くの小さい株主に分配するものであるから、餘り高い税率を課する譯に行かない。中には富者もあらうが貧者も亦ある。個人は大きな所得あれば必らず金持であるから累進しても構はぬ。處が合名合資會社といふものは恰度此個人と株式會社との中間にある。所得全體が一個人の所得になる譯では無いが、株式會社の如く細かく分けるものでも無い。從て合名會社若くは合資會社の所得といふものは、大きくなればなる程、一個人に集る所得が大きくなると略ぼ言へる。そこで株式會社には累進率を用ふることが出來ぬが合名合資會社には用ひても構はぬ事になる。今度の改正案にも合名合資會社には矢張り累進率を取つて居る。只此處に問題となるべきは株式會社と合名合資會社との負擔の權衡問題である。株式會社は一律の税率であるから十萬圓の所得でも百萬圓の所得でも率は同一である。然るに合名合資會社は累進となるが故に、大きい會社は株式にする方がよいといふ事になる。小さい會社ならば株式よりも合名合資の方が得策であるが、會社が大きくなつて所得が大きくなるとすれば、合名合資會社は株式會社に比して非常の重税を負擔することになる。そこで行々は日本に大きな合名合資會社は無くなる譯である。三井は先頃までは合名會社であつたが、もう既に株式會社になつて居る。之が爲めに今度の改正案で重税を負擔することを免れたが、三菱とか住友とか古川とか村井とかいふやうな合名合資會社の大きなものがなか〳〵澤山ある。此等の會社は其合名合資なるが爲めに非常の重税を負擔することになり、株式會社になれば負擔が餘程少くなる。夫れ故に合名合資會社は今後段々少くなるものと見ねばならぬ。

それならば合名合資會社の大きなものが無くなつても日本の經濟界に何等の影響があるかといふに、さうは行かぬ。餘程の影響がある。政府の所得税の收入が多くなるか少くなるかのみの問題でない。元來株式會社といふものは、いふまでもなく、多くの小さい株主から出來て居るもの故、株主から目前の利益配當を要求される。從て當分は損をしても終に遠大の目的を達するといふやうな事業には株式會社は適さない。之に反して合名合資會社は、小數の資本家の相談から出來るもの故、三年五年は無配當でも構はぬ。後の目當から事業を起し得る。であるからして各國共に大きな事業は株式會社によらずして、動もすれば合名合資によつて成功するのが多い。歐米の例を引いて見ても鐵道とか船舶汽船會社の如きものは其會社が成立して事業が緒に就くや否や必らず相當の利益があり、そして配當が出來る。夫れ故に此等の事業は株式會社に適する。日本では個人若くは合名合資で鐵道を營業すること出來ぬが、歐米何れの處でも鐵道會社、汽船會社は大きなものは株式會社である。これ等の會社が株式會社たるに適當せるによるのであらう。從つて鐵道會社、又鐵會社といふやうなものは、會社が設立しても必らずしも利益あるものではない。職工なり技師なりが段々熟練を經、又世間の信用を得るに從て段々利益が增進するものである。さういふものには歐米共合名合資の會社が多い。英國のアームストロング、獨逸のクルップ、米國のカーネギーといふやうなものは皆株式會社でない。此等の會社は今日では世界に有名な盛大な會社であるが、創立の初めから斯く盛大なものではなかつた。隨分無配當も損失もあつたらうと思ふ。然るに若し之が株式會社であつたならば如何であつたらう。株主はそんな事を我慢せず、或は篤に會社を倒したかも知れぬ。合名合資會社か若くは個人の經營なりし故、今日の盛大を到したのである。かるが故にこういふ種類の事業は合名合資の如き少數の人が寄てやるのが適する。然るに今度の所得税法改正案によれば、合資合名會社の大きなものには株式會社よりは餘程の重

税を課し、場合によれば三倍五倍の重税を課することになる。爲めに今後大きな合名合資會社は日本に跡を絕つに至るかも知れぬ。從て斯樣な税法は經濟上の大問題といはなくてはならぬ。但し先にいふ通り、個人の所得に累進率を應用するは當然である。從て合名合資會社に對しても幾分の累進率を適用するは論理上自然の結果である。故に根本から之を批難することは出來ぬが、合名合資會社の累進率の程度については大いに研究しなくてはならぬ。殊に今度の改正案は現行所得税法に比較して見れば、外の税率は皆輕減されて居るが、合名合資會社には累進を殊に著しくした形跡が見える。之が今後の問題であらうと思ふ。所得税法改正案について私の見る所をざつとお話すれば此通りである。

工場法と生糸工業

法學博士 桑田熊藏

多年の懸案たりし工場法案は已に公表せられ議會の問題たるの日は遠きに非るとゝ思ふ今回公表されたる法案は極めて簡短にして且つ幼稚なるものである之を歐洲各國の立法と比較するときは實に雲泥の差あるとを認めざるを得ない若し各國の社會改良家をして之を見せしめば殆んど一笑に附し去ることであらう去れど我國工場の現狀に徵し勞働者の慘狀を想ふときは工場法の制定は實に刻下の急務たり一日も之を忽にする能はざるの事實は終に余輩をして是の如き法案に對しても尙ほ涙を揮つて賛成を表せざる可らざらしむるのである徹夜業廢止の規定は特例の爲めに眼瞞せられ了り又勞働時間の制限は十二時間の長きに涉り而も尙ほ此

以上に延長を許す場合あるやに聞けり是等の事項たる各國工場法の骨子たり神髄たるものである然るに法案の規定は是の如し余輩は理想としては本案に對し同情を表すること能はざるも事實の問題としては我國工場法の第一着歩として多大の冀望を屬する能はず已むなく之を以て滿足せざるを得ないことゝ思ふのてある

今回の法案は法律に依つて大體の規定をなし命令に依つて種々の特例を設け實施の方法を定むるとゝなせるを以て法律其物に向つて可否を云ふの範圍は極めて狹隘てある去れど大體に於て各種の工場主は稍々贊成の意を表し多少の修正意見を立るも絕對的に反對の態度を執る者なきは余輩の喜ぶ可き處てある社會改良の思想が我國民の頭腦に浸漸せる結果に出るか將た我國の工場主が工場經營の方法に就き多年の經驗を積み相當の制限を設て之を顧みざるに依るか何れにしても余輩は我國運の前途の爲めに一大白を泛べざるを得ないのてある然るに反對の聲は先づ一部の生糸業者より起り恐らくは反對の急先鋒たる者は生糸業者に非るなきかと思はるゝなり是れ余が特に本論を草する所以てある從來生糸工業者の口より出づる反對論に就き生糸工場は小規模なるもの多く從つて家族的美風は工場主と勞働者とを連結せり然るに法律を以て双方の權義を定むるは平地に風波を起こすの憂ありと云ふことてある余輩は此反對論に就ては多く言を費やすの必要を見ないのてある家族的美風は少數の工場に於て見る所事實なり小數の工場に於て此事實ありと云ふ論據に依つて工場法の必要を否定するは不條理の事たるを免れぬのてある況んや名を家族的美風に藉りて無辜の婦女幼者を以て其私利私慾の犧牲に供する者なきを保せざるに於てをや余は我明敏なる生糸業者に望むに再たび是の如き薄弱なる反對論を敢てせざることを以てせんと欲するのてある

或は生糸工業の國際競爭の關係に基きて工場法に反對する者がある即ち工場法の制限は生産費の增加を來たし延いて輸出の發展を阻害するの結果を生ずることてある此説たる一考の價値ある事と思ふ前に以佛の先

進國に臨み後に將來の勁敵たる淸國を控へたる我國生糸業の地位は枕を高ふして惰眠を貪るべきに非ることは固より言を俟たぬのである然れども今回の法案中生糸工業と密接の關係ある勞働時間の制限に就て之を考ふるに十二時間の制限は已に關西地方の新進の生糸產地に於ては實行されたるに非る乎而も其糸質の精良を以て鳴る所の工場に於て法律の制定を俟たず已に事實として現はれたるに非る乎只關東地方に於て多年の慣習として過長の勞働時間を課するのである今若し法案に於ける時間の制限が產業の發達を阻害すと云はゞ關西地方の工場は久しき以前已に成立の條件を見ざることを認めざるを得ないのである然るに事實に於て此結果を見ざるのみならず精良なる生糸は多くは關西地方の產出に係ることを思はゞ此時間の制限は關東地方の工場に於ても之が爲めに受くる所の打擊は彼等當業者の唱道する程にもあらざることゝ思ふのである今若し關東地方に於て特別の自然的事情の爲めに一ヶ年を通じて營業を繼續する能はざる場合ありとせば一定の年限內は適當の範圍に於て特例の恩典に浴せしむることは必要の措置なるべし要之するに我國生糸業者が產業の國際競爭を論據として工場法に反對するは不條理の事と斷言せざるを得ない

工場法は國際の通義である人道の要求である苟も世界の强國として列國の競爭場裏に打て出てたる我國が國際の通義を顧みず人道の要求を慮らず產業上の競爭をなすに當つて工場の經營に關する改良をなすべき餘地綽然たるものあるに關らず毫も其方法を講ずることなく只勞働者の壓迫强奪を以て國際競爭の唯一の武器となし之に由つて我產業の地步を鞏固ならしめんとするが如きは實に卑怯未練の事と云はねばならぬ余は我國生糸業に在つて是の如き憫むべき工場主なきことを信ずる者である否之なきことを冀望する者である

貴族院の現狀

池邊吉太郎

貴族院の現狀はいはゞ混沌たるもので、何人にもよくは分らない。殊に私は門外漢の事であるからして分りやうはない、只想像して見る丈けである。若し貴族院に何か政治上の意見の區別があつて、其區別が明瞭にでもなつて居る事ならば、それによつて實際を穿つた想像も出來るかも知れぬが、今の貴族院にはさういふものも見當らない。何か意見を發表する人があつても其れは個人の意見であつて、團體の意見としては研究會なり、木曜會なり、其他已に議院に入つて居る團體が、實際問題又は議事に接して意見を立てる場合の外は何も發表しない。詰る所頭があつて尻ぽが無いやうなものだ。だから貴族院がどういふ風の狀態で且つ將來どういふ風に變化して行くか、之を推斷するに足る政治上の意見といふものは今の貴族院に無い。要するに團體が幾派もあり幾組もあるけれども、今の處では之を政黨といふ事は頗る無理といふの外はない。けれども中には極まつて居る部分もある。それは外ではない。幸倶樂部若くは茶話會の所屬議員が、桂内閣か若くは同系統の内閣に何時も〳〵贊成をするといふ事である。それは極まつてゐる。然し研究會になると分らない。今の處では其代表者らしい人が一人現内閣に入つて居る。研究會の主もなるものが其入閣を決したらしい。聞く所によれば、研究會に向て、君達の中から誰か一人出して呉れといふのであつた相だ。それにも拘らず、あの會が必らず桂内閣の提案には悉く贊成するかといふに、それは怪しい。未來の變化は勿論計られない。が、談話會の人達は勿論あれを桂内閣派と見て居るに違ひない。そして一生懸命に喰つてか

ゝつてゐる。さうする方が談話會にとつて便宜なからてあらう。それなら談話會にどういふ意見があるか、それも分らない。談話會と相棒の伯爵同志會も分らない。

けれども、それはそれとして、貴族院の中に一つの變化が催されつゝあることは間違のない事實である。何が其原因かといへば、貴族の人が政治を味ひ初めたのが其動機であると思ふ。政治を味ひ初めたのはどういふ動機かといへばそれはいろ〳〵あらう。內閣大臣にならうと考へた人もあらう、中には國政の或部分をどう改革しようと思ひ立つた人もあらう。必らずしも一身の功名心からばかりでなく、熱心に國の爲めを考へて居る人も少くはなからう。然らばさういふ事を考へるのはどういふ動機かといふに、要するに貴族の人が高等教育を受けた結果に外ならない。明治も最早四十年以上になる。封建の大名華族は實は何も知らない人が多かつた。それが代變りになつて、それ〳〵高等教育を受けた。殊に御維新頃から京都の公卿華族は一身上の種々の變化に遭遇して、社會の波の中に漂うていろ〳〵の經驗をした。學問の進步のみならず、世の中を渡て行く術、略共に長じた人も出て來て居るかも知れない。そんな人達が憲法上であれ丈けの權力を與へられ、貴族院令の下であれ丈けの特權を與へられて、何時までも政治に冷淡にあるべき理由がない。次第に政治に頭を穿込み、手を穿込み、足を踏張るのは自然の勢である。そこでこれまでは大抵勅選議員が貴族院を動かしてゐた。研究會が貴族院を動かしたといふ事は隨分古くからある。然し研究會其物は勅選議員の二三のものが動かしたともいひ得たやうである。先づ勅選議員が貴族院であつた。そこで勅選議員を一番多く作つた山縣黨、其繼續者たる桂黨が一番貴族院に勢力があつたのである。然し今や其狀態が政治を味ひがゝつた貴族の人に引くり返されんとする有樣にある。其現象は貴族院の變化に終局するであらう。勅選議員をいくら多く作つても貴族の議員より多くならぬ制度である。故に勅選議員のみではどうしても行けぬとい

ふ事になり、矢張り貴族の貴族院とならんとして居るのである。然し其貴族の人達がどういふ傾向を持て居るか、それもよく分らぬ。政界を縦斷するか、或は貴族院に根據を持て衆議院にも手を伸ばすものが實際起らぬとも限らない。生え抜きの貴族の中に、西園寺侯の如き日本屈指の政治家の出た實例もある。談話會に属する者にも有力な人もあらうし、同志研究會の中にもあらう。未來の變化は分らない。が、詰る處貴族の貴族院になるであらう。其變化の端緒は今現に見えて居ると私は信じて居る。

條約改正に就いて

法學博士 山田三良

明治三十二年七月以來實施された現行條約は今年七月て一ヶ年前に其の終了を通知すべき豫告期限が到來するから、多分我政府は來る七月て其の通知權を行使して現行條約を終了せんと欲する旨を各國に豫告すると同時に、條約改正の談判に着手せらるゝ事と思ふ、現在の條約は十二年間の有効期限てあるから、來年の七月て消滅する筈てある、それ故今度新に出來る條約が此一ヶ年内に首尾能く成立するものとせば來年七月以後更に十二ヶ年位我通商貿易は新條約に依りて規律せらるゝのてあるから、我々國民は我當局者が最も愼重に此改正談判を完成せられんことを希望せねばならぬ。世人は今度の條約改正は殆んど税權回復問題のみてあるかの樣に考へて居るけれども之は大きな間違てある、如何にも税權問題は主要なる問題の一には相違ないが、尙ほ其他に大に考究を要すべき幾多の重要なる問題のあることを忘れてはならぬ。

又世上には條約改正といへば、唯だ我國內に於ける利害得失のみを標準として、如何なる關稅を設け、如何なる權利保護を外國人に與ふれば各條約國が滿足すべきかと云ふが如き問題のみを硏究し、それだけで條約改正の準備が旣に十分に硏究し盡されたるかの如くに考へて居る者も少く無いが、これは最も大なる謬見であることを注意せねばならぬ。條約は國家相互間の契約である以上は、之が改正は我國から見て改正であると同時に、相手の條約國から觀ても亦等しく改正である。從つて單に我國內に於ける利害得失といふ一方面のみから觀察して改正問題を解決し盡すことを得さるものであつて、更に他の方面即ち外國に於ける改正と云ふ方面より觀察して、諸外國に於ける我國民の利益を確保し我海外發展を增進するに必要なる改正を加ふる點に於て毫も遺漏なきことを期するに足るだけの準備を盡さねばならぬ。

然るに予輩の見る所に依れば、此の方面の硏究が甚だ等閑に附せられて居る感じがする、此の如き有樣になるのは畢竟條約改正の沿革の上から來る自然の結果であらうと思ふ。

從來條約改正問題は我國維新以來幾多政治家の苦辛せる最大政治問題であつて、我國民の常に熱心に希望したる所である、併しその改正なるものは幕末に於ける片務條約即ち所謂不對等條約の改正である、今日の有樣でいへば恰も日本と支那との通商條約の如く此等の條約は條約國の一方なる日本に於ける外國人の權利保護のみを規定したもので、日本人の此等諸外國に於ける權利保護に就いては何等規定する所が無かつた條約の改正である、而かもそれのみならず、我日本に於ける外國人の權利保護に就ては、一方に於て我國の裁判權を束縛して、所謂治外法權、即ち領事裁判權なるものを設定し、又他の一方に於ては此等の諸國から我國に輸入し來る商品に就いて、一定の關稅しか賦課する事が出來ぬと規定してあつたのである、即ち幕末から維新の初に出來た舊條約は、單に片務條約たるのみならず、第一に我が法權を束縛し、第二に稅權を束縛

して居つたのである、で條約改正問題といへば、主と**して此二つの點に於て改正を加ふることをしか意味し**て居なかつたのである。數十年間斯の如き苦き經驗を有する國民が今日に於ても條約改正とさへ云へば尚我**國內に於ける**利害得失のみを考究すれば足るものと信ずるのは無理ならぬ次第である。

然るに我國運の發展と故陸奧伯の偉大なる外交手腕とに因つて漸く成立し、去る明治三十二年七月以來實施せられた現行條約は、以上の二點に一大改正を加へたるのみならず、其形式上に於ても舊條約とは大に其趣を異にし、双務條約即ち所謂對等條約であつて、條約の規定は條約國双方に等しく適用せらるゝものとなつて居るのである、中には我國に就てのみの規定もあるが、之は寧ろ極めて少數の例外である、その例外の中で最も大なるものが即ち所謂協定稅率で、外國より日本に輸入する重要なる商品に就いてのみ低廉なる關稅の規定があり、日本から外國に輸入する商品に就いては專ら其國の法律に一任して條約上何等規定する所が無いのである。此點に於て現行條約は實は不對等條**約であつて、我國のみが國稅權の自由を制限せられて**居るのであるから、世上で稅權回復せざる可からずといふのは大に理由あることである。併し此點に就ては尚ほ後に話すが、我國に於ける實利實益上左程大した**問題でない、唯名義上形式上**に於て大に改正を要するといふのみのものである。斯る例外を除かば條約全體の規定は皆相互の利益を對等に保護する双務的規定であるから、今度の條約改正といふ問題は舊條約の改正問題と大に異なりて、特り我國內に於ける利害得失を考究するのみならず、更に相手方たる外國に於ける我國民の利害得失を考究して相互の利益を增進せんことを期せねばならぬのである。從つて今日の條約改正問題は陸奧伯時代の改正問題とは大に其內容を異にするのである。故に若し今日の我國運を以てして單に稅權回復の如き簡易なる改正を以て滿足することを得ば、條約改正は實に區々たる問題に過ずして別に大袈裟なる準備も要らぬのであるが、若しも双務條約の精神に

基き且我國民の海外發展の實際に徵して、之に適當なる改正を加へんと欲せば、我國民の熱心なる考究を要すべき幾多の重要なる問題が現存することを注意せねばならぬ。此點より言へば條約改正問題は自ら二つに區別して考究すべきものと信ずる。即ち

第一には我國內に於ける一切の事項である。現行條約の如何なる規定を如何に改正して、條約國民に如何なる保護を認むべきか、如何なる程度迄從來よりも多くの保護を與ふべきかを研究し、此等の點に關する各條約國の主張を如何なる程度迄認むべきかを豫め考へて置かねばならぬ。此點に就いても、單に稅權問題のみではない、凡ての權利保護に就いて考へなければならぬ、例へば土地所有權は與ふ可きか如何、之を與ふるとすると何等かの制限を附して與ふ可きか、或は然らずして內國人と全然同一に與ふ可きか、又外國人に此等の權利保護を與ふるとするも外國の會社法人等には與へざる可きか與ふ可きか、家屋稅問題の禍根となりし舊居留地に於ける永代借地權は依然として存續せしむべきか、將た何等かの方法に依り土地所有權に交換すべきか否か、といふ樣な點に就ても種々の問題が起る、又凡ての商業、工業、鑛山業、農業、漁業若は職業等に就ても、如何なる程度まで如何なる條件に由つて權利保護を與ふ可きかは大に研究を要する問題である、尙ほそれ以外に從來の條約は條約國の船舶に沿岸貿易即ち我國開港場間に旅客及び貨物を運送する權利を與へて居るが、此沿岸貿易に就いても各國の主義は皆違つて居て、或は自由に之を許す國もあり、或は極端に之を制限する國もある、我國の現行法は原則として外國船舶に之を許さないのであるが、現行條約の規定に依り例外として函館橫濱神戶長崎といふが如き開港場間に限り、內國船舶と同樣に之を許して居るのである。斯ゝる事は相互主義に依り內外船舶を全く同樣に取扱ふべきか、或は今日よりも更に一層制限す可きか等も亦皆攻究を要する問題である。且以上の諸問題は單に經濟上又は財政上の利害得失論のみに依りて漫りに之を速斷することを得ざるもの、更に法律上

より之が當否果して如何を研究せねばならぬ問題である。加之ならず改正談判が若し何等かの故障に因りて遲延せる間に、現行條約が來年七月を以て消滅したるときは、以上の諸問題に就て如何なる結果を惹起すべきか、現行條約消滅せりとするも倘何等かの效果を遺さゞるや否や等は皆純然たる法律論に依りて解決せねばならぬ問題である。が此等の諸點に付ては我政府も世人も共に注意を怠らず、着々準備も出來て居る事と思ふ、併しこれのみては、只一方面、即ち我內地に於ける利害に就ての準備しか出來て居らぬのである。

條約改正は更に第二の方面として相手方たる諸外國に於ける我國民の利益を保護する爲めに各外國の法制に徹して以上の諸問題を盡く研究せねばならぬ。我國民の勢力未だ海外に發展せざりし舊條約時代に於ける改正問題は海外に於ける利害問題を考究するの必要もなく又その實益も無かつたのであるが、現今の如く漸く海外に發展し且將來益々之を發展せしむべき必要愈々顯著なる今日に於ては、此方面の研究も亦頗る重要であつて、關係諸國の法制を審かに攻究し、其法律制度の異なるに從ひ條約の規定を異にすべきことを努めねばならぬのである。若し此方面に於て充分の準備を缺くときは條約改正は極めて不完全且不利益にして到底我國民のそれ等諸外國に於ける利益を保護するに足らぬものと言はねばならぬのである。現行條約は凡ての條約國に對して一樣の規定を設けて居るのであつて、外國よりのみ日本に輸入し又その國民のみが我國に來りて居住し營業する國に對する條約も、外國人が我國に於て利害關係を有するのみならず、我日本人が外國に出て其國に多くの商品を輸入し、立派な商業を營み、又種々の利害關係を有して居る國に對する條約も、全く同一に規定して居るのは一大缺點である、此點からいふと現在の條約は其形式上對等條約なりと云ふも唯だ消極的對等條約といひ得るのみで、まだ眞の積極的對等條約では無いのである。畢竟現行條約の外國に於ける相互的規定は只我國が各外國より要求せられたる凡ての點を滿足せしむる爲めにのみ出來たもの

で、我國民が各外國に於ける利益を保護するの必要より出でたる規定ではないのである。語を換へて言はゞ現行條約は我國の承認し得べき最低限度に於て外國の要求のみを滿足せしむる爲に出來た規定である。されば我等が今度の改正に就て大に望まなければならぬ點は積極的に我國の外國に於ける要求をも滿足せしむるに足る丈けの改正である、即ち新條約は獨り我國に對する各外國の要求を滿足せしむると同時に、又我國民の各外國に於ける利益を保護し、發達せしむるに足る丈の規定を設けねばならぬと思ふものである。世人は此點に就て果して如何なる注意を拂ひ居るか、甚だ心細い事で、維新以來常に受働的にのみ改正を促され、只我國内に於ける利害問題をのみ考へて來た慣習からして、此度の改正にも依然同一筆法を守りて條約改正の準備をするとせば、他年或は悔ゆるも及ばざるが如き不利益を蒙むる事無しとも限らないのである。

條約改正にして若し予輩の希望するが如く凡ての方面に於て積極的に相互對等の規定を成立せしむるにありとせば、税權回復問題の如きも、其改正の方針が大に異ならなければならぬ、單に自由貿易主義とか保護貿易主義とか云ふ如き陳腐なる學說のみに依りて決定し得らるゝものでは無い、又條約の協定税率を廢して單に内國の法律で定めたる國定法律に由り關税戰爭を爲し得べき自由を留保する事も實益上から言へば果して利か不利か大に考究を要すべき問題である、例へば互惠主義の協定税率に依り我國に輸入する或外國の重要なる商品に對して、非常に高き税金を課することが出來ぬとしても、若し其國に輸入する我國の重要なる輸出品は其國に於ける普通の輸入税よりも低き税金を課せらるべき利益を得、從つて我國の商品が多く其國に輸入せらるゝに至らば、我國家は國内に於ける關税を高めて得る利益よりも却つて大なる利益を收め得るのである。故に條約國が此の如く相互に或る主要なる商品に就ての關税を協定する事となるなら、協定税率必ずしも惡くは無いのである。只現行條約の如く我國に於てのみ關税を制限することが我國の不利益でも

あり、且つ形式上不當てあるといふに過ぎぬのてある。

尙關稅問題は主として經濟上財政上より攻究すべきもので、我々門外漢の漫に臆測すべき問題ては無いが、併し自分の考ては、我國に輸入する重要な商品は、多くは器械或は粗製品、製造原料で、經濟上の資本となり更に精製せらる可きものである。若しも斯かる輸入品に就て關稅を非常に高くし、國家が收入のみを目的とするならば、却つて內國の製造工業が發達せず、又國民一般に非常に高きものを買はなければならぬ事に歸着すると思ふ。即ち關稅を高くし國庫の收入を得んとすれば却つて內國の產業を保護する事が出來なくなる、故に所謂保護主義より關稅を高くする事を主張するものもあるけれど、重要な商品は原料てあるから、關稅を高くすれば產業が却つて衰頽し保護の目的を達し難い事になるから、我國に於ては一二外國に於けるが如く、內國產業保護の爲に關稅を高くする事は事實上不可能てあると言はねばならぬ。それ故稅權を回復して國庫の收入を增加せんとする考も、亦內國の產業を保護して外國商品の輸入を抑制せんとの考も、現在の狀態では或る程度を超えては到底行ふ可からざる事である、從つて我國の關稅問題は、單純なる自由主義とか保護主義とか、收入主義とかては決定し得可からざる問題である、之を決定する前には、先づ其輸入品が我國に於ては如何に消費せられ、或は製造せられ、或は製造せられて再び海外に輸出せらるゝかといふ事を委しく研究し、我內國の產業を保護し、又或る程度に於ての國庫の收入を增加するといふ種々の目的を適當に調和するを考へなければならぬ、從つて稅權回復問題は其名義上に於ては誠に重大なる問題てはあるが、回復し得たる稅權行使の實際上より言へば左程重大なる問題ては無いのである。

之を要するに條約改正は條約國双方に對して等しく改正問題であるから、世人は以上の諸問題に就て、單に內國の方面のみより觀察せず、更に相手方たる、諸外國に對する我國民の利害得失を審にして、內に與へ

るゝと同時に外に得る處を確める樣に注意せねばならぬ。否、國運發展の今日に於ては寧ろ此後者の方面に大に注意することが必要であると思ふ。一例を擧ぐれば十數萬人の我國民が居住する米國に對する條約と我國民が殆んど往來せざる西班牙、葡萄牙又は瑞典、諾威等の諸國に對ずる條約とは我國民の利益を保護する必要上より其趣を異にせざるを得ぬのである。現行條約の如く凡ての國に對して同一の規定を揭ぐるが如きは甚だ無意味である、日米條約は米國人の日本に於ける利害問題が條約に規定せられて居ると同樣、日本人の米國に於ける權利も亦條約に規定せられなければならぬ、それに米國の法律が各州各異なつて居る故、それに對する條約上の規定が必要であることをも注意せねばならぬ。夫の學童問題の如き、移民問題の如き、將た米國諸州に於ける土地所有權、各種の營業權の如き、若し條約の規定さへ完全であつたならば斯る問題を發生せしむるの餘地は無いのである。之を要するに條約改正は双方共に改正であることを忘れてはならぬ、予輩は此點に於て世上十分の準備を盡されん事を望まざるを得ぬ。我國當局者は素より之に對して既に充分の準備を盡されたることゝ信ずるのであるが、從來の條約改正は常に此點に於て遺憾多い事であつたから、敢て老婆心もて一言世人の注意を促さんと欲するに過ぎぬのである。

博士に急用出來執筆の暇なく、遂に豫告の如き長論文を寄せらるゝを得ざりしは讀者と共に深く遺憾とする所、其代りとして特に語られたる談話を校閲を經て此段に揭ぐるものなり、



近松の藝術及人生

島村抱月

近松門左衛門と言へば、我々には懷しい古馴染の名である。私みづから其の感化を受けた事も無いとは言へぬ。殊に我が早稻田と近松研究とは淺からぬ宿縁がある。去年の秋は近松祭もやつた。其の早稻田の出版部から、今度挿畫入詳註附きの『近松傑作集』五卷物を出すといふ。骨折は勿論斯道のオーソリチーたる水谷不倒氏で、坪内逍遙、饗庭篁村其の他の諸家の專門的な評論考證等が卷首に附く。其の中へ私も近松論をするのだといふ。餘人で無い近松の事ではあり、且私は其の内日本文學史論を書いて見たい希望があるため、是れを機會に一つ元祿の時代其の物から彫り上げて、其の一凸起面としての彼れを書いて見やうと思ひ立つた。所が例の通り、準備の何分一も進まない内に期限が切れてとう／＼其の斷片のまゝで書物に挿むの巳むなきに至つたのが次の一文である。

第一

曾て十年前に近松を讀んだ頃は、彼れの作に向かふと、一ページ翻すか翻さぬに、早く一種の歡びを感じて、讀み行くに從ひ、言ひ知れぬ心嬉しい氣持になる

のが常であつた。あの心持は、今思ひ出しても、如何にも甘味の濃やかなものである。あれだけの歡びを我々に傳へ得る近松の力は偉大と言つてよい。

其の後、私みづからの身心にも、又世上の風尚にも幾多の曲折があつて、就中藝術の上では、最近兩三年に、殆ど二十年來初めて見るの轉廻が行はれた。其の今日に於いて、近松は果たして何ういふ關係を我々と保つてあらうか。此の問題は私も豫てから興味を以て考へて居た。それで時々讀み古した武藏屋本の、彼れが世話淨瑠璃を取り出しては覗いて見たこともある。其の時は、昔なつかしかつた人に、久々て會見する時のやうな好奇心と恐怖とが伴ふ。そして讀み了つては、ほうとして、是れまでに自分が書いた近松評などの事を想ひ出す。近松は今日讀んでも決して無意義では無い。たゞ其の意義といふものの解釋に多少の變遷あることをば拒み得ない。

第二

近松の世話淨瑠璃を讀むと、一種の歡びは依然として其の文字の間から匂ひ出て、我々の心を醉はせやうとする。此の歡びの微妙さを想うて、私は、放たれたる生の歡びといふことに尋ね上つた。元祿の人生、放たれたる生の歡びが、近松の文藝を藉りて其の聲を揚げて居るものに外ならない。近松の作から得る喜悦はやがて元祿の社會が享有した生の解放の歡びである。生の解放、生の歡び、是れを外にしては、近松が情調の一面は解せられまいと思ふ。

而して此の歡悅の香ひを彼れは如何なる技術によつて傳へたかと言ふと、言ふまでもなく音樂である。竹本義太夫の三絃を離れて、近松の文句みづからが全然音樂である。綺葩絢爛の言葉と空想とて組み立てた一大シンフォニーである。のみならず其の成り立ちが既に三絃に合せて歌ふべき淨瑠璃であつて見れば、其の點では近松の作は、シエークスピアよりも、寧ろ時代の進つたワグナーのオペラに比せらるべき理由を有して居る。シエークスピアも固より其の辭句の音樂的富麗

に主なる情調を托して居ることは、或はイギリスの原文では充分邦人に味ひ盡されぬとしても、曾て文藝協會で土肥春曙氏が演じたハムレットの長白を耳にし、若しくは其の原本たる坪内逍遙氏の譯文を一讀したものゝ必ず領會する所であらう。近松は更に之れに一歩を進めたものである。本來音樂は、他の姉妹藝術、就中小説、散文劇等と對角線をなして、音といふ元子感覺から斷片的情緒を攪き動かして、直接に最後神秘の或物に到達せんとする藝術である。中間に知識の詮議や現實の要求を容れないのを其の本性とする。否應なしに音の力で人の心を蕩かして了ふ。意味の上の穿鑿などは、其の點から言ふと殆ど無用である。近松が淨瑠璃の場合も、之れを他の文學に比べれば遙に多く右の傾向を持つて居る。彼れの作は之れを劇として取扱ふ前に先づ音樂として取扱ふべきである。

第三

論の便宜のため、試に彼れが作中最も自然に近い心中劇の一例として「曾根崎心中」を取つて見ると、先づ其の發端の觀音巡りに「げにや安樂世界より」と書き出して、「**契り置きてし難波津や……今ぞ弘誓の櫓拍子**に、のりの玉ほこえい／＼……胸に木札の普陀らくや……誰をか戀の祈りぞと、仇の悋氣や法海寺……羽と羽とを合はせて袖の、染めた模様を花かとて、肩に留まればおのづから、紋に揚羽のてふせん寺、」と事柄は俳句のために勝手に持つて來られ、俳句は音樂や連想のために勝手に案排せられて、中身は何でも構はず唯何となく讀んで快い感じを呼び起すのが此の種の文の常套である。道行の條では有名な「此の世の名殘夜も名殘、死にゝ行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ」の書き出しが、昔の儒者をして一唱三歎せしめたと傳へられるが、是れとても事情の痛切なのに比しては、極めて不釣合な文字である。たゞ之れを中身から引き離し、それみづからの音樂として見るとき、華やかな一曲の譜を成して心をそゝるやうな悦びを感ぜしめ

のが常であつた。あの心持は、今思ひ出しても、如何にも甘味の濃やかなものである。あれだけの歡びを我々に傳へ得る近松の力は偉大と言つてよい。

其の後、私みづからの身心にも、又世上の風尙にも幾多の曲折があつて、就中藝術の上では、最近兩三年に、殆ど二十年來初めて見るの轉廻が行はれた。其の今日に於いて、近松は果たして何ういふ關係を我々と保つてあらうか。此の問題は私も豫てから興味を以て考へて居た。それで時々讀み古した武藏屋本の、彼れが世話淨瑠璃を取り出しては覗いて見たこともある。其の時は、昔なつかしかわた人に、久々で會見する時のやうな好奇心と恐怖とが伴ふ。そして讀み了つては、ほつとして、是れまでに自分が書いた近松評などの事を想ひ出す。近松は今日讀んでも決して無意義では無い。たゞ其の意義といふものの解釋に多少の變遷あることをば拒み得ない。

第二

近松の世話淨瑠璃を讀むと、一種の歡びは依然として其の文字の間から匂ひ出て、我々の心を醉はせやうとする。此の歡びの微妙さを想うて、私は、放たれたる生の歡びといふことに尋ね上つた。元祿の人生、放たれたる生の歡びが、近松の文藝を藉りて其の聲を揚げて居るものに外ならない。近松の作から得る喜悅はやがて元祿の社會が享有した生の解放の歡びである。生の解放、生の歡び、是れを外にしては、近松が情調の一面は解せられまいと思ふ。

而して此の歡悅の香ひを彼れは如何なる技術によつて傳へたかと言ふと、言ふまでもなく音樂である。竹本義太夫の三絃を離れて、近松の文句みづからが全然音樂である。綺葩絢爛の言葉と空想とで組み立てた一大シンフォニーである。のみならず其の成り立ちが旣に三絃に合せて歌ふべき淨瑠璃であつて見れば、其の點では近松の作は、シエークスピアよりも、寧ろ時代の違つたワグナーのオペラに比せらるべき理由を有して居る。シエークスピアも固より其の辭句の音樂的富麗

に主なる情調を托して居ることは、或はイギリスの原文ては充分邦人に味ひ盡されぬとしても、曾て文藝協會て土肥春曙氏が演じたハムレットの長白を耳にし、若しくは其の原本たる坪内逍遙氏の譯文を一讀したものゝ必ず領會する所てあらう。近松は更に之れに一歩を進めたものてある。本來音樂は、他の姉妹藝術、就中小説、散文劇等と對角線をなして、音といふ元子感覺から斷片的情緒を攪き動かして、直接に最後神秘の或物に到達せんとする藝術てある。中間に知識の詮議や現實の要求を容れないのを其の本性とする。否應なしに音の力て人の心を蕩かして了ふ。意味の上の穿鑿などは、其の點から言ふと殆ど無用てある。近松が淨瑠璃の場合も、之れを他の文學に比べれば遙に多く右の傾向を持つて居る。彼れの作は之れを劇として取扱ふ前に先づ音樂として取扱ふべきてある。

第三

論の便宜のため、試に彼れが作中最も自然に近い心中劇の一例として「曾根崎心中」を取つて見ると、先づ其の發端の觀音巡りに「げにや安樂世界より」と書き出して、「契り置きてし難波津や……今も弘誓の櫓拍子に、のりの玉ぼこゑい〳〵……胸に木札の普陀らくや……誰をか戀の祈りぞと、仇の悋氣や法海寺……羽と羽とを合はせて袖の、染めた模様を花かとて、肩に留まればおのづから、紋に揚羽のてふせん寺、」と事柄は辭句のために勝手に持つて來られ、辭句は音樂や連想のために勝手に案排せられて、中身は何ても構はず唯何となく讀んて快い感じを呼び起すのが此の種の文の常套てある。道行の條ては有名な「此の世の名殘夜も名殘、死にゝ行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消えて行く、夢の夢こそ哀れなれ」の書き出しが、昔の儒者をして一唱三歎せしめたと傳へられるが、是れとても事情の痛切なのに比しては、極めて不釣合な文字てある。たゞ之れを中身から引き離し、それみづからの音樂として見るとき、華やかな一曲の譜を成して心をそゝるやうな悦びを感ぜしめ

る。此等は辭句の上の例であるが、情緒の濃密なもの、例へば「どうで德樣一緒に死ぬる、私も一緒に死ぬるぞやいのと、足にて突けば椽の下には涙を流し、足を取つて押戴き、膝に抱つきこがれ泣き、女も色に包みかね、互に物を言はねども、肝と肝とにこたへつゝ、溺り泣きにぞ泣き居たる」の如きですら、全篇の配色の中に入つては、強く美しい冷艶な一彩色に化して了ふ。結末の「未來成佛疑なき戀の手本となりにけり」に至つて、たとひ其の文句は此の種の文學の常套語であるにもせよ、全篇の調子を明るく華やかなものに締め上げて了つた觀がある。

第四

美しい辭句、美しい情緒想像で生の歡びを奏する音樂が近松の作であるとすれば、其の二十幾篇の世話淨瑠璃（茲では時代物に見えた近松をば、深く論ずるに足らずとして差し置く）が悉く所謂心中劇乃至それに近いものであるのは矛盾でないか。男女が不如意の戀に泣いて、終に相抱いて情死するに至るのは、生の自由でなくして生の破滅である。解放せられたる生には相違ないが、其の結果は滅亡の悲哀であつて、生を樂み行く歡びでは無い。斯んな人生を歌つた音樂は、當然厭世的な悲哀の調を全曲の上に漂はし來たる筈である。然るに近松の心中劇は、背景に常に光明喜悦の調子を持つて居て、事柄や人物そのものが哀れであるに拘らず、人生全體としての運命は歡舞の聲によつて語られる。樂觀的であつて、悲觀的でない。若し一たび人生を解放して行く所に行かしめれば斯くの如き運命に陷らざるを得ないといふ、人生觀的意義を、情死その事の中に暗示する氣持が近松には無かつた。我々は此の暗示を却つて西鶴の作中に見出だす。近松に取つては、情死といふ事柄は、實にたゞ是れによつて奇なる、艶なる、而して濃密なる情緒を剪裁するの便宜を得るものに過ぎなかつた。情死を語る時も、其の全篇に漲る近松みづからの情調は、抑へ切れない生の歡舞の聲である。情死といふことが映射し來たる暗い人生

實の影を、彼れは正當に觀取しやうとしなかつた。人物は哀れてある、事柄は哀れてある。併しながら之れを語る近松の聲は華やかてあつた。情死も近松の筆に入つては美しく明るくなつた。此の點から言へば、近松は現在に於ける生の歡びの謳歌者てあつて、其の先に横はる暗い矛盾の人生までをば見なかつたと謂つてよい。見ても之れを光明化する人てあつた。

第五

情死を美化し光明化する近松の氣持は、當時の彼れが周圍の生活と何ういふ關係になつて居たか。或は彼れは德川期の他の戲作者と同じく、文藝を以て全く一の遊戲に過ぎない狂言綺語と見て居たらうか。若しさうてあつたなら、彼れの作中に眞面目な人生問題を求めるのは、求める方が間違つて居る。遊戲娛樂となれば離れても浮かれて嬉戲する。彼れの作が人生を浮華歡樂の調て描いたからと言つて、それが彼れの眞實の人生觀とは何の交渉もない事になる。

思ふに此の點は二つながら近松に存して居る。彼れとても一面、藝術を以て慰みと心得た時代の弊を、全然破り出ることは出來なかつた。幇間が輕口を言ふのと似た心持て淨瑠璃にも浮華の調子を加へたに違ひない。併し同時に、彼れには、一步を自覺した藝術觀に進めた所が見える。是れが彼れをして他の當代の諸作家から一頭地を拔んでしめた所以てある。彼れは其の作を以て單に觀客の機嫌を取り結ぶもの以上、虛實皮膜の間を縫うて、義理人情の奧秘に分け入らうとしたと言ふ。固より今日から見て極めて不徹底な自覺てあることは爭はれないが、兎に角人生の或る物を或る方法て描かうといふ藝術觀上の自覺が一面に伴つて居たことは、其の言に徵して明白てある。即ち彼れの作には、ふざけて居る一面と共に、眞面目な一面が存する。惡ふざけの一面は固より論外として顧みないてよい。かの時代淨瑠璃の多くは即ちそれてある。老熟して世話淨瑠璃に及んで、始めて眞面目な人生の一面が幷び見はれるに至つた。我々は此の眞面目な藝術としての

方面から、彼れの作中に見はれた歡舞喜悅の調子を推究して見たい。

思ふに桎梏から切り放たれた若い人生が、生氣に滿ちて、躍つて居るやうな彼れの調子は、やがて元祿の社會そのもの丶調子であつたらう。

德川期の歷史を讀むものは誰でも氣がつくてはあらうが、元和偃武の後、爭亂が跡を絕つに從ひ、今まで極端に殘害せられ荒廢せられて居た生といふものが、春に遭うた木の芽のやうに、抑へても抑へても抑へ切れない自然の力を以て萠え出て來た。それを尙、昔の殘害荒廢の力の權化たる時の爲政者が、其の同じ力即ち武力を以て壓迫し、以て自家の勝利者たる地位を保たうとする。勝利者はすなはち爲政者であるから、それが國家といふ名を冒し、國家と一になつて、萠え來る多衆の生の力を平民といふ名の下に壓迫した。生に對する抑壓力と生みづからの發揚力とが、政府と人民とに別れて相爭たのが此の期の歷史である。而して生の暢び行く形は、衣食住の富となり、逸樂となり、藝術となつて見はれると共に、之れを禁壓する力は尙武といひ、勤儉といふが如き道德兼法規の形式を取つて苛細を極め、繁縟を極め、無道を極めた干涉を、平民の生活の上に加へた。けれ共自然に氤氳する生の力は到底厭迫し盡せるものでなく、第一期の爆發時代となつたのが元祿前後である。百花の一時に亂れ咲いたやうな元祿文明は、生の力の勝利に外ならない。其の百花繚亂の間に歡喜の歌を囀つてゐる鳥のやうな當時の人々、殊に農工商の平民社會の情調は、即ち近松が知らず識らずの間に見はしてゐる歡びの情調であらう。解放せられた人生の歡びとは是れを謂つたのである。西洋に於いては、正に十五世紀前後よりの文藝復興期（リネーサンス）と趣を同じくする。其の意味から言へば、シエークスピアの十六世紀に於けるリネーサンスの人生と、近松の元祿に於けるリネーサンスの人生と、固より相似た點が多い。共に放たれたる生の歡びの藝術である。シエークスピアの「ロメオとジユリエット」と、近松の心中劇とは好箇の對偶である。

第六

元祿を以て西洋のリネーサンスに比較することから、更に重大な一つの論點に達する。西洋の文藝復興は一面に於いて知識の解放てあつた。其の生といふものには情意生活の自由と共に知識生活の自由をも含んで居た。つまり全生活の解放が十五六世紀のリネーサンスてある。然るに日本の元祿文明には此の知識といふ一角が缺けて居た。元祿の人生は知識が無くて情意のみある活動と言つてよい。勿論社會の一部には同時に和漢學の復興もあつたに相違ないが、それはたゞ〱以て政府側の爪牙となり裝飾となるか、然らずんば人民生活に間接舊い桎梏を加へるに過ぎないで、此等平民の活きた生活を新たにする上には殆ど無作用てあつた、西洋のリネーサンスに於いてギリシアの學問精神が復興して來たのとは逆さまの事情てある。斯やうにして、元祿に解放せられた人生には、耽溺蕩逸の趣はあつても、根柢に深い知識の省察が伴はなかつた、淺はかな、知識程度の極めて低い、それて歡樂を追ふ情意の盛んな人てあつた。情意の生を追ふ行止まりには當然の結果として情死のやうなものが幾つも横はつて居る。情死は實に當時の社會の深意義を標象したものてある。然るに其の深い人生の矛盾を、何等の省察もなく觀過して了ふ。是れが元祿の平民文明の特色てあつた。省察しても、それは極めて因襲的な、輕々しいものてあつた。要するに知識の解放の伴はない解放(エマンシペーション)に歡舞して居たのてある。

斯んな風にして醉生夢死する世の中は、少しく深く觀れば、其の底に色々の不安、疑ひ、心細さを藏して居るのに氣がつく筈てある。此の深省の影を兎も角も捉らへて居るのは、西鶴の作てある。近松は此處まて突つ込まなかつた。近松に博大富贍の趣はあつても、深刻の味が足りないのは此の故てある。其の深刻の味を却つて西鶴が領して居る。

近松の作て見ても當時の人生が如何にも心細く、齒がゆく、淺薄てあつた事は、今日の傍觀者たる我々に

よく見える。知識を拔いた、情意のみの恣まゝなる生活が描かれて居る。而も作者の之れに對する深い人生觀的な省察が加はつて居ない。何も露骨にそれを結論する必要は無いが、其の味ひは必ず香ひとなつて出て來なくてはならぬ。私は前に『曾根崎心中』を以て近松の作中最も現實的なものゝ一つだと言つたが、部分々々に小細工の技巧は弄してあるに拘らず、九平太一味の人物が必ずしも結末の運命にまで引つぱつて行かれなりて、立ち消えて了つたり、天滿屋の亭主が久しい客の德兵衛が事とて、九平太の雜言に善惡を言はず吸物でもと紛らしたりする邊は、如何にも自然である。性格描寫などは言ふに足らぬが、德兵衛が身のつまりなども、素直に條理がなく運んで居る。部分々々の小細工や俳句の技巧を除けば、最も自然な作と言つてよい所以てある。而して此の作ての德兵衛と九平太との問答など、善と言はず惡といはず今日から見れば、如何にも無知文盲な、淺はかな、齒がゆい事ばかりてないか。斯んな下らない葛藤て亡び行く人生なら之れを救解する道は幾らもある、馬鹿々々しいといふ感を起さす。が是れが大部分當時の社會の實狀てあつたらうと察する。無知暗愚の民衆が、其の淺はかな知慧の範圍て、放たれたる生の歡樂に醉うて居るに過ぎない『堀川波の鼓』の前半、また自然な作意の一つてあるが、玆に見はれたお種等の上にも同じ趣が見える。

第七

更に近松みづからの工風に立ち戻つて考へると、彼れは上のやうな元祿の人生に、種々の理由から知識の一面を醇化して加へた趣がある。作全體の上には、生の無自覺的享樂の歡びが殆ど知らず識らずの間に彼れの主觀の香ひとなつて出て居るが、其の事件を結構し工風する上には、必ずしも生の盲目的歡喜のみてなく是れに知識の一面を配して、葛藤を複雜にした、併し其の配加せられた知識の一面といふものが、惜むらくは深さを缺いて、たゞ在來の表面的、強壓的な義理といひ、分別といひ、來世といふもの以外に出て得なか

つた。此の點に於いて彼れは依然たる傳襲の人てあつて、革命の兒ては無かつた。たゞ從來世俗が無自覺的に盲從して來た、道德知識の羈を、一層顯著に揭げ出したといふに止まる。此の方面に於ける解放が彼れには無かつた。一層多く理想的、空想的な作意のもの、例へば「柱曆」であるとか「波の鼓」の後半てあるとかいふものになれば、生の歡びといふもの以外、作者が主觀の香ひと感ぜられるものが出は出ても、それはたゞ此の解放以前の知識、道德の影に外ならない。我々は近松のリネーサンスに「オセロ」の深さをすら求め得ない。まして「ハムレット」の深さをやてある。畢竟彼れは「無智の時代」といふ檻を破り得なかつた。

斯やうにして、近松は元祿の放たれたる生の歡びを音樂て我々に傳へて呉れる。此の點に於いては、彼れも亦近代の一樂手てある。けれ共其の生には知識の解放が伴はなかつた。從つて歡舞の底に潛む深刻凄慘な意義に徹到する味が足りない。是れがやがて近代藝術の重要な一面を逸する所以てあつて、近松の爲遺憾とする點てある。（明治四十三年一月十二日稿）

野蠻人中にはどれ程迄に物事を知らぬ者が有るか

理學博士　坪井正五郎

松の芽生えの如何に小さいかと云ふ事を知つて居て松の大木を見上げると其生長の樣が好く解かる。人智發達の跡も夫れと同樣。極々の野蠻人はどの位の知識の程度で居るのかとの事を調べて見ると開明人の價値

が益々明かに成つて來る。

最下級の野蠻人は耕作を知らない、牧畜を知らない、彼等は自然の供給のみに由つて生活して居るので有る。最下級の野蠻人は家屋と稱すべきものを建築する事を知らない、彼等は木の枝を集め或は木の皮を寄せ掛けて其陰に起居して居るので有る。斯かる事柄は例を引く迄も無く誰も想像仕さうな事て有るが、此他多くの人がよもやと思つて居る事て實際野蠻人の行つて居る事が有る。

先づ第一に衣服に付いて云つて見ると、晉に腰の邊を覆ふ物の他何物をも身に着けぬ者が諸所に居るのみならず、腰部を穩す事さへ爲ずに全くの裸體て居る者が、ヲーストラリヤにも居るし、南アメリカ南端の島なるテラデルフユーゴにも居る。

次に利器の事を調べると、鐵器と云ふ物を知らず、石器のみを用ゐて居る者も少く無いが、石器の中にも石を研ぎ磨いて刄を付けたもの、即ち磨製石器も有れば、石を打ち缺いて刄としたもの、即ち打製石器も有つて、極々の野蠻人は石を研ぐ丈の技術も知らず、之を行ふ耐忍も無く、唯打製石器のみを使つて居るので有る。石器は野蠻人の間に現に行はれて居るばかりて無く開明國に於ても時々太古住民の遺物として土中から發見される事が有る。時代の順なり技術の順なり何れから見ても打製の方が前に作り始められたもの磨製の方が後に作り出されたものてあるので打製石器が利器としては最も進歩せぬものと認められて居るので有る。ところが打製石器にも精粗の別が有る。同じく石を缺くと云つても刄さへ付けば好いと云ふ缺き方も有れば刄を付けた上に形を好くすると云ふ缺き方も有つて、乙の方が甲の方に比べて稍々餘裕有る者の製作と見受けられる。刄が出來て居さへすれば好いと云ふ事をモウ一層溯つて考へると、石と石とを叩き合はせて出來た石片の中から破れ口の銳く成つて居るのを撰び出して利器として使用すると云ふ事も有るべき事てある。普通の打製石器の發見される場所よりも更に古い所に今云つた樣な石片の存する事が間々有るので太古

遺物研究者中には此類を石器の最も簡單なものとして之を原始石器（Eolith 或は Eolite.）と呼んで居る人が有る。此考へが正しいとすると此類の存する所は太古人類の遺跡と成るので人類學上中々重要な問題と成つて居るので有る。原始石器論は主唱者も多いが反對者も多い。反對の一理由は斯かる石缺けは利器として用ゐられるものでない、如何なる野蠻人と雖も是程簡單な物を用ゐると云ふ事は無からうと云ふ點に在ると思はれる。野蠻人中果して斯かる物を用ゐる者は無いかどうか。之は想像では定められぬ。實情調査の必要が有る。ベンガル灣中のアンダマン島の土人の如きも所謂原始石器に近い物を用ゐて居るが、原始石器其儘の物はヲーストラリヤの東南の角の方位に當たるタスマニヤ島の土人が使つて居たので有る。此種族は今は絶滅して仕舞つたが三四十年前迄は殘つて居たので、其生活狀態の事も好く判かつて居るし、其住んだ跡も知れて居るので彼等の使用した石片の事に付いては疑を容れる餘地が無い。斯かる實例も有るからして原始石器說は必しも排斥すべきものでは無いので有る。要するに野蠻人の利器中には斯んな物がどうして役に立つかと思はれる程に簡單な物も有るので有る。

數の觀念も知識の程度に由つて色々違ふものでは有るが、左右の手に指が五本づゝ有る以上はどんなに譯の分からぬ者でも十迄の數は知つて居るで有らうとは多くの人の思ひさうな事で有りますが、五つ迄しか區別の立たぬ者も有り、南洋の或種族は四までは判きりして居るが五に對する言葉は同時に無數と云ふ事を意味し、何々が五つ有つたと云へば幾つとも數へ切れぬ程有つたと云ふ事に當たると云ふ樣な事も有るので有る。

日常生活に火の入用なのは何所でも同じで、どんな開けない者でも火の用を知らぬと云ふ事は無いが、火を作る事を知らぬ者は有る。我々は今マッチと云ふ重寶なものを持つて居るが、これの無かつた時には火打ち道具を用ゐて居た。石と鐵と打ち合はせて火花を發し夫れを燃える物に受けて火種を得ると云ふ事は我

が邦のみならずアジャ諸地方からヨーロッパに掛けて廣く行はれて居たので有りますが、マッチに先立つ此發火方として決して容易に思ひ付かれるものではなく、之に先立つものが無ければ成らぬ譯で有る。古式を存する神社には板に細い捧を揉み付けて摩擦て火を得る法が傳はつて居るが、同樣の事は琉球人の間にもアイヌの間にも存して居るし、臺灣蕃人、アメリカ土人、アフリカ土人、南洋土人等は現に此方法に由つて常に必要の火を得て居るので有る。サモア土人は木片に細い捧の端を當て、捧の方を斜めにして墨を磨る樣に前後に動かして火を得、マルシャル群島土人は木片に細い捧を十文字に當てゝ鋸を使ふ樣な動かし方をして火を得るので有る。磨擦に由つて火を得ると云ふのは發火法中最も簡單なものでは有るが、之を仕出す迄には觀察、經驗、考案を積まなければ成らぬ。世の中に人が現れたのと同時に斯かる發火法が直に行はれる樣に成つたとは思へぬ。其始めの事を考へるのは困難で有るが、現に發火法を知らぬ者が有るから夫れに由つて之を推測する事が出來る。

アフリカのウガンダ地方の一種族は火を發する事を知らぬ。然らば常に用ゐて居る火はどうして得るのかと云ふと前々からの火を絶やさぬ樣に始終薪を加へて居るので有るが、此地方に屢ば有る落雷の結果の山火事に際し、其火を移して新たな火種を作ると云ふ事もするので有る。ヲーストラリヤの一種族も矢張り持ち傳へた火を絶やさぬ樣に仕て居るので有るが、どうかして滅えた時分には遠きを厭はず火の燃えて居る所へ種を貰ひに行くので有る。尙ほ面白い事が澤山有るが投稿の時が迫つたから最も奇な事を一つ記して筆を擱く事にする。夫れは何かと云ふと、婦人の妊娠に付いての事で有る。妊娠は男女の接した結果で有る位な事はどんな野蠻人でも知つて居さうなもので有りますがヲーストラリヤのクインスランドの北寄りの地方の土人中には夫れに氣が付かずに居る者が有るので有る。ヲーストラリヤ土人の間には地方に由つて人口增加豫防の一手段として男子の生殖器を傷ける事が行はれて

居る位て有るから總べての土人が此事に付いて無智と云ふては無いが、或る種族は實際男女の接すると云ふ事と、子供を宿すと云ふ事との間に何等の關係が有るか知らずに居るので有ります。
開明人とても極々の古い祖先を探ねて見れば野蠻人で有つたに違ひ無く、是等太古人類は上述の様な知識の程度で居たので有らう。芽生えの松を見れば大木の松の大なる事が一層明かに成る。人智は好くも發達したもの哉。これ迄に逐げ來たつた跡を顧みれば、將來の進歩も推して測られる。樂しい哉。

樺太は昔し日清の爭地

文學博士　吉　田　東　伍

樺太(カバフト)は本名はカラフト又はカラフトと言つたのを轉聲し改定したので、大方明治二年の北海道國郡命名の此の事であろう、初め江戸幕府では、文化中には北蝦夷と命名した、その譯は、カラフトとは唐人(カラヒト)の義に出たもので、我國で唱へるのは不祥だとしたからである、安政文久より以降、露人の南侵は年一年と急になつたが、彼等は其カラフトの稱呼感情等を探つたので、それで蝦夷といふは日本の國外である唐人といふのは日本の種類で無いと聲言するに至つた、我官吏や志士は此に至つて之を憂ひて、從前國外に疎んじたる政策を一變し之を國内に編み入れると共に、國郡制置名字などの說も出たのだ。この形勢は當時の論策に見えて明瞭である、即ち大日本史には明かに蝦夷を外國位中に收め、其論贊には「夷狄可」使」生ニ長其種類ニ而不」可」使」居ニ内地ニ(中略)蝦夷僻ニ在東北ニ逐ニ水草ニ而居、射獵爲」生、貪婪慓悍、化爲ニ仁

義ニ則欣、示以法律ニ則忿、在昔種落蔓衍、數爲ニ邊害一列聖爲レ之勤ニ于征討一（中略）既遺類餘孽、皆限ニ江海一、政敎不レ及ニ其人一、正朔不レ加ニ其國一、使ヲ之生ニ其種類一蕃ニ其牧畜一、以遂ニ其天性一、而在レ内者驅ニ逐之一、在レ外者隔ニ絶之一、此處レ夷之道也」とある、是れ水戶の彰考館一派の見解にせよ先づ參考する値がある、又中井履軒の年成錄を見ても蝦夷地を幕府の手に收めたのを謗つて粃政だとして居る、即ち、「近世の蝦夷地公收は粃政なり、利を求めて得ず、徒に吏民を勞役して凍死せしむるのみ、宜く速に停止して舊の如く松前家へ返さるべし、又一切通船を禁じ、奸商利市を絶ち、松前家の手船を定め、米穀數を限りて送與すべし、但、流人を配置するは亦一計なり、抑も蝦島は不毛にして無人、是れ日本の大利と謂ふべし、俚語に「北風や日本の火よけ蝦夷が島」といへり、誠によく當れり」とある、亦如何に疎外說を採るかが知れるであろう。

が箱館奉行羽太氏の邊發私辨を見ると大分變つて來て居る、即ち「中井生が蝦夷島へ赤人も來り侵さずと云ふは事實を知らざるに坐す、此に一例證あり」と書き起して、相州函根山中の神領に社人の知らぬ間に小田原城主に附屬し居る小民が私に新田を開き石高三百石、戶數三十戶にも及ぶ、社人後に知つて俄に官に訴へたら、己が司る地を數十年來知らずに居るのは社人の過失だといつて到頭其地を小田原城主に附與せられたといふ事がある、今蝦夷地を棄て置かば他日又之に類する事があろうとて警策を加へて置いた。又本多利明の蝦夷拾遺にも「唐太者北極出地凡四十五度なり、依て百菓百穀豐饒の國となるべき地なり、往古より日本の商船渡海して交易せざれど、只、山丹滿洲の土人往來して交易なすといへり、如此良地を捨置かるゝは官の過失と異國の沙汰も恐れあり、庶幾くは今の内に早く國威を布かれんことを」とある、以上は天明乃至文化年中のことだ。それが後になると大に目が醒めて來て居るので、安政二年の水戶侯齊昭から閣老阿部正弘への復書を見ると斯うある。「此地開拓一條奉行堀（織部正）等實地見分の上建議至極眞心致候、右見込の

內、口蝦夷より追々北方へ及候論は如何の者歟、己に彛夷との境界も粗定り候上は、北蝦夷、エトロフ、クナシリ、三個所最も肝要に候間、一日も早く此方の恩威を彼に及ぼしたく候。是迄松前にて勤番致したる如く、五人歟十人差置、それも北蝦夷には越年せざる樣の事にては捨て置かれ候も同樣にて、彼の侮を招候間、第一に右三個所手早く殖民可然と致愚慮候、又御奏聞の上、七八ヶ國も新に國名を立、四國九州と首尾羽翼の形勢に遊ばされ候儀も、北地論の大眼目に御座候、愚老も霜雪を犯し北地へ越したき心願己に二十餘年になり候云々」、これから國名を立つる詮議になつたが、それには舊解を捨てて柯（カラ）太の文字を採るもあり、又土語に附會して作間の義だといふのもある、即ち前開拓判官岡本氏は此說なので、其樺太探檢日記を見ると、明治元年八月の頃氏が柯太の國號を定むるに至つて大に判官松浦武四郎と論談した始末を書き、予は松浦の樺太とせんとする說を難じてカラは土人の舊名で作の義である、フトは大に間あらしむるのである、といふのは此島は元來南島（今の北海道）とは一つ島であつたのを神が破つて二つとした、それで此名稱があるといふ事だから土人の舊名を用ゐるに如かぬといふ。けれども松浦は、彼地に樺の大樹が事實多いのだから樺太といつても何も惡い事はないといふ、互に爭つた事があつたといふ樣に記してある、即ち現在の名樺太は松浦案に從つて改名したものなのだ、

露人南下の始末は天明文化乃至安政明治の歷史の上に比較的詳細に傳へられるけれど、清朝即ち滿洲朝廷の聲威が此島地に及ぼした始末は余り見えぬ、それて此處には樺太の往時日清の爭地であつたといふ形勢を少し推論して見やう。

樺太の舊名は上來述べ來つた所でカラフト、又はカラトであることは明かだが、それは又異人の義であるから（之に對する論述は長きに亘る故省く）、その名と義とより推し、或は與に滿淸の屬島であつたかとの疑ないてはない。今滿州朝廷の治化沿革を觀察すると、淸朝の東北邊治化の最盛は雍正以后にある、即ち乾隆

義ニ則欣、示以法律ニ則恐、在昔種落蔓衍、數爲ニ邊害ニ列聖爲レ之勤ニ于征討ニ(中略)旣遺類餘孽、皆限ニ江海ニ、政敎不レ及ニ其人ニ、正朔不レ加ニ其國ニ、使ニ之生ニ其種類ニ蕃ニ其牧畜ニ、以遂ニ其天性ニ、而在レ内者驅ニ逐之ニ、在レ外者隔ニ絕之ニ、此處レ夷之道也」とある、是れ水戸の彰考館一派の見解にせよ先づ參考する値がある、又中井履軒の年成錄を見ても蝦夷地を幕府の手に收めたのを謗つて稗政だとして居る、即ち、「近世の蝦夷地公收は稗政なり、利を求めて得ず、徒に吏民を勞役して凍死せしむるのみ、宜く速に停止して舊の如く松前家へ返さるべし、又一切通船を禁じ、奸商利市を絕ち、松前家の手船を定め、米穀數を限りて送與すべし、但、流人を配置するは亦一計なり、抑も蝦島は不毛にして無人、是れ日本の大利と謂ふべし、俚語に「北風や日本の火よけ蝦夷が島」といへり、誠によく當れり」とある、亦如何に陳外說を採るかが知れるであろう。

が箱館奉行羽太氏の邊警私辨を見ると大分變つて來て居る、即ち「中井生が蝦夷島へ赤人も來り侵さずと云ふは事實を知らざるに坐す、此に一例證あり」と書き起して、相州函根山中の神領に社人の知らぬ間に小田原城主に附屬し居る小民が私に新田を開き石高三百石、戸數三十戸にも及ぶ、社人後に知つて俄に官に訴へたら、己が司る地を數十年來知らずに居るのは社人の過失だといつて到頭其地を小田原城主に附與せられたといふ事がある、今蝦夷地を棄て置かば他日又之に類する事があろうとて警策を加へて置いた。又本多利明の蝦夷拾遺にも「唐太者北極出地凡四十五度なり、依て百菓百穀豐饒の國となるべき地なり、往古より日本の商船渡海して交易せざれど、只、山丹滿洲の土人往來して交易なすといへり、如此良地を捨置かるゝは官の過失と異國の沙汰も恐れあり、庶幾くは今の內に早く國威を布かれんことを」とある、以上は天明乃至文化年中のことだ。それが後になると大に目が醒めて來て居るので、安政二年の水戸侯齋昭から閣老阿部正弘への復書を見ると斯うある。「此地開拓一條奉行堀(織部正)等實地見分の上建議至極感心致候、右見込の

内、口蝦夷より追々北方へ及候論は如何の者歟、己に外夷との境界も粗定り候上は、北蝦夷、エトロフ、クナシリ、三個所最も肝要に候間、一日も早く此方の恩威を彼に及ぼしたく候。是迄松前にて勤番致したる如く、五人歟十人差置、それも北蝦夷には越年せざる樣の事にては捨て置かれ候も同樣にて、彼の侮を招候間、第一に右三個所手早く殖民可然と致愚慮候、又御奏聞の上、七八ヶ國も新に國名を立、四國九州と首尾羽翼の形勢に遊ばされ候儀も、北地論の大眼目に御座候、愚老も霜雪を犯し北地へ越したき心願已に二十餘年になり候云々」、これから國名を立つる詮議になつたが、それには舊解を捨てて柯（カラ）太の文字を採るもあり、又土語に附會して作間の義だといふのもある、即ち前開拓判官岡本氏は此說なので、其樺太探檢日記を見ると、明治元年八月の頃氏が柯太の國號を定むるに至つて大に判官松浦武四郎と論談した始末を書き、予は松浦の樺太とせんとする說を難じてカラは土人の舊名て作の義である、フトは大に間あらしむるのてある、といふのは此島は元來南島（今の北海道）とは一つ島てあつたのを神が破つて二つとした、それて此名稱があるといふ事だから土人の舊名を用ゐるに如かぬといふ。けれども松浦は、彼地に樺の大樹が事實多いのだから樺太といつても何も惡い事はないといふ、互に爭つた事があつたといふ樣に記してある、即ち現在の名樺太は松浦案に從つて改名したものなのだ、

露人南下の始末は天明文化乃至安政明治の歷史の上に比較的詳細に傳へられるけれど、清朝即ち滿洲朝廷の聲威が此島地に及ぼした始末は余り見えぬ、それて此處には樺太の往時日清の爭地てあつたといふ形勢を少し推論して見やう。

樺太の舊名は上來述べ來つた所てカラフト、又はカラトてあることは明かだが、それは又異人の義てあるから（之に對する論述は長きに亘る故省く）、その名と義とより推し、或は眞に滿清の屬島てあつたかとの疑ないてはない。今滿州朝廷の治化沿革を觀察すると、清朝の東北邊治化の最盛は雍正以后にある、即ち乾隆

十三年の（我寛延四年、西暦千七百四十八年）清一統志、滿洲吉林の條に「混同江大海中有二大洲一、距二西岸一近處僅百里許、山曰二圖克蘇譜一其長竟洲、林木深翳、有二小水數十一、東西分流入レ海」とあるが、此大洲は正しくカラトて有ろう、又乾隆四十四年（我安永八年）の盛京通志には「黒龍江、即薩哈嗹江、薩哈嗹黒也」ともある、又寛保中荷蘭人の所刊の輿地圖にも已に薩哈嗹島があるともいふ、併し我には元祿十三年の松前鄕帳なるものがある、之に比べると清一統志は四十八年後れ、荷蘭國も四十年許り後れて居る、其他にもまだ漠然と此島の所在を書いたものはある樣だけれど、明白に其島中の部名二十有余を擧げた記錄は元祿鄕帳より他には無かろう、而かもこれは松前家の歷史並に地理上の關係から推しても最も確實なるものである、又支那の吉林通志を見ると清の國初に庫葉（クエ）島各族入貢の事をいひ、その島人が日本西山國（シサム、松前藩の事て滿洲人は之をシサム國といつたものだ）に入貢した事を自白したとあるによつて見れば、カラト人は日本の舊屬てあるけれども滿清の新に起るや稍日本より離れ樣としたものと見える、玆に庫葉とは滿州人が我カラトを指した名て、本アイヌ人の特稱てあつた、明代の書には之を苦夷と書く

抑も我松前藩がカラト島に對して施設した事跡は、文獻が備らなくて明徵を缺くけれども、夙に寛永以前に於て之を占有し、全島二十余部は其時から我版圖てあつた事が知れる、しかも其版籍圖說は元祿正德のものが遺つて居るから、之によつて當時の我松前藩の聲敎の遠く布かれた事が想像される。然らば誰が先づカラト島に足を踏み入れたのてあるか。

舊松前藩士の說によると、紺備後守廣長といふ者が松前家三代の祖から東蝦夷の司を命ぜられたが、夷の乙名が錦を衣て居るのを見て怪み、出處を正したのが原因て初めて奥蝦夷の地のあることが知れ、その奥蝦夷の夷酋を招いて物產を持ち來らせた、錦は即ち蝦夷錦て原產地は女眞滿洲てある、これがカラフト奥蝦夷の松前家に内附の始まりてある、頃は永正十七年（西曆

千五百二十年）の事だといふ、又寛永年中に村上掃部左衛門が諸島を巡檢してカラフトへ行つた、これが松前藩士の踏査探究の嚆矢である、又延寶七年に厚谷四郎兵衛重政が藩命によつて一隊を率ゐ、吉祥丸に乘つてタシユコタンに至り、穴居して陣屋とした、之を方俗では「カムイシヤバ」といひ、松前人は穴陣屋と稱へて居る此穴陣屋の勤番の制は貞享年中に及んで廢し、それ以來吏卒をカラフトへ遣はさぬ云々、（以上は史談會速記錄による）だが、紺某の事跡は信憑すべきものなく、古書には見當らぬ、總じて口碑には訛言が多いから分らぬ、が松前蝦夷記（正德五年の上申の後に洞く幕府へ進めたもの）には「カラト島、ラツコ島（クルミセの別名で今の千島をいふ）共一圓志摩守領分なり、右島の儀遠方離島故に船通路不自由に有之、曾祖父志摩守（公廣、元和二年家督、寛永十八年卒去）代、カラト島二日路程の內、家來甲道庄左衛門と申者差遣はし、見屆けさせ申候處、何れも夷人の由、唐織物類、カラト島より參候に付段々夷人へ承候、別けて去る中年（享保丙申歲）カラト島より罷越候夷人へ相尋ね申候處　異國への間は海川山多、難所隔て申候由、尤も今に慥なる儀旋と相知り難く、夷人詞も不レ通　段々送りに詞を通じ申候、但し夷人共申候、マンジウと申處より異國の樣に申候由、此儀不慥、一切蝦夷地の儀、段々海上を隔て、島々遠方の地多く、宗門等の儀は曾て無之處の由（千島志料）」とある。

邦人が滿州地方を指してマンジウといつたのは正德（享保の初かともいふ）の松前記に始めて見え、サンタンと言ふ名は元文の蝦夷行記に始めて見えて居る、又天明中の林子平圖にも「近サンタン、文字あり、マシチウ、即滿洲なるべし」云々とある、滿州は即ち古の所謂肅愼女眞て、我寬文の頃に淸祖が三姓の亂を平げ、始めて國を建てて滿洲といつた、て或は曰ふ、我蝦夷人がサンタンと言つて居るのは或は此三姓の訛言であろうと（脅擯記事頭註、淸人姚女の說）、淸人一統志を見ると明かにカラフトを以て彼の藩屬として居る、即ち「滿淸の國初聲威遠く逮び、盛京東北の瀕海諸部島

民、歳に貂皮を進め、姓長、郷長を設け以て之を統し、鄂倫春(オロチョン)（北樺太タライカ以北のオレカタ）に佐領を設け、調進に供せしめ、皆寧古塔(ニングタ)吉林將軍に隷せり、故に其民は外藩に非ずして皆内屬なりと雖も其地は版圖内なり」と稱して居る、之て見ると嘗て元祿の頃專ら我松前藩が制駁して來たカラフトも滿洲の盛强の時には（乾隆年間即ち我元祿に後るゝ事凡そ四五十年）漸く松前を離れて三姓（即ち蝦夷人の所謂山丹）に通じ、松前も亦忽せにして不問に附して居た、次いで文化の魯人來寇に及んだ譯てある。して文化以後に至つてはその山丹も亦全く衰へてしまつた、之は清朝の弛廢に原因することと明かてある、（山丹とは蓋し滿洲の風化に服した各族の總稱て瀕海諸部を言つたもの。此山丹なる名の我蝦夷に傳はつたのは元文の頃だが、恰も滿洲の盛代乾隆の頃に當るから、その一事ても以て當時の形勢が忍ばれる）正德寶永以前の圖書には滿洲山丹の文字は聊も見當らず、只海外を指して漫然と韃靼の屬高麗の北などといつたものてある。（東韃といふのは東韃靼て我邦の論者が黑龍江地方を指したものてある。）

大凡そ我享保以後に滿洲の官吏がカラフト島夷の招撫を爲し、尋いて又それが魯人の侵略に會ふたもの、松前は最も先に手を着け乍ら力微弱にして隣强に對して經營の任に堪えず、幕府はそれを見て公收し、新令を發して、頗る前弊を除いたけれども亦維持久しきを得ず、徒らに松前の覆轍を履んで終るに至つたのは如何にも殘念てある、斯くして文化文政の間には全島を附庸とした舊政が全然破れ、南方の北海道にのみ嬰守するの態を生じたのてある。即ち文化元年河尻肥後守の魯人應接意見書なるものには、「國堺の儀は東蝦夷地エトロフ島と見切候て異儀無之、西蝦夷地はカラフトに御座候處、魯人サカリインの地とも申候由に候へ共、サンタン、マンヂウ等も境目相立て候心得を以て取調べ、追て相伺候樣可仕候」とある、此處に至ると甚だ怪しくなつて居る。

文化中の幕府の北門政策なるものは、露人の來寇に備へるものよりも寧ろ主意は滿洲人の占領を回復する

に在るのだ、而かも志望に成らず、巳むなく全島掩有の故圖を改めて、單にアイヌ種屬の上に（南樺太にのみアイヌ多し）のみ保護を爲し、其他の異種屬は措いて顧みず、北樺太即ちタライカ以北をば全然捨つることゝなつたのである。

按ずるにこのカラフト島夷の大陸との交通久しきことは言ふ迄も無い、がその一時滿洲の政敎に從つたのは詳には何の年か、我元文の頃て彼の乾隆の際てあるか、康熙以前では決して無い、但し康熙以前といつてもタライカ以北のオレカタ即ち鄂倫春（オロチヨン）部落は夙に滿洲人にも通じ我松前と兩屬の關係になつて居たか、此邊は尙ほ仔細に考へる必要がある。が魯人の侵略の前には淸人が之を占有して居ただけは明瞭である。俄羅斯紀聞、譯官輯秘錄中に曰ふ、「サガリインは島の名なり、拂郞察名にてイスレデ、ボウセといふ「イスレデ」は島なり、「ボウセ」は口の義にて黑龍江口に在りて塞ぐ所の島を言ふ、黑龍江即ちサガリインウラと稱ぶ、今文化五年より八十年前、西曆一千七百二十八年（我享保十三、淸雍正六）魯西亞人此島に到り眞珠を漁するものを置きたり、然れても此島昔より支那屬地なれば支那之を拒む」云々とある。淸眠り、我怠り而して漁夫の利は遂に露人の手に歸してしまつたもの、顧みて今昔の感に堪えぬ。

來書數則

楚人冠

（イ）「變な女」に就て

「變な女」に就て諸方から同情ある御書面を大分賜はつた。其中二三を此へ揭げて見たい。

一　土佐　伏木生

（前略）僕等裁判所に出入する者の眼から見るとあんな事は格別珍しくない、岸君が誤判を受けたのは氣の毒の至だが隨分之位の誤判は世間に

案例のあることと思つて諦めて貰ひたい

僕は昔〇〇院の書記を勤めてゐた者だがどんな事件も〇〇院あたり迄來ると一件書類が山のやうに溜つて迚も忙しい裁判官の手で讀み盡せるものでない、讀んだ所で又事件がこんがらがつて中に一寸何が何だか見當がつかぬ、だから斯いふ時は原被双方の書類を積んで見て其高い方を勝たせるなどいふ簡便至極な方を取ることもある、尤も之は十四年前のことだから今日は何なつてゐるか僕は餘りくはしく知らない（後略）

二

東京　非陪審論者

「變な女」を讀て後殘念で堪らぬことが一つある。「變な女」は「七、流涙」の章で「彼か陥いれた女の心持が聞いて見たい」と結んでゐるが、私は之に「八、其後」といふのを加へて

『其後一年と立たぬ間に、陪審制度の創設といふことが日本の法曹社會でやかましい問題となつた。

もしも歐米で其弊の知れ渡つてゐる陪審制度の創設など何で今頃說出したかと不審議に思つてゐると、やがて日本全國辯護士大會が東京に開かれて裁判官に對する大苦情が持ち上つた

面當の陪審論だなと私は悟つた』

といふ三項を入れたかつた

三

牛込　衣城生

「變な女」と云ふ記事中央公論に見えたり。僕讀み終つて喟然長嘆を禁ずる能はず諸賢の同情を岸某氏にそゝげり。誠に足下の云ふごとく變な女もあるもの哉。

然れ共足下予は彼女を以て一概に變な女として解する能はざるにあらずやと思へり。よく醫師に診察を乞ふて後『あのお醫者は厭なんです』とか『厭なことをするお醫者だわ』抔と陰口を利く女を見ることあり。而して其儘閑流さるれば勿論問題とならざるべけれど、それが生娘とか人の女房とかにてあらんには其親兄弟や夫達が何條閑過すべき、何條默過し去るべき。大抵は氣にして深く當人に訊すが人情の常也。その場合當人は別段惡意などのあるべき筈もなく、爲めにすると云ふ考へもなく、漠然と『厭なお醫者だ』と言ひ放ちたるに過ぎざるべけれど、相手には妙に響くものから、詰問又詰問、度重なれば女氣の今更事實は何でもなきことなりとも明かされず、つい厭なことをされました位は意志の弱い、虛榮の強い女ならば隨分遁かれまじきこと也。否世間には這麼ことから往々後へも退けず、邪を通すに到る人間すくなからず、男子にも間々這麼のあるなり。過ちを改むるの男氣なく、臆病者の常として思はず知らず深みへ陷つて我と吾が身をぬきさしならぬ境におく人間は憐れむべき也。女性を仔細に觀察すれば、お醫者に限らず、他の男性から變なこととか眼付とかをされた抔と、それを一種の自慢と心得居る馬鹿な女もありと云ふ。

足下とても、素より『變な女』とのみ解せらるゝにはあらざるべけれどこゝには岸某氏に對する冤罪を氣の毒に思ふ餘り愚にもつかぬことを述べたるに過ぎず。妄言多謝

(ロ)「新聞界の新傾向に就て」

所が今一つとえらい手紙が來た、之は僕へ來たのでない、僕の社の渡邊鶴峯君の處へ古鏡生君から來たので、其手紙には斯うある、

拜啓其後は御不沙汰致し居り候處御館全大賀扨て御社杉村氏が中央公論本月號に書かれた『新聞紙の新傾向』中マコーレ英國史中ヘスチング彈劾の條は飜譯して見やうかと思ふた程の名文と云ふ意味のこと有之然るにマ氏英國史はウルリヤム三世崩御の處にて擱筆致しあり(こゝまで書きかけてマコーレーは死んだのだ)而してヘスチングは此時よりズット後の人に候へばマ氏英國史中には如何にしてもヘスチング彈劾の條は有り得べき謂はれ無く又事實無いのである楚人冠氏の所有せらるゝマ氏英國史は他に類の無き異本にても候か平生物知り顏をせらるゝ仝氏の事なればまさか讀まぬ本を讀んだ樣の顏せられた事にはあるまじく全く小生の心得違ひと存じ候が念の爲め貴兄の手を煩はして示教を仰ぎ候早々

いやはや大變なとになつて來た、之には如何に物知り顏をする僕も一言もない、實は年末大急ぎにあの原稿を書いてゐる中チャールス一世の時のロード、ストラトフヲードだか何だかの彈劾をちやんぽんに憶い出してついあんなとを書いて了つたのである、僕は此に取るにも足らぬ僕の愚文を精讀し呉れた古鏡生君の好意を謝すると同時に謹て僕の誤を正して大方を誤つた罪を謝する、

曰く右の論文中「マコーレーの英國史」とあるは「マコーレーのワレン、ヘスチングス傳」の誤、

僕は今日以來堅く物知り顏をせぬとにきめた、

人物評論（二）

尾崎行雄論



△尾崎行雄氏

三宅雪嶺

舊改進黨は英國の政治の如きを希望して居つた、政府黨と反對黨と議論を鬪はし、輿論の賛成を得ると否とて勝敗を決する、即ち議場に在つて堂々說を述べ一議員より大臣となる、或は大臣よりして一議員となる、文明の政治は此の如きものだといふのであつた、其頃其樣の考のものが多かつたが、常に其樣の考を持つて何等か之を事實にするの資格を備へ、絶えず之を念とし、今尚ほ之を念としつゝあるは、尾崎行雄、大石正巳、他數人に止まる。多くは憲政有終の美といふ事をも口にするが、事は事實問題に在りとし、其時の勢に依つて決せんとしつゝある、併し尾崎氏は今でも英國の政治家の樣な事を欲して居る。而して其經歷が英國といへば誤弊があらうが、何と無く西洋めきた所に一寸變つた趣がある。曾て退去を命ぜられて他の被退去者と共に汽車で去つた、當時警視廳員が共に乘り込んで監視して居たが、他の被退去者は大概強て強味を粧ひ怒罵して止まなんだけれど、尾崎は從容迫らず、輕率な事をすべきで無いといふ樣な事を言ひ、役人を感心さした。後幾何もなく去つて英國に行つて歸つて、直に代議士となり、演說討論に少からず力を現はした。種々政治運動の結果、松隈內閣の下に外務參事官と爲り、該內閣の破壞し、次いで大隈內閣成立の時文部大

臣となつた、兼ねての希望は此處で略ぼ事實に現はれた。大臣として自ら意見を發表するに至り、政治家の標準を示す可きものなるかに見えた。が程なく大臣を辭するの止むを得ざるに至り、次いで内閣も瓦解し、所謂成功なる者は顧みて一時の夢と消え去つた。後種々工夫する所あり、運動する所あり、能力も別段變りはせず、依然たる尾崎行雄であるが、實際東京市長の職を維持するに汲々とし、政治家として何の見る可き無く、今後も容易に見る可きあらうと想はれぬ、といふのは何てあるか。

日本の政治が英國の如くなるを得ず、氏をして方針通りに進ましめないからでもあらう。氏は議場に於ける有數の討論家で、討論は重なる武器である、が氏の志は大臣の地位を得るに在る、此二つは相伴ひにくい。如何に討論に長じても權勢の存ずる所は別に在る、これに縁り縋らねば事はむづかしい、己れ個人として、若くは黨の領袖として主張すると、權力者に取り入ると相容れざる姿であつて、主張が立派なれば權力者の氣に入らず、權力者の氣に入れば主張が立たなく爲る、氏は此ディレンマに立つて去就に迷ひ未だ得る所が無い。氏は久しく民黨の領首として現はれた、能く戰つた、それて一度大臣にも爲つたが、大臣と爲つたが爲に別に感じ出した事が有る、陛下の思召の目出度い元勳に依頼するを得策とし、大隈伯から去つて伊藤公に赴いた、政友會で相當の位置を與へられた、が又政友會にも面白からぬ事があり、本來が意見を以つて立ちたい方、有耶無耶に盲從したくは無し、彼れや此れやの事で政友會を去り、遂に議論の最も自由なる又新會に入つた、けれども議論のみでも始まらぬ、何時迄立つても大臣に爲れ相も無い、場合に依つては市長の椅子さへ覺束無いといふ懸念がある、といふ處で再び政友會に入り込んだ。その去る時總裁たりし伊藤公は、何の爲に去るのか解せられぬと言つたが、其再び入會するにも明白にす可き理由あるらしくも無い、今後それで利益を得るか如何か、政友會内閣成立の時果して大臣を割當てらるるであらうか、割當てられても兼ね

て希望したる如き大臣の行動に出て得るか如何か、若し東京市長て終らねばならぬといふ様な事になつたら如何てあらうか。

氏は確に討論の武器を有して居る、人に長たるの資格も無いては無い、又政略の無い方ても無い、市長職を維持するは生優しい事て無い、事新しく物をせず當らず障らずにして居ればよい様てあるが、之が仲々六かしい、然るに氏は善く其邊の呼吸に通じて居る、巧みといへば巧みてある。が自ら金を作るに不得手てある、今の有象無象を驅り集めて之を支配するには金が肝要てあるが、氏は關係黨派の公利を掠むるをこそ默過すれ、自分て金を作つて一運動するといふ方て無い、到底原氏の如く自在なる譯にゆかぬ、それて能く原氏と互角に爲る時が有るてあらうか。氏の志を得ぬのは勢の不可なるからてあらうが、不可を不可として長所を發揮すべき所から言へば、黨首として議場に立ち獅子奮迅するに若くは無い、團體の小なると大なるとは問ふ可きて無い、グラッドストーン、ヂスレリーたるよりパーネルたる可きてある、之を専にすると日本憲政史に特筆すべきものが有り得る、が同時に大臣となるは縁遠くなる、其處が苦痛てある。

氏は正義を好むらしくして案外政略を好み、政略を好むらしくして正義を輕んずる事を憚る、どうも其邊に惑ひ、事がさつぱりせぬ。金が無くても玄關を立派にしたい方て、眞面目な處が有りながら虚飾を免れぬ、有の儘に打出す事の出來ぬと見える、有の儘にすれば事單純になるが、左様は行かず、餘計な處に餘計な心配が有る。併し元と性質て自らは苦痛を感ぜぬやも知れぬ、が折角政治家たるの器を持つて生れて大に伸びぬのは惜いものてなからうか。今後發展の道無しとはせぬが、近い處て言へば市長職上り突き落し、逆境に陷れたら或は奮躍して新生面を開くやも測られぬ、すれば不幸が幸と爲るのてある、恕ひ市長とかいふ者に爲り居る爲に何とも動きの付かぬ事となつて居る。凡々たる凡物ならば、どうても構はぬ、市長も結構てあらうが、平凡の生れ付きて無いと思はるゝ丈、惜い氣

がする、何とか奮ひ起つて貰ひたいものである。（談話筆記校閲濟）

△尾崎愕堂氏

柏軒

尾崎氏の進步黨に在るや、犬養氏と殆んど管鮑の交ありしが如し、犬養氏能く策り、而して氏能く戰ふ、彼氏在る所必らず此氏あり、恰も形影相隨ふ如くなりき。

尾崎氏黨人として精勵倫を絕す、苟くも地方を遊說するに非ざれば必らず黨の本部に在り、正容端坐、苟くも惰色あらず、素より群情に迎合する所なきも、また犬養氏の如く痛罵骨を刺すとあらず、茲に於てか黨人靡然として氏に服し、人の聲望大に揚れり。

氏が多年の政友と袂を別ち、卒然伊藤侯に從ふて政友會に入るや、世或は犬養氏の陰に排擠したりし結果なりといひ、或は立憲黨内閣に文相たりし時、共和演說に由て失へる宮中の信任を復するがため、翻然伊藤公に屈せるなりといふ、未だ孰れか是なるを知らず、或は共に非なるか亦知る可らず。

然れども氏が幾くならずして政友會を去り、又新會其の他に在つて、今また政友會に復歸せるを視るに、黨人としての節義に於て聊か疑ひなき能はず、少くも其の分別に於て智愚如何に疑ひなき能はず、或は謂ふ犬養氏の智と離れし氏は、一の口舌の雄のみと、是れも亦果して中れるや否や確かならず。

東京市長としての氏は、到底無能の誣を免かるゝ能はず、或は龐統百里の才に非ざるもの乎、但だ衛生局長としても、檢疫部長としても、民政長官としても、滿鐵總裁としても、共に令名ありし人に視れば、氏は餘りに大に過ぎて寧ろ能無なきに似たり、氏果して甚だ大なる乎。

氏の市長たるや、專ら政友派の庇護に由るが如し、我が鄕の偉人河井蒼龍窟嘗に曰へらく、世に無くてならぬ人たる能はずんば、有てはならぬ人となるべしと、

氏今は屁も放らず沈香も焚かざる葛天氏の民の如し、氏自から持すると清廉といふと雖も、氏を庇護する所の市の政友派は、タマニーホールに似て而して更に醜なるもの也、氏の大なる河海の細流を擇ばざると齊しき乎。

進歩黨を去て後の氏は、總て疑問也、賢愚も疑問也、大小も疑問也、而して能否も亦疑問也、人の評は棺を蓋ふて後に定まる、今春秋に富む氏を評するもの何ぞ漫りに斷ず可んや、唯だ氏不幸にして早く死せば、決して好評を得ざるや明か也。

△尾崎學堂

早川鐵冶

明治三十年頃大隈伯の處に行く樣になつてから同邸て氏と知り合つた、その年には僕は農商務省から再び外務省に舞ひ戻つたが、其時氏は外務省の參事官てあつたから其處ても知る、又翌三十一年には氏は憲政黨內閣の文部大臣となつたが、其時僕も矢張り內閣に居て行政整理の任に當つて居つたから其處ても知る、其以前にも固より顏位は知つて居たのだが親しく交つた事は無かつたのだが、間もなく氏は桂冠する、憲政黨內閣も倒れる、氏は去つて政友會に赴く、それから長く懸け離れてシミジミと會つた事は無い、其間に氏は細君を失ふ、僕も妻を失ふ、境遇の同じき處から同病相憐むて、初中終念頭に掛け居た位のもので深い交りも無い、市長になられてからも格別用も無いから會ふ事もせぬといふ樣な兩人の間の關係である。

氏は高潔なる理想を有し、金錢の慾に淡く、操持も堅實て品行も先づ方正てある、一時天下の青年の渴仰を集めて持て囃されたものだが、成る程青年が儀表としても宜い人物と思ふ。氏の閱歷を言へば、初め慶應義塾に入り、それから工部大學へ行つて化學を修めたものだが、當時の同大學の修學年限七年の處を、氏は兎角專門の學科よりも新聞學が好き、新聞といふのもそれには無論政治が含まれて居るからてもあるが、遂

に二年で止めて操觚者となり、種々珍聞やら報知新聞やらの記者となり、それから去つて新潟に趣き新潟新聞の主筆となつた、それが何でも漸く二十一二の頃であつたろう、明治十三年に大隈伯に知られて爾來伯の幕下に就いた、が伯に知られたといふよりも初は矢野龍溪に知られ龍溪の兒分となり、その手で伯に接近したもの、矢野の知遇を得て翌十四年統計院に入り、統計院權少書記官となつた、權少書記官といへば當時は奏任官七等であるから仲々威張つたもの、氏は年少にして既に此榮職に居たのであつたが、間もなく大隈伯は桂冠して在野の人となると同時に氏も亦袂を連ねて爾來野武士と爲つたのである。

氏は辯論に擅場を有して居る、就中辯難攻撃となつたら最も著しき特長を持つて居るので敵手を肉薄して餘力を殘さぬといふ快舌を振ふ、明治二十六年頃一時民黨の勢力旭日昇天の勢で有つた時でしたよ、氏が議會に立つて時の藏相渡邊國武と爭ひ國武を窮迫し、豫算の一厘一毛を迄突き詰めた所などは素晴らしいもの尾崎の全盛時代と言つたら彼の頃であつたでせう、それから往年の憲政黨組織の時には總務委員に擧げられ、其内閣の成つた時には文部大臣に迄なつたのだが、一寸不謹愼な演説を遣つたが爲に、いや格別不謹愼といふ程も無い下らぬ事なのだが、例の共和演説といふものをやつて、事あれかしと待ち望んで居た官僚黨に辭柄を與へ、遂に其乘ずる所となつて桂冠の已むを得ざるに至つた、其處で尾崎は考へたのである、宮中に勢力無き大隈に附いて居た所で所詮浮かまれぬ、それよりは伊藤に趣いた方が宜いと思つたので遂に去つて政友會に投じたので、これは理由を言はせたら斯うでは無かろう、別に色々に言ひもしやう、言ひもしやうがそれ等にお構ひなく傍からして氏の當時の心事を忖度すると多分斯うで有つたろうと思ふ、だが此點のみは他の凡ての點に於て氏を敬愛するにも拘らず僕の甚だ慊らずと思ふ所である。數十年來苦節を共にし來つた大隈を棄てて弊履の如くに顧みずに去るといふのは甚だ感服せぬ、勿論相應の人にして猶且つ大隈の幕下を去

つたものはある、長谷場純孝の如きもそれだ、だが彼と尾崎では關係が違ふ、言はゞ尾崎は譜代恩顧のものである、子飼ひである、それ故純孝の去ると尾崎の去るとは違ふ、前者は咎めぬが後者は咎めざるを得ぬ、それにも事情はあろうがあつたからとて大抵の處迄は國士の出處進退の上からして忍ぶのが當然である、然るに此忍ぶ可きを忍ばなかつたのは全く餘りに功名にあせるからである。あせつたからとて駄目である、多年勢力を扶植して來た黨派の力を根據としてなら兎に角、それに氏は理論の人で實行の人では無い、今から政友會に入つて或は政友會内閣組織の曉に旨く大臣を割當てらるゝも知れぬが、割當てられたからとて何も出來ぬ、勢力を張る譯には行かぬ。飜譯すればつまり伴食といふ事になるに過ぎぬ。其處へ行くと杉田(定一)などは感心だ、一時進歩黨の方が勢力の振つた事があつた、まだ三百代議士といつた時に議員の頭數か優に百五十の上を超えた事があつたが、其頃進歩黨で頻に彼を誘つたけれども彼は遂に靡かなかつた、最も格別の能力格別の長處も持たなかつた彼としては利益の打算からも動かぬのがよいと思つたでもあらうか、兎に角毅然として動かなかつた、動かずに居ればこそ終に政友會では彼をして議長に迄したではないか。尾崎も正に彼の態度を學んだ方が今日に於て勢力も有つたろうに。男子生れて一度大臣となる以て榮とすべしだ、最う澤山である、此上再びなろうなどとせなくて別に操持を堅くして自己の長所を發揮した方が宜しい。

それは進歩黨の餘り馨ばしくないことは知つて居る、知つて居ればこそ僕等も今日此樣な事をして居る、進歩黨の連中は小人物のお揃ひで氣局狹隘猜忌の念が強く、如何にも斯うにも始末におえぬものばかりだ、前に言つた三十年の頃僕が外務省に居つて兎にも角にも働いて居る盛りには例の嫉妬心といふのであろう、内輪同士で有りながら盛に苦め樣とかゝる、色々の味方の新聞が惡口をする、高田早苗の主刊して居る讀賣新聞にはポンチを掲げ、僕が大隈夫人の背後に廻つて

その腹の裏面の世話迄した處が描いてあるといふ始末、一所に仕事などのやれる手合でない、左ればとて考へる所あつて暫く政界を去つて居るのだが、といつて全然政治に念が無いてない、無いては無いが他黨に投ずることも潔しとせぬ、孰れかといへば僕の性格は大隈系てはない、寧ろ後藤（象次郎）系である、大同團結以來の關係からして思つても後藤黨たるべきもので、施いて現在では政友會に投ずる方が處を得て居るものである、特に兼ねて昵懇の間柄なる鳩山和夫も今は行つて居れば、曾て仕事を一所にした福井三郎も居る、行かうと思へば、行かれぬ事もあるまいが、併し一度は大隈伯に知られたものである、如何に心地が惡いからとて今其率ゐられた黨派を去つて敵黨に投ずることもし得ない。それ故今日あらぬ方面に斯うやつて居る。然るに尾崎は此僕のし得ぬ處を敢て爲し敢て忍んで來たのである、曾ては犬養尾崎と連稱されて大隈の股肱と知られた關係のあつたものを一朝にして離れ去つたのである、それ以來如何であるか、青年の渇仰は如何てあろうか、僕の見る所に於ては聲望甚だ墜ちた様に思はれ、政友會に入つたが政友會にも居つかれず、去つて又々新會などに入つた、彼様な處へ投じたのは如何する氣であつたか、由來又新會なるものは丸で浪花節講釋師の人物ばかりだ、河野廣中といひ坂本金彌といひ、皆岩見十太郎、宮本武藏式だ、語り物としては面白いか知らんが將來歷史に名前の殘る連中てないから我々仲間では彼等を稱して浪花節の豪傑といつて居る、尾崎も矢張り浪花節の人物になるのであつた。

要するに尾崎は理想の人理論の人で實行の人では無い、今政友會に入つても原が群心を操縦し黨勢の扶植を勉め、尾崎が議場に立ち不爛の舌を揮ひ、警句諫語を續發して勝を辯難の間に爭ふといふ事になつたら、政友會は分業の上に各其人を得て働ける事であろう、が尾崎は到底實務に當つて實蹟の擧がる人ではない、原に一籌を輸するは勿論である、其點から見ても氏は矢張り進歩黨式である。進歩黨といふ處が由來物知り

振りの口達者の、地方へ行つて一寸旨く演說の遣れるといふ、そして體裁作つて立派に見られ樣とし、思ひ切つた仕事は迚も爲し得ぬといふものばかりの揃つた處てある、割合に正直てある、只氣局が小てある、それも其筈御大將の大隈伯からが元來正直てあつて、奇麗好みて、品性のよさ相なもののみを愛する、そして一寸學殖あり一寸辯才あるものを近ける、筋の惡い計畫などを持つて行つたとて受け入れる人てない、人は大隈が富を作つたといふがその富とても何程のものがあるか、幾らても有りはせぬ、それとても決して不正手段によつたもので無い事は其性格から推しても分る事だ、が一種の經濟的手腕は持つて居る人てある、斯う言つては惡いか知らぬが異なる觀察點よりすれば彼の學校經營も一種の經濟的施設てある金儲てある、以前に坪二十錢位の安い地面を二十萬坪も買ひ込んて其處に學校を建てる、學校が繁昌する地價が暴騰する坪十圓づゝの利益と見ても大したものてないか、勿論學校へ地面を寄附したともいふがそれ迚高々三千か四千坪かそこらの事てあろう、此樣な事をして儲けるが他に惡いことはされぬと思ふ。此伯の門下に集まるものは又自ら左樣のものならざるを得ぬ、それ故割合に淸廉のものは多かろうが、口ばかりて仕事の出來るものは無い、皆長袖てある。尾崎も亦此流の人てある、長袖てあつて武士ては無いし、外務省に居て參事官をやつたにしても、それによつて得た經驗は只面倒なものだと會得した位のものだろうと思ふ。市長になつたのも故星亨の兒分等が他に擁立すべきものが無い爲に擔ぎ上げた迄で、氏は擔ぎ上げられて騷いて居る丈の事てある實績を擧げる。事は出來ぬ、我利々々連が多いからとてそれ等と爭ひ征服すればよいてはないか、併し氏にはそれも出來ぬ、尤も長らく貧生活と苦戰して來た後てもあるから萬一五千圓の年俸を失ふ事があつたらと心配する弱味も有るてあらう。（談話筆記校閲濟）

△尾崎行雄君

法學博士　花井卓藏

僕は比較的尾崎を知つて居る、又久しく交つて居るから、恐らく尾崎を誤解せぬ一人であらうと思ふ、尾崎に對する批評は毀譽相半ばして居るが、僕は今の時代では慥に將來を有する人と思ふ、否有せしめてやりたいと思ふ。

尾崎は今寧ろ逆境の人と稱してよろしい、それはその筈で、清廉なる彼の性格を以てその性格に副はぬ役柄を勤めて居る、その言ふ事は行はれぬ、行はれなければ境遇の上からいへば慥に逆境である、又理性に偏する彼の流義を以てその流義に副はぬ議員を遣つて居る、その言ふ事は行はれぬ、行はれぬから默つて居る、それ故に此處も亦彼に取つては逆境である、併し我輩は今の政治界に廉潔の心と理義の論との迎へられぬのは彼の現在の逆境である原因には相違ないが、之を以て偶ま彼の大を見るに足ると思ふ、萬望(とうか)舞臺が一變して彼に彼の主張を完うする機會を與へてやりたいと思ふ、蓋し今日の状態に安んじて死ぬ程でもあるまい。

尾崎の政友會に入會した理由は、その一院一黨論に在ることは無論である、全體一院一黨論は或る理由の下に我輩も曾て主張した所のもので、彼とも亦論じ合つたこともあるものだが、一院一黨の目的にして慥に達せられるものならよいけれど、それの達せられぬ間は矢張り一院數黨であつて役に立たぬ、そこで僕は尾崎の行き方を以て早しと思ふてゐる、併し行つたからには清廉の氣風を全黨に及ぼし、理義の流風を普からしむる樣にして貰いたいものである、

我輩は一院一黨の今の時に於て到底その行ふ可からざることを看破した、世には政論の實行と政論の批評とは別であるといふものもあるが、僕の見る所では批評も亦政論實行の一部であつて、政府政黨の爲すところ行ふ所を觀察し批評し、其善を助け其惡を撃つのは國民政治に與るの第一義で、監督的政治家の本領は此

處に在ると思ふ、尾崎の如き人は寧ろ超然として流俗の外に立ち此監督的政治家の一人として、閣外の人として無冠の宰相を以て終始することの適當なる人格てあると信じて居る、それ故に僕はその政友會に走ることの寧ろ不得策て無いかを疑ふものてある。

△尾崎行雄

伯爵　大隈重信

尾崎が諸所を流轉し廻つて又政友會へ入つたと？夫れ聖人は物に凝滞せずだから何も怪むに足らん、時の政治狀態に順應して移るのは元と賢いもののする所だ、これから先又政海の波瀾の起伏に從つて政友會を去ることもあるてあらう、尾崎の未來觀？何時も云ふ事だが未來觀は六つかしい、神ならずんば言ふに由なしだ、だが尾崎も彼れ是れ騷いて居る中には年が寄る、年が寄れば乾度死ぬる、これだけは確て正に疑の無い話だ、その時には友達だから乾度葬儀に出て遣る、尾崎は乾度我輩よりは前に死ぬる、若いのに何故尾崎が前に死ぬるつて？他に理由は無い、只賢いからさ、賢いものは短命なものだ、我輩の様に馬鹿なものばかり何時迄もダラダラと生きる、最も馬鹿に賢いと又違ふが善い加減に賢いものは乾度短命する、孔子も上智と下愚とは移らずと言つた、長命するものはその移らずといはれた上智と下愚とだ、すれば我輩はその上智と下愚の孰れかに編み込まれる代物だ。

尾崎に虛飾の弊があるといふ評が有るつ？何、左樣ても無かろう、人各々天性ありて、成る程尾崎の毎時も白い大きな打紐を垂れて儼然と構へる所は左樣とも想へば想はれるか、それは故神鞭廉溪の亂髮粗服て濟まして居たのと同樣、勉めるのじや無くて只自然に出づるのであろう。尾崎は正しき理想を追ふて進むのか但しは內心權威を慕ふてあせるのかつて？、其處は何とても言へば言へるもの能く其肚裏に立ち入つて見なくては定められぬね、

原との調和如何だつて？尾崎は賢い男だ、それに年

も取つて來た、其邊にも大分如才は無くなつて來たゞらう、人を統御する上に於ける兩者の批評つて？それは兩者各々宜しき所があらうから一概しては定むべからず、尾崎てなくては叶はぬ所と原でなくては叶はぬ所とあらうから優劣などは言ふ事が出來ぬ、尾崎が廉潔？さあ如何なれば廉潔といふのか分らぬ、金を借りて返さぬのは不廉なりと言へぬか不潔なりといへぬか、只賄賂を取らねば廉潔だといへるか、廉といつても至廉、潔といつても至潔といふことが許されるか、尾崎は成る程賄賂などは取りもすまいが恐らく大金を借り潰しぶつ倒して洒ア々々して居るもの彼程のものは少かろう。金を好まぬから廉、好むから不廉といふ様な事を世人は言ふが、それが分らぬ、好む好まぬは別である。金は我輩も好む、が至廉を以て呼ばれた伊藤公迚も好む、伊藤公も陞爵せられて辭退した事は聞いて居るが、金を頂戴して辭退した事はまだ聞かぬ。

原と尾崎との人物角力？、無造作に原を以て優れりとも言ひない、原側のものをして尾崎の辨護をさせたならば如何にもヅウ〳〵しくつて押が强くつて如何樣な苦境にも辛抱强い處が原に優つて居るとも言はう、貧乏に堪える處などは全く感心だ、隨分これ迄辛い境遇に陷つたのだけれども我慢をして平氣て來て居る、彼れが原なら迚も堪えられぬ、堪られぬが、原なら又決して彼れ程の境遇に陷ることはせぬ、尾崎なればこそ陷るのだ、尾崎は金を作る才が無い、才が無い處を以て人が偶ま廉潔だと許す迄のことだ、廉潔だから群心の總攬が出來ぬ？原程には行かぬ？黨首としての兩者の伎倆は此點を以て分れるか？穴勝ち左樣ばかりも言ひない、其處は兩者各々天分の異なる所ありだから。

（談話筆記）

△尾崎氏の人物

角田眞平

事實理想を有して居らるゝ事は昔からであるが、昔から又其局面が廣く無かつた、即ち交際といひ、艱難

辛苦といひ、多方面の事情には通じて居られ無かつた理想を實現するにしても、他の多方面の觀察を有する人とは趣を異にして居るから、乍殘念結果は一つも上らぬ、これが即ち氏に取つての缺點てある、

次には、以前から數學の頭もある、數學の頭はあるけれども、實地の上に影響するその割出し方はといふと、有らゆるものに接近して實驗し得る樣に割り出すのと單純に割り出すのとの相違がある、只これ丈だ、夫れを世間て一概に尾崎には數字の頭が無いなどといふのは間違てある。

近頃ひどく氣焔が上らぬ樣に世間ていふが、夫れはいかぬ、近年漸く各方面の事情に熟し、それを實行する上に就いての經驗が積むで來たからてある、猶今少し氣勢の上らぬ時代が有ろうと思ふ、丁度其方面の少い時代に、攻撃に就いてのみの數字の計算と、極單純な理想の上に於ての口若しくは筆とが、當時千人中の九百人にまて受けて大に喜ばれたのだ、けれども寧ろ反對に千人中の百人にだけ納得させて、他の九百人には漸次に首肯かせるといふのが政治家の骨折り處てある、氏は今之を多少理解して居る爲に世間には左樣に見ゆるてあろうが、決して氣焔が無くなつたては無い。若し政治上の態度に就いて、いくらか曖昧に今迄處置した事が有りとするなら、それは自分の理想を發揮する機會を待つが宜いとした爲で、他の人の無爲と同じ樣な無爲に居たのては無いと思ふ。

そこて、通常の市長として只市を經營するといふ上からいへば、實は何黨何派にも關係を有せぬが至當と思ふ、市政と共に國政にも當分其方が一番、宜い樣に思ふ、然るに氏の今政友會に入つたのは其處には必ず何等かの理想が有らう、けれども世間の言ふ如く多數黨に入つて一身の便利を受け樣などといふのては決して無くて、願はくは此多數黨たる政友會をして、立憲的動作をなさしむる樣に、其機會を早めんといふ理想を以てるに相違ないと思ふ。

東京市の事に就いては理想は色々持つて居らるゝが、行政事務を著しく、即ち仕事を事實に上げて行く

道行を攻究する點に於て、尙ほ練習す可き廉が多々あると思ふ、これは自ら其事を氣付いた上、好き伴侶をさへ得れば進歩する事で、決して出來ぬ事では無い、寧ろ手段をのみ講じて理想も抱負も無い人間は之を醫する事は六かしい、が之に反して實行する方法の方は、根氣、勉強、修練等に因つて必ず出來上る事と思ふ。

氏は餘りに遣り方が單純である、早い話が此度の電車市有問題でもだ、此問題には大分長い經歷もあるので、一朝一夕の事では無い、愈よ之を實現するとなつたら十分の努力を以て貫かうとせねばならぬ、今の政府のものなどは何も恐れるべき程の者でない、氏は何であるか、苟くも前の文部大臣正三位尾崎行雄でないか、十分に主張し十分に說得して差支無いのである。然るに彼れまでの問題が中々手間を取て其上會社側から僅か三十分ばかりの間に斷られてしまつて、先がいやだといふから仕方がないといつた調子に引下つて來るんでは仕樣が無い、又事態非なりと見たら市參事會にも、時機尙ほ早しとの口實の下に掛けぬがよい、私が危ぶんだかその當日迄大丈夫だといつて提出し、其結果はあの通りである、理想は結構だが、それを實現し得というふ道行に就いては毎々此の如くであるには困る、此點に於て何とか信ずる好伴侶其人を得て十分に研究して貰ひ度いと思ふ、

世の中は善人ばかりで無い、惡人原が多い、善人ばかりを扱つて惡人は扱はぬといふ譯に行かぬ、之を超然と見渡してその孰れにも吸收されず同化されず、十分に呼吸を計つて己れの所信を進むる樣に勉めなくてはならぬ、之を俗な事といへば俗だが、併しその俗な處に自ら高き處がある、政治家の當に勉む可き處と思ふ、氏は此點に於て今少し攻究を要すべきである、それに事をするには根氣がなくてはいかん、己れ宜しと信ずる以上は、如何なる惡聲惡罵の包圍の中に立つとも儼然として動かず、其十年若くは二十年、或る時には靈棺の後になりとも眞意は世に明白となるべき時あるを確信し初意を貫かんとする方法を講ずる事にて掛らねばならぬ、氏は如何にも此點に於て、勇氣と言は

うか根氣といはうか、少し遺憾な所がある、これも亦猛省を欲する處である。且人事の複雜なる點に想到する事の不要意なるは、是亦遺憾とする所である。

△國寶尾崎行雄氏

△△子

○今の議員中、若し眞に經綸あるものを數ふれば、吾輩は指を大石正己、犬養毅、尾崎行雄の三氏に屈す

○大石氏は吾輩深く知らず、而かも黨首としての資格に於ては氏の右に出づるものあらざるべし。其人物を想望するに、何人をも近け、又何人をも愛することを得る人ならん。犬養氏は容易に人を近けず、而かも一旦近くれば非常に溫かなる所ある人らしく思はる。只溫めらるゝまでには、時がかゝることを忘るべからず。

○尾崎氏は犬養氏の如く偏狹ならざる代り、又彼の如き熱なし。一言にしていへば尾崎氏は自己を守ること餘りに堅實に過ぐ。

○何事に對しても何物に對しても即座に明快なる判斷を下すこと尾崎氏の如き蓋し天下稀に觀る所なり。此點に於て當さに德富蘇峯氏と好取組たり。吾輩は花井卓藏氏に法學博士を與ふるの前、何故に此二人を文學博士になさゞるかを怪む。

○尾崎氏の戰鬪振りを見るに、先づ勝つことよりも負けざることを工夫す。角力に譬ふるに梅ヶ谷の取口なり彼は最も黑星を嫌ひ、丸星を取る能はずんば引分に畢ることを希望す。故に彼には痛快なる武者振を見ることを得ず。

○東京市長として事務の擧らさることは世人の批難する所必ずしも酷にあらざるべし。吾輩をしていはしむれば彼が東京の港灣河川を修築することを知らざる、東京市長としての最大缺點なり。東京市が只消費の都會としてのみ存し、日本の經濟上に甚だ不利益なる影響を與へつゝあるは、主として東京の港灣河川を修築せざるより起る。市區改正の如きは抑々一些事なり。市

政にバチルスの絶えざるは是亦寧ろ當然のみ。吾輩は左様なる小問題は之を閑却しても可なりと思ふ。只東京市の帝國に於ける位置を自覺し、大處高處より施政の方針を立てんことを希ふのみ。

○然しながら、彼の人品、學問、才識は眞に當代の珍にして、殊に外國に對しては、あれ程の市長は容易に得べからず。吾輩は彼の永久に東京市長たらんことを希望す。吾輩は尾崎氏は一の國寶なりと考ふ。

○若し尾崎氏を大學總長となさば恐らくは天下無二の適任者ならん。

○吾輩嘗て今の政治家を鳥に譬へたることあり、西園寺侯は五位鷺、犬養氏は隼、河野氏は鳥、而して尾崎氏は孔雀。

△尾崎行雄論

田川大吉郎

◎尾崎氏は餘りに早く名を成し過ぎた、勿論、其名は其實の賓て、尾崎氏の學問、文章、才辯は確に當代の俊である、然し乍ら尾崎氏が此名を得るために更に多くの試錬、困難を經て居つたら更に大いに可かつたてあらう今日の尾崎氏はいさゝか其既往の聲名に活動を妨げられて居る嫌ひがある、明治の社會は實に多くの才人を作つたけれど、其才人を遇する途を誤つて屡々其全才を發揮せしむる機會を逸した、僕は社會が尾崎氏を遇する太だ酷ならざりしことを憾むる一人である、

◎それて一言にして氏の人と爲りを評すれば、要するに聰明餘り有つて斷の足らざる人かと思ふ

◎其新たに政友會に復歸したことは、幸か不幸か、今日に於て豫斷を下し得ない

◎或一派の人は、氏の將來を卜して、最早下り坂の人未來の無き人と貶するけれど、讀書の人、理義の人、割合に若き人、青年向きの趣味、性行を有する人、此等の一點だけても、確に未來は有る、寧ろ其擇び方次第ては、反つて大いなる光彩を今後に發つて有らう、

◎一體僕は尾崎氏を思ふたびに矢野文雄氏を思ふ、兩

人の行蹤が頗る相似て居るからである、共に慶應義塾出の人、共に改進黨の人、共に大隈の幕下、共に文章辯舌、著述、氣品を以て一代に重きを爲した人である、而るに其矢野氏は二十二三年頃改進自由の聯合を企てて成らず、伊藤公に趨つた、當時の尾崎氏は矢野氏の態度に正面から反對した人であつたが、十年の後、尾崎氏は矢野氏の前蹤を逐ひ進歩自由の合同を企てた、而して成らず又伊藤公に趨つた、のみならず當時の矢野氏は宮內省に隱れ、今日の尾崎氏は東京市に隱れて居る、兩人の往く所互に相類して居るては無いか、

◎矢野氏が改進自由の聯合を謀る時も、尾崎氏が進歩政友の合同を謀る時も、犬養氏は之に反對した、そこに犬養氏の面目本領がある、然し犬養氏は何時までも其合同を謀らぬてあらうか、形勢は日に〱變じつゝある、僕は犬養氏も亦遂に同樣の企てを爲すべきことを豫想する、實に直覺的に之を豫斷する、同時に無限の憾みが胸を衝いて起る、嗚呼此三人が、仲好く當初の關係を維持し、讓り合つて競逐したら、確に天下無敵てあつたらう、而して其目的も大概大成したであらう、三人者の離散こそ此上もなき一代の恨事であつたと、返らぬことだが僕は此んな樣な追懷に耽ることがある。

◎そは兎に角に、尾崎氏は聰明の人である、或は餘りに其聰明を用ゐ過ぎつゝあるかも知れぬ、例へば尾崎氏は算數に昧ゐ人と謂はれて居る、然し乍ら決して算數に昧ゐ人では無い、そこで氏は其算數に昧くない、相應に明るいといふことを實際に示さんとして屢々自ら算盤を用ゐることが有る、マア昧ゐと謂ふなら昧ゐていゝては無いか、世間の謂ふまゝに任せて置いても政治家たる尾崎氏の信用勢力には格別の增損が無いては無いか、ところが尾崎氏はそれを其儘に打つ抛つては置けぬらしい、曾て添田壽一氏が大藏省の政府委員たりしころ、僕に話した、衆議院の手合は槪して豫算が分らないけれど、其中に分つてるのは、自由派て湯淺次郎、改進派て尾崎、武富、犬養の諸氏であらうと、知る人は知る、尾崎氏は算數にまても其智を用ゐて居

るのであるが、實はそれは過ぎたることとては無からうか僕は竊に疑ふのである、

◎算數の末にまて力を用ゐる、從つて智慮を用ゐ過ぎる、從つて斷に缺ぐる、僕の見る尾崎氏の弱點は此處だ、尤も尾崎氏自身もソロ〳〵此弱點を感知し始めたと見え、いつか、閑談の折、自分は果斷に富んて居る自分の長所はこゝに在ると思つて居たが、此頃に至りそうて無いことが漸く分つた、人は自分の長所を短所と思ひ、自分の短所を長所と思ふものてあると語つて居た、斷じて行へば鬼神も之を避く、尾崎氏には此勇氣が有る筈てある、少くとも世間は尾崎氏を其樣の人と認めて居る、一誠邁往、只正理の在る所、野猪の如くに猛進する種類の人と世間は從來氏を認めて居つた、然し尾崎氏は一の矢、二の矢、三の矢、と次の手次の手の工夫を凝らす人てある。

◎尾崎氏と犬養氏と相結んて居た時は、尾崎氏は正面の人、犬養氏は裏面の人、尾崎氏には此樣の氣遣ひ煩ひが無く從つて尾崎氏は最も率直大膽に自由に行動し得たのかも知れぬ、若し然りとすれば尾崎氏の犬養氏と離れたのは尾崎氏の損てあつた、或は又犬養氏の損だかも知れぬ、僕は尾崎氏の犬養氏と結んて居た場合の尾崎氏を知らぬが、近時の尾崎氏に就て、かれこれ思ひ運らす時は往々こゝまて聯想することもある。

◎尾崎氏が政友會に往つたのは、必らず大いに働らく積りてあらう、然し果して働らく積りなら又新會に居つてども働らける筈てある、寧ろ又新會に居つての働きが働き榮が有りはせぬか、且、政友會は果して氏に氣持よく働かせることが出來るてあらうか、否や、是れも僕の疑ふ所てある、

◎且、僕の記憶に由れば、尾崎氏が前年政友會を去つたのは、政友會の無氣力無節操に愛相をつかしたからて有つた、確か地租の關係かと思ふ、尾崎氏は政友會を率ひて桂内閣と決戰する積りて有つた、ところが長袖善く舞ふ、多錢善く買ふ、桂内閣の老巧なる尾崎氏の知らない間に、早くも政友會の多數を手撫けて居た、即ち政友會は輙く桂内閣の節度を奉し、尾崎氏の指揮

を受けなかつた、尾崎氏は失望憤慨して政友會を去つた次第である、今日の政友會には此患が無ろうか、尾崎氏は再び其轍を踏む患は有るまいか、聰明の氏である、そこは善く謀り善く考へたに相違ないけれど、僕は疑ひ深くてそれを氣遣ふのである。

◎氏の性格と社會の趨勢とより打算すれば、僕は氏が、政友會にも其他の仲間にも、到底滿足し得ざる或者を抱いて、遂に青年の群に投じ、青年を相手に理想を鼓吹するの日が有るて有ろうと思ふて居る、果して此く成り行くかどうか、それも疑問ではあるけれど、僕は此く成行くことを、氏の天分に叶ひ、氏の爲に寧ろ望ましき境遇であると考へて居る、未來は青年の境なり、青年を味方とする者は永久に活く、氏若し此境に投ぜば、其光譽ありし生涯は更に一段の異彩を今後に放つてあらう

◎彼の丸の内の三菱の原と三崎町の練兵場の跡とを見較べ玉へ、今日の三崎町は最早練兵場の跡か何だか薩張分らぬ、小さい家を建たからである、丸の内の方は今に草茫々として何年家屋が立ち揃ふか見込がない、流石の三菱も當惑したと見え、此程に至り、貸地、三菱會社の建札が墨痕鮮かに立てかざらされた、遲滯の原因は理想の家を建てたからである、理想の町を作らうとするからである、理想は成り難い。

◎加之、理想の中途に在るものは極めて醜い、丸の内には堂々たる大厦があるけれど、尚三崎町の小じんまりした家居街衢の整齊に如かない、理想の人、小さい改革をすれば、何のこれしきにと蔑すが、藩閥の人、小さい改革をすれば、好く出來したと喝采する左れば仕事を小器用にやるには理想を抱かぬに限る。實際に着して上を見ないに限る、彼の藩閥は其人である、だから藩閥の人には成功がある、小成功がある、三崎町風の小成功がある、而して大なる丸の内の堂々たる新市街は出來ない

◎理想は成り難い、理想は抛ち易い、看來れば既に抛つた人が多い、何れも三崎町風の人のみである、尾崎氏は半面には大厦、半面には雜草、批雜だらけの今日

の丸の内を持ち耐へて、遂に東洋随一の新市街を作る理想の人と爲り了ふするか否か、或は作り了ふせぬまても其理想を抱持して終始する人と爲るかどうか、兎も角も期待せらるゝ一人である、

△尾崎行雄君

中村彌六

尾崎君は頗る理想に富み且自信力の強き抱負の高き人てある山に入れば猪には猪の路があり鹿には鹿の路がある同君を知らんとすれば同君是迄の路を考察すれば分る同君は正々堂々曠野で戰ふ人て奇計奇略を施して勝を制する事は寧ろ不長所てあらうと思ふ尾崎君と云へば直に彼の議會の初め正面より大刀をかざして藩閥の壘に肉薄したる當時が思ひ出される誠に立派な將軍てある幾多の苦闘惡戰の末憲政黨の當時漸く敵城を乘り取りたるものゝ藩閥黨の盛り返しに逢ひ三日天下て終りたるが此の經驗が在野政治家をして新タクチックを案出する事を餘儀なくせしめた在野政治家は此の辛き經驗を嘗める迄は藩閥黨を一と丸めにして一擧擊破せんとしたる從來の作戰のあやまてる事を悟り頻りと考案に沈み居たる際恰も好し伊藤對山縣即ち文治派武斷派の軋轢反目甚だしかりしゆへ之を利用して政海を縱斷するの得策捷路なるを信じたる人々の中尾崎君は最も熱心なる主張者てある星君が無條件て自由黨を伊藤公に捧け今の政友會を組織したるも尾崎君が多年の政友と袖を分ち大隈伯を振り捨て此の政友會に投したるも期待したる歸着點は同一だと思ふ尾崎君が政友會へ入り又同會を出たのはコンナ樣て有たろふと忖度する事が出來る人には添て見よ馬には乘りて見よと云ふが添て見て案外て有つたてあらう御大將伊藤公の前後左右には譜代の郎黨が取り圍み居り何事も藩閥式てあり又一方には星君の周圍をば十人衆や若者頭が取り卷き居りて子分少き尾崎君の言論は一も通らず是て異形變體の藩閥の門に降伏したる如き感を起したてあらふ是ては駄目だと合點して寧ろ言論の自由を得る立場

に在るに若かずと思ひ政友會を去りたるならんさて去りて後の政友會は伊藤公に代りて西園寺侯の舞臺となり藩閥以來の御附人は次第に遠かり黨勢擴張し十年隱忍の効現はれて次第に大を爲したるのみならず猿臂を貴族院迄延ばし談話會も出來て次第に發展しつゝあれば其形こそ違へ同君持論の政海縱斷の端緖が開けた譯てあるからして玆に再び政友會に復歸したのだと推せらる世間往々進歩黨を去り政友會に入り政友會を去り又進會に入り又々進會を去りて政友會に入りたるに依り志操鞏固ならぬ翻々たる人の如く批評する者が有るが僕から見れば尾崎君は所信に從ひ終始一貫して行動して居る立派の去就だと思ふ尾崎君は孰れかといへば實行の人といふよりは寧ろ理論の人である之を建築からいふと同君は木材の彈力重力等より割り出した圖案を書に巧なので材木が少々短かからうが長からふが其邊に頓着せず仕上げる事は原君に一籌を輸するかも知らん夫が双方の短所でまた長所である長所短所は一物の兩方面で觀察點、批評の標準の相違に依て分るゝのだ長所が短所で短所が長所だ此の以上に入て評するは名士に對するの道でないから御免(談話筆記)

△尾崎はどこがエライか

靜觀居主人

◎私は尾崎をよく知らぬ。随て纏まつた批評は出來ない。一體尾崎はどこがエライのか、それが私によく分らない。

◎私は、政治家としても、東京市長としても、尾崎といふ人を、ちつともエライと思つてゐない。見識や議論が人に勝れて居るといふ人もあるが、あの人にどういふ卓拔な議論や見識があつたか。又操守が堅實だとか、主義や理想で動くとかいふ人もあるが、私はあの人は、一身に都合がよいやうに動いたのだらうと見て居る。政治家などは大抵さうしたものだ。又潔廉だといふ人もある。それも私は可加減に手が汚れて居るのぢやないかと疑つて居る。

◎實際家としての彼の手腕は私はゼロと見て居る。市車市有などは彼の最も熱心な主張に相違ない。あの位大騷ぎをして、そしてあの結果はどうだ。重役がもつと高くなければ賣らぬといふから買はれないといつた調子だ。世の中は總て理屈一つで行くものでない。況して電車問題などになれば先づ第一に會社側によく渡りをつけて置かなくてはならぬ。殊に主もなる重役などの底意を探るによい丈け探つておかねばならぬのだ。そんな事が閑却されてゐてどうして實際の仕事が出來るか。

◎其點になると、桂などは流石に仕事師だ。世の中に聲言する前には、渡りをつくべき所には總て渡りをつけ行くべき道筋をちやんと開いておいて、それから聲言する。尾崎のは只理屈を述べておいて、出來なくなれば、出來なかつたといつて引下る。そんな風では少くとも今の日本に於ては仕事は出來ない。此間も、市參事會を市の諮問機關にせなければならぬといふ說を新聞に載せて居る。然し、あの位の地位に居るならば只新聞に說を述べること以外に、今少し實際上、何とか出來さうなものだ。困つたものだ。

◎面白い話が一つある。昨年政友會の紀念祭の日に田屋某が川上某に刺された。あの時に一番始めに弔禮に行つたのは尾崎であつた相だ。一體星の兒分は皆命知らずの手合ばかりで、市政には深い根を張つて居る。實際星の兒分に睨まれては何も仕事は出來まい。尾崎もその爲めには隨分迷惑もしてゐやう。然し迷惑する丈けそれ丈け機嫌氣褄も取らねばなるまい。さう思ふと、尾崎がいの一番に弔禮に驅けつけたのは面白いぢやないか。

◎今の妻君が來てから外國語もなか／＼達者になつたらうし、又先生元來なか／＼のハイカラだから大使にてもなつて外國へ行つたら、恐らく理想の大使だらう。

△尾崎市長

見山正賀

私は市役所の內記課に居りますから、最も尾崎市長に接する機會が多く、從て市役所に於ける尾崎市長については大抵の事は知つて居る積てすが、上司に關する事てすから、批評に涉るやうなお話は成るべく避けたいと思ひます。

市長は平常九時半頃から十時頃までの間に出勤せられて、四時頃には退出せられます。そして議會のある時とか又は何か特別の用務でも出た時でなければ大抵役所に居られる。晝の辨當は昨年の六月頃から必らずお宅から持つて來る。何時でも洋食です。

人に接することは極めて穩やかて、又殆んど上下の別を立てず、一樣に叮嚀に應待せられる、禮儀はなか〳〵堅く守られる。怒つて人を叱り付けるといふやうな事は先づ見た事がない。樣子には多少顯はれても言葉に出して怒つたといふやうな事はない。それ丈け私等は却て恐縮することが多い。

一體の事務の取扱方をいふと、小さな事は大抵助役に任せて、僅かに大綱を見るばかりてあるが、大きな事になると、なか〳〵細かな處までも調べ〳〵て、小さな數字までもよく頭に入れられる。其主任の人に厭くまでも聞き糺して、ドンナ細かしい事も手落なく呑込まれる。計算などにはなか〳〵明るい。又參事會などに出ての答辨は極めて要領を得る。或人は餘り要領を得過ぎると評した位てある。然し此頃は大變其方に馴れられた樣だ。

それから市長に使はれる人にとつて最も都合のよい事は、市長は決して媚び諂ふことに動かされない。其門に出入して御機嫌伺ひをするものがあつてもそれを重く用ふるといふやうな事は決してしない。只正直に働いて居りさへすればよい。詰り人を用ふること極めて公平な樣てある。

若し强て下の役人などの市長に不平な點はといへば、下の役人は、自分の調べた事を市長に持て行て大

いに得意に話す。その時に市長は冷淡に聞いて居らるゝといふ位のものだ。然しこれは市長からいへば、先にいつた通り、小さな事は大抵助役任せにしてあるから身を入れて聞かれぬのてあらう。先づ其位は不平の關の山て、他は吏員との折合は極めて圓滿てあると申して宜しいと思ふ。

△愕堂と政友會

黑頭巾

其一

●嘗て、一外人、吾が國民の端坐を評して、『日本人は、脛を以て敷物とする國民也』といへり。

●實に日本人の『膝より以下』は、起つにも坐するにも全身の負擔に任ずる部分ならずんばあらず。

●老ゐたるも、幼きも、男も女も、脛を以て敷物とせざるはあらず。

●百姓町人は板の間にも坐はる。堂々たる紳士は、虎皮を敷き、其上に更に絹蒲團を敷き、而して已が脛を敷きて以て端坐す。

●瘦せたる人は、左程にも無かるべし。吾輩の如き、近來漸く肥滿し、久しく端坐すれば、膝以下麻痺して急には起つこと能はず。

●此點に於て、吾輩は、梅ケ谷の脛に同情す、其の四十二貫の負擔に任ずるとき、脛の不平、言はずと雖も察するに餘あり。

●抑も梅ケ谷をして、久しきに亘りて端坐せしめなば彼の脛は全然麻痺して、卒然として大地震、大火事起るとも、彼は雪達磨の如く、轉々するばかりなるべし。

●彼の極めて肥滿せる政友會は、其の陣笠を敷物として以て端坐するものにあらずや。

●況んや、政友會は現に肥胖病に罹り、坐食しつゝあり。彼の體格にして、長らく端坐するならんには、痺して起つ能はざるべきは受合也。

●吾輩は、愕堂の入會を聞きて、政友會が、肩上迄に

△尾崎市長

見山正賀

私は市役所の内記課に居りますから、最も尾崎市長に接する機會が多く、從て市役所に於ける尾崎市長については大抵の事は知つて居る積てすが、上司に關する事てすから、批評に渉るやうなお話は成るべく避けたいと思ひます。

市長は平常九時半頃から十時頃までの間に出勤せられて、四時頃には退出せられます。そして議會のある時とか又は何か特別の用務ても出た時てなければ大抵役所に居られる。晝の辨當は昨年の六月頃から必らずお宅から持つて來る。何時ても洋食てす。

人に接することは極めて穩やかて、又殆んど上下の別を立てず、一樣に叮嚀に應待せられる、禮儀はなかなか堅く守られる。怒つて人を叱り付けるといふやうな事は先づ見た事がない。樣子には多少顯はれても言葉に出して怒つたといふやうな事はない。それ丈け私等は却て恐縮することが多い。

一體の事務の取扱方をいふと、小さな事は大抵助役に任せて、僅かに大綱を見るばかりてあるが、大きな事になると、なか〳〵細かな處までも調べ〳〵て、小さな數字までもよく頭に入れられる。其主任の人に厭くまても聞き糺して、ドンナ細かしい事も手落なく呑込まれる。計算などにはなか〳〵明るい。又參事會などに出ての答辨は極めて要領を得る。或人は餘り要領を得過ぎると評した位てある。然し此頃は大變其方に馴れられた樣だ。

それから市長に使はれる人にとつて最も都合のよい事は、市長は決して媚び諛ふことに動かされない。其門に出入して御機嫌伺ひをするものがあつてもそれを重く用ふるといふやうな事は決してしない。只正直に働いて居りさへすればよい。詰り人を用ふること極めて公平な樣てある。

若し强て下の役人などの市長に不平な點はといへば、下の役人は、自分の調べた事を市長に持て行て大

いに得意に話す。その時に市長は冷淡に聞いて居らるゝといふ位のものだ。然しこれは市長からいへば、先にいつた通り、小さな事は大抵助役任せにしてあるから身を入れて聞かれぬのであらう。先づ其位は不平の闘の山で、他は吏員との折合は極めて圓滿であると申して宜しいと思ふ。

△愕堂と政友會

黒頭巾

其一

●嘗て、一外人、吾が國民の端坐を評して、『日本人は、脛を以て敷物とする國民也』といへり。

●實に日本人の『膝より以下』は、起つにも坐するにも全身の負擔に任ずる部分ならずんばあらず。

●老ゐたるも、幼きも、男も女も、脛を以て敷物とせざるはあらず。

●百姓町人は板の間にも坐はる。堂々たる紳士は、虎皮を敷き、其上に更に絹蒲團を敷き、而して巳が脛を敷きて以て端坐す。

●痩せたる人は、左程にも無かるべし。吾輩の如き、近來漸く肥滿し、久しく端坐すれば、膝以下麻痺して急には起つこと能はず。

●此點に於て、吾輩は、梅ケ谷の脛に同情す、其の四十二貫の負擔に任ずるとき、脛の不平、言はずと雖も察するに餘あり。

●抑も梅ケ谷をして、久しきに亘りて端坐せしめなば彼の脛は全然麻痺して、卒然として大地震、大火事起るとも、彼は雪達磨の如く、轉々するばかりなるべし。

●彼の極めて肥滿せる政友會は、其の陣笠を敷物として以て端坐するものにあらずや。

●況んや、政友會は現に肥胖病に罹り、坐食しつゝあり。彼の體格にして、長らく端坐するならんには、痲痺して起つ能はざるべきは受合也。

●吾輩は、愕堂の入會を聞きて、政友會が、肩上に

一塊の肉を加へ得たるを想ふ也。

其二

●愕堂は政友會肩上の一塊肉といふと雖も、彼は尙ほ贅肉たるを失はず。

●愕堂が政友會の一塊肉たるは、突然、他より附加したる塊肉にして、身内より隆起したる力瘤にあらざれば也。

●或は、愕堂は塊肉と云はんよりか、寧ろ政友會肩上の一荷物たるやもまた未だ知る可らず。

●愕堂の入會は、政友會に、新たに、一塊の荷物を緊縛したるものならずんばあらざるべし。

●緊縛されたるが故に、縱令、荷物といふと雖も、本體と動靜を共にするに於ては、力瘤と異なること無かるべし。

●唯だ荷物たるが故に、體力の中心をして屢、動搖せしめ易きものあり。况して其の荷物の石塊たるに於ておや。

●梅ヶ谷の腹は、其の强味也。然れども、便々たるが故に、引かれて前に轉び易し。恰も、普通人の腹に石塊を縛りつけて角力ふが如し。

●鳩山や、戸水や、將た愕堂や、政友會に、益々肉塊の附加するは、梅ヶ谷の腹の愈突出するにも似たる哉。

●腹の愈突出するだけ、肉塊の附加するだけ、則ち縛りつくる石塊の益々大なるを致す所以ならずんばあらず。

●鳩山、戸水、愕堂の入會は、政友會の大を加ふ。其の强味を加へず。

其三

●梅ヶ谷の腹は、吾輩の腹に石塊を縛り付けたるに似たりといふとも、彼は起つて活働す。

●吾輩は謂ふ、政友會は坐して、其の身邊に、益々石塊を緊縛するものならずんばあらず。

●石塊の加はる每に、愈々其の脛は痲痺しつゝ、充分に石塊を緊縛し畢る頃には、漠然として、居据はるの外、何等の動作をも爲すこと能はざるべし。

●古へ、「立往生」の例あるを聞く。未來の政友會は、

「坐往生」するあらんことを、吾輩は恐るゝ者也。

其五

●政友會の身邊に緊縛しつゝある石塊は、磁石ならずんばあらざるべし。

●政友會は、磁石の大塊を緊縛しつゝ、怖るべき發電機に接近しつゝあり。是れ、政友會の現情也。

●吾輩は敢て謂ふ、政友會は、現に、一大危機に瀕しつゝある也。

其六

●公伊藤薨後の政友會に投ずる將星は、公が如き無上の御信任を得たる大政治家の勢力に因緣せんとにはあらず。

●彼等は、議會に過半數を制する政友會の頭數を利用せんが爲に入會するものにあらずや。

●陣笠は字で書けば頭數也。然れども、黨の本體より見れば、却て膝以下の脛也。則ち敷物に代用せらるゝ部分ならずんばあらず。

●上に加はる量の增す毎に、下に敷かるる數の痲痺は愈際限無かるべし。

●此の如くにして、政友會の上半部は、或は「三面六臂」の如く、或は「千手觀音」の如く、種々樣々の計畫を有するに係らず、其の下半體は、大佛の腰以下の如く、或は海月の裾の如く、徒らに、上半部を崇嚴ならしめんが爲の踏臺に非ずんば、乃ちグニャ〳〵として意味なく漂ふものたるに過ぎざるべし。

其七

●衆議院に多數を制するは、政友會の誇りとす可らず。寧ろ其の憂とするに足る。

●若し月の滿ちて光らざることありとせば、其は政友會の運命を現示するものなるべし。

●政友會は、多數ならざる可らず、其の勢力は頭數に因る。而して其の多數なるは、政友會の光らざる所以ならずんばあらず。

其八

●戸水寛人、七博士の巨擘を以て自ら許す。曩さに侯桂を訪ひ、大に國事を論ず。以て其の用ふ可きを示す。

●侯桂の聰明なる、一見、敵の肺腑を察す。艶笑美目。以て博士を揶揄して曰く、當局知名の政治家概ね老朽國家の前途頗る心に關す。新見に富む卿の如き、深く自重努力せよ。

●肥ゑて短かき二政客は、一場の中、肝膽忽ち相照らす。手を握らずと雖も、目悉く輝く。

●其後、幾も無く、博士、大學を辭して政友會に入る彼は、鞭を投じて、麒麟閣を夢みつゝあり。

●鳩山、尾崎の入會、共に世人の眞相を知悉するところまた吾輩の辯を俟たず。

其九

●吾輩は、愕堂に依て伯大隈を吊す。若し、當年、伯大隈一臂の力を假して、愕堂の窮を救はしめば、彼は、伯を捨てざりし也。

●則ち愕堂は、演壇政治家として、長く進歩黨の軍容を飾る可かりし也。

●愕堂一たび市長たるの後ち、また彼の如き、稚氣覇氣を帶ぶる演壇政治家の雄者あるを見ず。議會史の一遺憾事也。

●彼が、政友會に入て、他年の計を爲すに至つては、彼の世才頗る進むを見る。また當年の愕堂にあらず。

其十

●鳩山、戸水、尾崎の如き、大臣志願者にして、政友會に入る者、年を亘りて其志を成さゞるときは、彼等の立場は如何ならん。

●若し新附の將星を以て續々入閣せしむるの日あらば、政友會の家の子郎黨は果して無事なるを得可きや。

其十一

●侯桂は、政權を陽とし金權を陰とする、政友會の前に横たはれる大發電機也。

●鳩山、戸水、愕堂を始め數多續々新附の石塊は、容易に彼の陰陽電氣に感應する磁石塊ならずんばあらず。

●是の如き磁石塊を、身邊に數多緊縛せる政友會は、此の怖るべき大發電機に接觸して、能く自働の態度に出づるを得可きや。

●此の如き磁石塊の多ければ多きほど、政友會は益大きくして益弱くなるべし。愕堂の入會を聞きて、吾輩特に此感を深くす。

●政友會に續々、磁石塊の添付せらるゝは、或は侯桂の竊かに喜ぶところなるやも、未だ知る可らさる也。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

與謝野晶子 江南文三 合著
岡野榮 畫

本は買はないでもいいかい

[illegible]

ウ廣告文と本のデヂケイトだ

花

けを是非見て貰いたい。文三記

新刊
着色繪書數葉挿入美製本
優美價金六拾錢郵稅六錢

鼻の文三が赤ン坊の時分から一生懸命で白い息を吐き乍ら北極の氷をぶち割ッたり日のかんかん照る赤道の上で足のうらを燒きながら櫻樹の根を堀ッて見たり地中海であぶを食らッたり地獄へ極楽へ行ッてアポロやお釋迦やエホバのつらを穴のあくほど見てやッたりしてやッとこさて集めた花に關する南北歐東西洋のあらゆる洒麗惡口傳說神話俚諺花の表はす意味なんてもござれと知ッてるだけ投りだした亂雜の宮殿はこの本である。四方の壁書と廣間の額とは岡野榮氏が畫いた。その宮の中を晶子女史の歌の少女が水色の單衣に珊瑚の冠をして素足で通る。つまらない從來の花の本と同一と思ふ者は本屋でひやかして見るがいい。ひやかしはただだよ。本屋の番頭がまづいつらをしたら落者がさう言ッて廣告してたと威張るがいい。（文三記）

發賣所
東京神田錦町一の九 振替東京三四〇九番
二松堂書店
東京日本橋區數寄屋町 振替東京二三七一
六合館書店

實費發賣
分類
圖書總目錄
◎此總目錄は部下數百の各書店にて既往數十年間に發刊せる有益なる圖書を漏れなく類別網羅せる大冊なり

▲讀書界唯一の燈臺なり
▲圖書撰擇は讀書家の最大要件なり
▲極めて低廉に圖書を供給する割引法を掲載せり
▲僅かに廿八錢を惜みて讀書の撰擇を誤り賜ふな

◎弊店曩に讀書家の爲め分類圖書目錄を發刊せり業務擴張の爲め特に五萬部限り實費半額金貳拾八錢送料共一般好讀者の需に應ず◎全國數百萬の好書家に對し五萬部は甚だ少數なり豫定以上は定價に復すべし御希望の方は至急御申込あれ

東京日本橋通本石町二丁目
書籍雜誌大賣捌所 **大光堂書店** 振替口座東京二〇二九五番

實費發賣
分類
圖書總目錄
定價七拾錢
◎此總目錄は部下數百の各書店にて既往數十年間に發刊せる有益なる圖書を漏れなく類別網羅せる大冊なり

▲讀書界唯一の燈臺なり
は定價に復す御希望の方は至急御申込あれ
▲圖書撰擇は讀書家の最大要件なり
▲極めて低廉に圖書を供給する割引法を掲載せり
▲僅かに四十錢を惜みて讀書の撰擇を誤り賜ふな

◎弊店曩に讀書家の爲め分類圖書總目錄二萬部を提供せしに忽ち豫定部數を超過し其後の申込は一々謝絶せしも今回更に五萬部を印刷し送料を負擔し實費金四拾錢を以て貴需に應ず全國數百万の好書家に對し五萬部は甚だ少數なり豫定以上

東京市神田區表神保町三
書籍雜誌取次販賣 **文洋堂書店** 振替口座東京一三九六八番

（中付の一）

信用なき商品及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

辯論雑誌の急先鋒出づ

雄辯

大日本雄辯會編纂
每月一回一日發行

定價
一冊 金貳拾錢 郵稅壹錢
六冊前金壹圓拾錢（郵稅共）
十二冊前金 貳圓（郵稅共）

現下辯論の盆々熾ならむとするに際し、此機運を善導し以て青年學生及び一般國民の修養に資せむことを期して本誌世に出でたり

本誌は東京帝國大學辯論部を初め、各官私立學校の辯論部が互に相聯絡して、其精粹を摘集し、更に錦上花を添ふるに朝野名士の高論卓說を以てせり其論議する所は、政治・法律・經濟・文學・宗教・教育・哲學等より、弘く諸般の時事問題に涉り尤も着實なる研究の發表にあり。苟も世論の指南たり、修養資料たる讀物を要求する青年諸君、及び現代の時勢に通ぜんとするの士よ希くは本誌の愛讀者たれ。

第壹號 二月一日

▲口繪二枚（緑會討論部發會式、伊藤公追悼演說會）▲發刊の辭▲薄志弱行論 法學博士梅謙次郎▲吾人の意氣 法學博士松波仁一郎▲日本の對外交關係 法學博士仁井田益太郎▲青年の修養談 加藤咄堂▲殺人の哲學的說明 文學士堀田相爾▲雄辯に關する吾人の感想 法學士青木得三▲演說管見 法學士前田多門▲演壇所感 法科大學遠江治之助▲國語と辯論 文科大學助手榮田猛猪▲雄辯我觀 河岡潮眞▲雄辯の說 法科大學眞船民伊▲雄辯に就て 慶應義塾向軍治▲辯論の修練 海老名彈正▲雄辯の必要條件 島田三郎▲雄辯變化の趨勢 文學博士三宅雄次郎▲聖なる生涯 學習院服部純雄▲Dinius Simplicity 法科大學沼田照義▲演說家としての學生の態度 法科大學大井靜雄▲立憲的武士道 日本大學大宮司善工門▲ポーツマス條約の記憶 法科大學鶴見祐輔▲青年と政治 明治大學根岸耕一▲法科大學辯論部設立の趣旨 法科大學寺田四郎▲立憲的態度 早稻田大學宮澤胤男▲新民 法科大學守屋榮夫▲一日の花 一高森戸辰男▲早稻田雄辯會立聽き 巴峽生▲佛國グルノーブル大學より 法學士杉村陽太郎▲ひげの研究 法科大學寺田四郎▲學生辯士逸話▲早大聯合演說會其他

發行所 東京市京橋區銀座壹丁目（東京二一九番）（振替貯金口座）

大日本圖書株式會社

大阪市東區北久太郎町 支社

▲帝國文學 每月一日發行

▲丁酉倫理會講演集 每月十日發行

▲教育研究 每月一日發行

（中付の二）

博士

十年間苦心の大著

法學博士　天野爲之先生新著

經濟策論

博士は學問の該博、常識の圓熟、文章の明快を以て我國經濟學者間の元勳泰斗也、本書は博士が過去十年間を通じ時事に接觸して直に平素の主張を披瀝したるもの、其堂々たる識見と犀利なる筆鋒とを以て縱横論策せる經濟政策及經濟評論は實に現代の最良指南車にして經濟學研究者唯一の好參考書たるのみならず萬人の經濟知識の一大活泉也

大版上製金文字入
紙數一千餘頁（函入）

正價貳圓五拾錢

郵稅小包料拾八錢

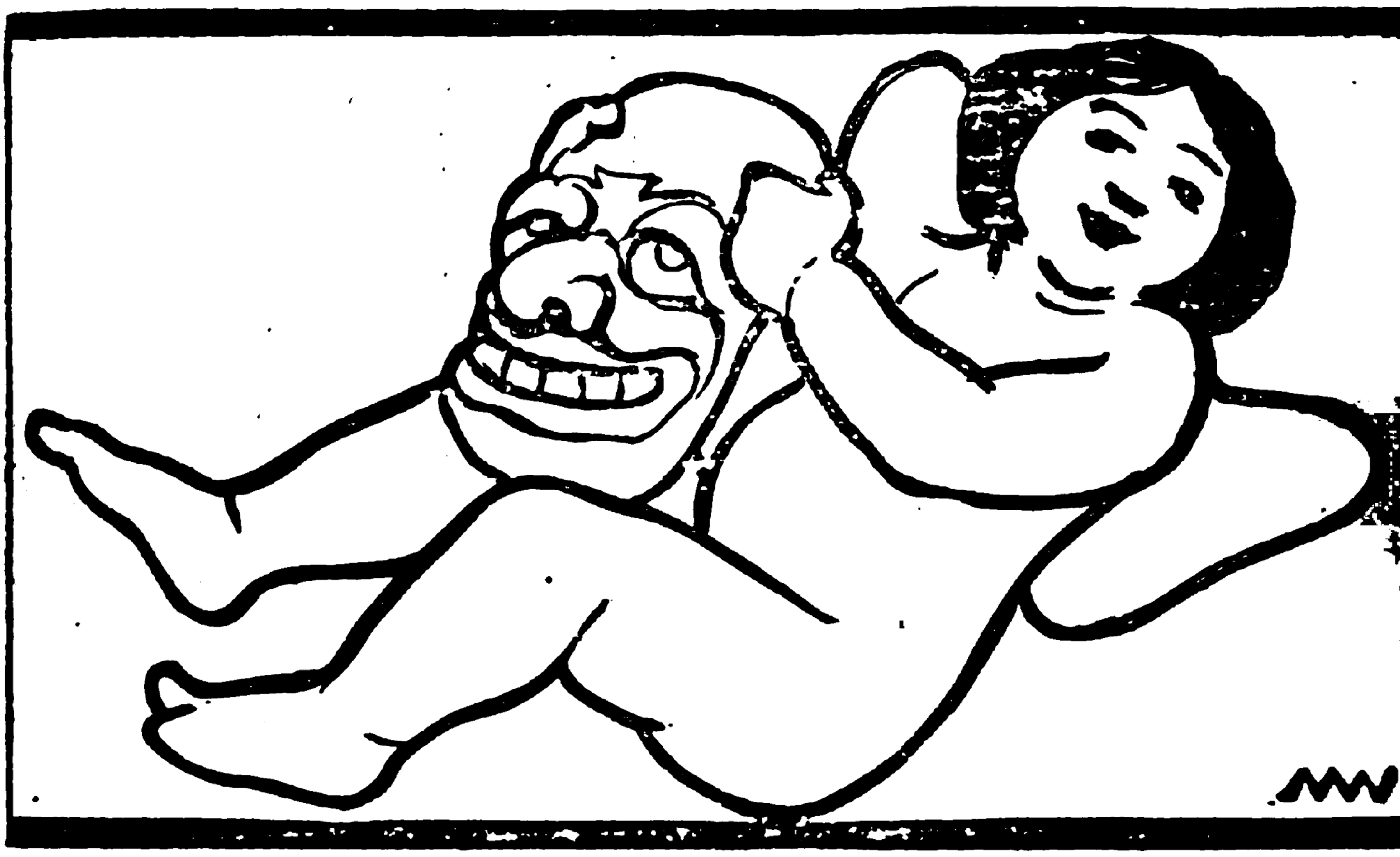
内容

租税、公債、外交、貿易、貨幣、銀行、取引所、社會教育等經濟財政に關する問題數百篇

東京京橋南紺屋町十二番地

實業之日本社

郵便振替貯金口座三二六番



二人づれ

田山花袋

社の傍て子供等のたゝいて居る太鼓の音は遠くから聞えた。田舍の道を晴衣を着た娘や子供が行つたり來たりする。天神の祭は舊曆の正月の野を賑かにした。

二人は内に居ても退屈だと言ふので、町から出懸けて來た。一人は背が高く、黒味かゝつた縞セルのインバネスを着て居た。一人は小づくりで、型の古い二重廻を引摺るやうにして、前のめりに鼠色の中折帽をかぶつて居た。

町から二人が來る間に、葉の厚ぼつたい常盤木の垣があつたり、機を織る音のする低い茅葺屋根があつたり、石橋の際

つた水の少い小川があつたりした。

『何うせ、田舍のお祭だから、大したことはないけれど……』

二重廻を着た方が言つた。

こればかりではなかつた。今迄にも何もない田舍の申譯をかれは幾度もした。食ふものがない、見るものがない、話相手がない『折角、來て貰つても構ひやうがないんだから仕方がない……。まア、樂にして貰ふさ、呑氣にでもして貰はなくつては、來て貰つた甲斐がないからねえ』かう言つて、かれは都から來た友を引留めた。

『かなりあるねえ』

インバネスは歩きながら退屈さうに言つた。十町の道も都の人には餘り近く思はれなかつた。口にした卷煙草が殘り少くなると、かれは袂から新しいのを一本出して、それに火を移しながら歩いた。路傍に捨てた卷煙草からは、細い烟が眞直に立つた。

春のやうな日であつた。此處等に名物の西風も今日は梢を動かさなかつた。なづ菜、芹、嫁菜などが田の畔に青々と見える。ひろ〳〵とした野は目の前に續いた。榛の細い幹の並んだ間からは新しく葺いた向ふの村の藁葺屋根が一二軒見えた。

淡竹の籔では鶯の聲がした。

二旒の旗と花崗石の華表と兩側の低い松並木とは遠くから見えた。子供の太皷の音が絶えず其處から

聞える。參詣に來るものは多くは女子供で、思つたほど賑かでないのが段々知れた。それに、天神の社に入つて行く路は霜解けがして、縫ふやうにして拾つて歩いて行つても、インバネスの男の高價な疊表の駒下駄は汚れた。

『ひどい路だねえ』

と言ひながら歩いた。

來る時、二重廻の男が、『運が好けりやカントリー、ラスの美しいのに邂逅すことがないとも限らないからねえ』と笑つて言つたのを、インバネスは華表の前に來た時思ひ出して、『これぢや餘り運も好ささうぢやないねえ』と笑つて言つた。

『今少し遲くならなけりや、人が出ないと見える。飯野の天神樣ツて、これでも此處等では、賑かなので有名なんですがなア』かう言つて相手の顏を見て、『何年にも來たことがないからねえ。幼さい頃はよく來たものだが……』

と都の男は言つた。

『矢張田舍だねえ』

華表の中に、一軒百性家があつた。藁が入口に一杯積んであつた。破れた大和障子が一枚明けてあつて、低い軒の中に煤けた自在竹の吊された圍爐裏が見える。手拭を被つた目腐れの婆さんが其處から出て來た。

路の畔に筒袖を着た男が一山一錢の小さい蜜柑を並べて水洟をすゝつて居た。鹽煎餠を賣る婆さんの舖は其隣にある。其處からが天神の社の境内て、低い塢を廻した錆び果てた池は、それでも昔の瓢箪の形を留めて居た。成程、此處等にはめづらしい梅の老木が其處にも此處にも苔を見せて、中にはもう半分ほど花の咲きかけて居るのもあつた。

ひろい碧い空に透かして、星のやうに見られるのもあつた。

社の前の舖石道は、それでも人がぞろぞろと通つた。物を賣る露肆もかなりにある。飴屋、玩具屋、何でも一錢、これ等は皆な此の近在の物日を廻つて商賣をして歩く手合てある。䬸の子燒屋の周圍には、子供が五六人も取巻いて、饂飩粉の解いたのを匙で汚らしく垂らして居た。しん粉細工の男は鷄をこしらへて居た。

鈴を鳴らす音が絶えずした。

鈴に下げられた淘ひ交ぜの紅白の紐は新らしかつた。――ふと、インバネスの男はあるものを見て足を停めた。髮をふつくり出した結ひ立の銀杏返と柔かい曲線を描いた色の白い長い襟とは、尠くともかうした野中の社には珍らしかつた。

これも矢張二人づれてあつた。一人は二十七八位に見える中年増て、大柄の銘仙か何かの半纏を着て居た。一人はやつと二十になるかならぬ年恰好て、派手なお納戸色の羽織を着て、縮珍の細い鼻緒のすがつた吾妻下駄を穿いて居た。足袋の白いのが四邊に際立つて見えた。其時丁度年の若い方が紅白の紐

と振つて鈴を鳴して、賽錢を上げて、手を合せて、しばし祈願を凝して居たが、それが濟むと、やがて傍に立つて居る年増の女と並んで、此方を向いて歩いて來た。色の白い、丸顔の、ほつてりした可愛い**顔が男の眼に映つた。**

二重廻しの男は此時初めてその二人づれを見た。

この二人づれが四邊に珍らしいばかりてはなかつた。野の中の社には珍らしかつた。女共も其處にゐる二人づれを見て取つた。縞セルのインバネスも鼠色の中折帽も矢張この田舍の娘達がぞろ〳〵と鋪石道を通つた。

インバネスの眼は絶えず女づれの方に向いた。時には年増の眼と逢つたり、年若の方の眼に出逢つたりした。何者？　たゞ者てはないといふやうな疑ひも出た。退屈な田舍といふことも暫し忘れた。しかし二人はそれに就いては何も言はなかつた。二人はお參をすませて、社の後の方に廻つて見た。其處にある碑の前に立つて、碑の文を讀んで見たりした。其碑文は百年ばかり前に、江戸て聞えた儒者の書いたもので、其儒者は此町に弟子があつたので、度々江戸から遣つて來て、今日でも其の書いたものが隨分彼方此方に殘つて居るなどといふ話を二重廻しの男はして聞かせた。二人がぐるりと一廻して、元の鋪石道の處に來た時は、女づれは塲の處に立留つて、梅の咲いたのを見て居た。

年の若い方は成だけ其顔が此方に見えるやうにして居る。時には笑つて見せたり、わざわざ相手の女に話しかけて見せたりして居た。しかし二人はまだそれに就いて何も言はなかつた。

『成ほど此處の梅は盛りになつたら、かなり見事だらうね』

其梅の塢の傍を通る時、インバネスの男は二重廻しに言つた。

『これで昔は隨分遠くから見に來るものもあつたんださうですよ。今ぢや、もうこんなになつて、駄目ですがね』

二重廻しはこんなことを言つた。

かう言つてゐる間にも二人の眼は前に緩々歩いて行く女づれを離れなかつた。筒袖の蜜柑賣の前に立つて、年增が一山一錢の蜜柑を買つて居る間、年の若い方は、すらりとした後姿を見せて立つて待つて居た。其間にも、一二度振返つて、其の白い顏を此方に見せた。

何も言はないが、二人の步調は女づれの後について行くことに於て一致した。女づれは蜜柑を買つてから、少し步調を早くした。何か囁き合つて笑ひながら步いて行く。華表から大通に出て行くかと思つて居ると、さうはせずに、田畝道を眞直にずん／＼行く。

『彼方(あつち)からも町へ歸れると見えるね』

『さうだねえ、歸れると見えるね。先生方も町に歸るんだらうから』

二人はかう言ひ合つた。

華表の處に來た時、

『僕等も此方から行つて見やうぢやないか。……同じ道を歸るのも詰らない』

インバネスの男はかう言つた。

二重廻しの男も同意した。

暫く默つて歩いた。

ふと、インバネスが、

「君、あれャ唯者ぢャないね」

「僕もさう思つて居る」

「町には藝者は居るのかえ?」

「それャ居るさ」

「澤山居るのかえ?」

「五人居るとか言つた」と、少し考へるやうにして、「けども、皆な汚い奴ばかりだッて聞いて居たかなア。それに、あの位の年格好のが居るとは聞かなかつた。」

「鳥渡好いねえ」

「さうだねえ」

と二重廻しは笑つて見せた。

二人は暫し藝者の話をしながら歩いた。料理屋の内藝妓が二人、自分て家を持つて居るのが三人、それが停車場前の曖昧屋までも出かけて行くといふ話などを二重廻しの男はしてきかせた。しかしかれは

今までさうした種類の女には餘り近づいたことはなかつた。

先に行く二人づれとの距離は段々近くなつた。男の足は何うしても早かつた。それに田圃の路は思つたより惡い。乾いて居るところもあれば泥濘になつて居るところもある。男づれも困つたが、女づれはそれよりも一層困つたらしかつた。それに、女づれは男づれに追つかれまいとするやうに、路の好い處に行くと、サッサと歩調を早めて急いだ。振返つて見るやうなことはもうしなかつた。て、暫くの間、晴れた午後の日影の野道に十間ほど間を置いて、二組の二人づれが惡い路になやみながら歩いて行くのが浮き出すやうに見えた。

やがて路は二つに岐れた。

女づれは野を左に行つた。「あつちからでも行けるかしら」インバネスは又かう言つて其方を見たが、しかしかれ等は路の乾いた右の方を取つた。少し行つて振返つた時には、後から跟いて行つた年若の方の姿が其處にある一軒家の陰に隱れやうとする處であつた。

「何うしても藝者だね、あれは――」

かうインバネスの男が言つた。其處には淡竹の籔があつて、午後の日影が明るくさし通つて居た。

鳥渡買物に行つて來ると言つて出かけたまゝ夕飯の時刻になつてもインバネスの男は歸らなかつた。何うしたのかと思つて居ると、町の料理店から使者が手紙を持つて來た。

すぐ來いとある。

料理屋は旅館屋を兼ねて居た。丁度半鐘臺の立つた町の四辻の處にあつた。御料理——藤屋と大和障子に書いてあるのが通を行く人の眼につくやうな位置にある。横町に大きな門があるが、それは懇親會でもあるとか、縣廳の高等官でも來る時でなければ、滅多に明けたことはなかつた。二重廻しの男が使者を受けてその前の入口に入つて行つた時は、店の吊洋燈がもうそろそろ光を放ち始めてゐた。上さんはかねて見知越しの上町の地主の若旦那を丁寧に挨拶して迎へた。四五年前此の若旦那に近所の富豪から嫁さんが來て、今は子供が二人あるといふことや、嫁さんが何方かと言へば不器量で亭主を尻に布くといふことや、若旦那は學問が出來て、茶屋酒などは滅多に飲んだことのない堅人だといふことなどを上さんは兼ねて聞いて知つて居た。

東京の客は、奥の六疊の酒の汚點だらけの室に、薄暗い釣洋燈を眺めてほつねんとして居た。酒も藝者もまだ來なかつた。

『ヤア』と入つて來た男の顏を見て、『土地不案内なもんだから、えらい處に押込まれて了つた』

相手が火鉢の傍に座るのを待つて、

『君は迷惑でも一晩御つき合をして貰ふさ。田舍で退屈だからねえ。……それに、あゝいふ女が此處に居やうとは思はなかつた』

『もうさう言つて遣つたのか、早いねえ……』と笑つて、『そして、解つたかね?』

『ちやんと解つたさ、梅代と言ふんだつて、まだ東京から來て、弘めをして、幾日も經たないんださ』

『さうか、道理て、そんな女が居る筈はないと思つた』

其處に筒袖の皹の切れた女中が膳を運んで來た。角火鉢も今一つ持つて來て茶湯臺の傍に置いた。

東京の男には、かうした田舍の料理屋の一間がいかにも面白さうに見えた。後には簞笥があるのを張交せの屏風で圍つて見えぬやうにしてある。案内された時、其處に蒲團や衣裳が散ばつて居た。女中が慌てゝ片附けて居たのを、此家の娘らしい十一二の女の兒が立つて見て居た。『今日、天神さんにお參りに行つた藝者の若い方だッて言へば解るんだよ』と言つて聞かせても、田舍の女中には容易に飲込めなかつた。『だッて、本當に藝者だか何うだかねえ‥‥呼んで置いて、さうてなかつたら困るだ』などゝ言つた。仙臺鮪の赤いのに蛸の酢の物、吸物には鶏卵が落してあつた。筒袖の女中は膳を並べて置いて、熱くついた德利の口の處を無作法に持つて、客の猪口に一杯づゝついだ。地酒の惡い臭がした。

東京の客は、一杯飲んで、

『先生、旨い獲物を取つかまいたもんさなア。インバネスに二重廻しが天神樣てつかまるなぞは面白いねえ』

こんなことを言つて笑つた。

廊下に足音がしたと思ふと、其處に、その中年增が『今晩は』と聲を先に立てゝ入つて來た。後から年の若い方が續いた。

室に入ると、いきなり、

『まア、厭だよ、皆さん』

と年増は言つた。

『厭だもないもんだ、先程はぐんぐん急いて行つたぢやないか』

客がかう言ふと、

『だッて、ねえ、梅ちやん』と、これも矢張入り懸けて躊躇して居る年の若い方を見て笑つた。て、其儘、二人は茶湯臺の向ふ側に並んで座つたが、年増はわざと眞面目らしく、『先程は失禮』

『先程は道が惡う御座んしたねえ……』

『四人てこね返しましたわねえ』

『四人？　四人ぢやないよ。君と僕とぢやないか』

『君と僕とは鷄卵の仲よ……ぢやないか、オヤ失禮！』

と言つて、年増は銚子を取つた。

客は酒をつがせながら、

『串戯てなしに、本當に路が惡るかつたねえ。……僕は折角買立ての駒下駄を臺なしにして了つた。』

『それは御愁傷さま！』

『一體、君達が惡いんだよ。あんな田圃道なんぞを行くから』かう言つたが、ヤ、眞面目な調子になつ

「ちやんと解つたさ、梅代と言ふんだつて、まだ東京から來て、幾日も經たないんだとさ」

「さうか、道理て、そんな女が居る筈はないと思つた」

其處に筒袖の皹の切れた女中が膳を運んて來た。角火鉢を今一つ持つて來て茶湯臺の傍に置いた。

東京の男には、かうした田舍の料理屋の一間がいかにも面白さうに見えた。後には簞笥があるのを張交せの屛風て圍つて見えぬやうにしてある。案内された時、其處に蒲團や衣裳が散ばつて居た。女中が慌てゝ片附けて居たのを、此家の娘らしい十一二の女の兒が立つて見て居た。『今日、天神さんにお參りに行つた藝者の若い方だッて言へば解るんだよ」と言つて聞かせても、田舍の女中には容易に飲込めなかつた。『だッて、本當に藝者だか何うだかねえ……呼んて置いて、さうてなかつたら困るだ」などゝ言つた。仙臺鮪の赤いのに蛸の酢の物、吸物には鷄卵が落してあつた。筒袖の女中は膳を並べて置いて、熱くついた德利の口の處を無作法に持つて、客の猪口に一杯づゝついだ。地酒の惡い臭がした。

東京の客は、一杯飲んて、

「先生、旨い獲物を取つかまいたもんさなア。インバネスに二重廻しが天神樣てつかまるなぞは面白いねえ」

こんなことを言つて笑つた。

廊下に足音がしたと思ふと、其處に、その中年增が「今晩は」と聲を先に立てゝ入つて來た。後から年の若い方が續いた。

室に入ると、いきなり、

「まア、厭だよ、皆さん」

と年増は言つた。

「厭だもないもんだ、先程はぐんぐん急いて行つたぢやないか」

客がかう言ふと、

「だッて、ねえ、梅ちやん」と、これも矢張入り懸けて躊躇して居る年の若い方を見て笑つた。

て、其儘、二人は茶湯臺の向ふ側に並んで座つたが、年増はわざと眞面目らしく、『先程は失禮』

「先程は道が惡う御座んしたねえ……」

「四人てこね返しましたわねえ」

「四人(よつたり)？　四人ぢやないよ。君と僕とぢやないか」

「君と僕とは鷄卵(たまご)の仲(なか)よ……ぢやないか、オヤ失禮！」

と言つて、年増は銚子を取つた。

客は酒をつがせながら、

「串戯てなしに、本當に路が惡るかつたねえ。……僕は折角買立ての駒下駄を臺なしにして了つた。」

「それは御愁傷さま！」

「一體、君達が惡いんだよ。あんな田圃道なんぞを行くから」かう言つたが、ヤ、眞面目な調子になつ

て、『あゝ行つても町に來られるのかえ？』

『え、來られるわ』

『近路？』

『近路ぢやないけど、……私達、一寸其處に寄る家があつたもんだから。私達が彼處で蜜柑を買つてせう。あれを持つて行つて遣つたのよ、其家の子供に……。あれから、まだ、路が惡るかつたわね
え、梅ちやん。』

『え、え、私も下駄をよごしたわ』

と年の若い方が何の氣なしに言ふと、

『よいしよ、下駄のよごしつこ！梅ちやん、宜しく御賴み申しますよ』と年增は囃し立てた。

客は笑つて梅代の方を見た。

『梅代さんッて仰るんですッてね。……一つ上げませう』と盃をさして、『東京だッてねえ？まだお弘をしたばかりですッてねえ。別嬪さんだ、田舍には惜しい』

『知らないわ』

と梅代はツンと濟した。

わざと今一人の客の方を向てい、『貴郞お酌？』

默つてつがせて、一杯飲んで、笑ひながら梅代に差すと、『お重ねなさいよ、……私、本當にお酒が

飲めないのよ。」

と眉を寄めて小聲でいふ。

三味線が來て、やがてお座付が始まる。梅代の聲は冴えて美しかつた。土地の客は默つて其方を見て居た。

お座付が濟むと、今度は、「お發しなさいよ」とか、「心意氣をうかゞひませうか」とか言つて、藝妓は三味線を鳴した。東京の客も餘り唄はなかつた。都々逸を二つ三つ、二上新内を一つ輕く唄つた。節も三味線に合はず、三味線も節に合はなかつた。年増藝妓はサノサや喇叭節を騷々しく唄つた。一騷ぎしてから、話がまた始つた。町の話や東京の話が出る。明日、二里ほどある町に宴會があつて、車で行く話などを年増藝妓はした。梅代は東京ではつい此間まで富士見町に居た。『田舍は本當にさびしいわねえ。夜など、寢つかれないで居ると、東京がこひしくなつて、居ても立つても居られないやうな氣がするわ。』こんなことも言つた。

「なァに、今に好い旦那でも出來ると、東京になど歸りたくなくなるさ」

と東京の客は言つた。

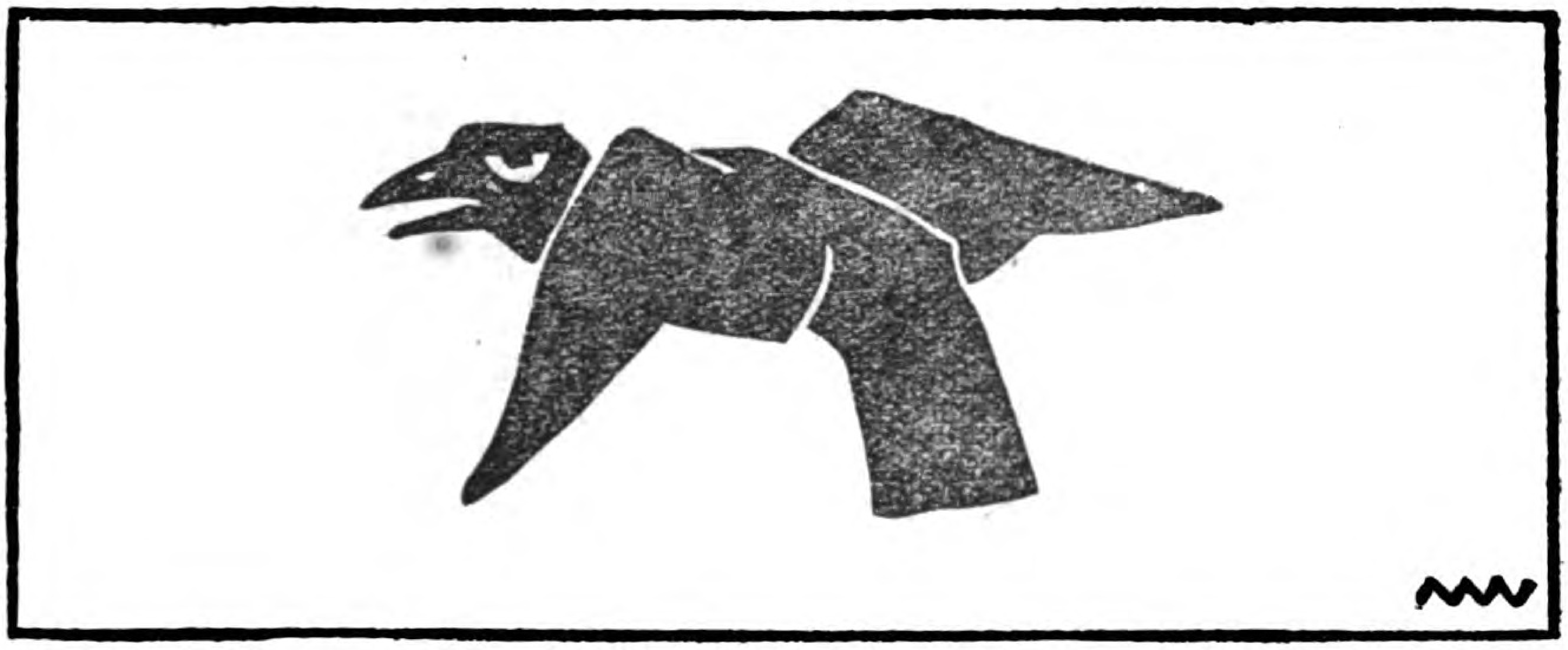
地主の若旦那が便所に立つた間に、年増藝妓は訊いた。

「貴方、昔からあの諸橋さんお存じ？」

「昔から知つてるとも、學校友達だもの」

『學校つて、東京の』
『さうさ』
『町でも名高い財産家よ』
今度は梅代に言つた。
『さうなの?、御商賣は?』
『地主さんよ。田地が餘程あるんでせう。』
『騙しちやいかんよ』
かう言つた客はもうかなりに醉つてゐた。
『堅い方ですもの』と年增は笑つて、『騙したいだつて騙しやうがありやしないから大丈夫!』
かう言つたが、『梅ちやん、一つ騷ぎませうねえ』
て、二挺の三味線は自暴に鳴つた。サノサが出たり、大洗節が出たり、喇叭節が出たりした。黄い金切聲と冴えた聲とが一しきり一間に充ち渡つて聞えた。
時間の經つにつれて、客の醉は段々廻つて來た。
『君、しつかりしなくつてはいかんぜ、梅ちやんが此町に來たからには、君を手に入れずには置かないつて……名折れだからつて、腕によりをかけて居るんださうだから、本當にしつかりしたまへよ』
こんなことを言つて、友の肩に手を懸けたり何かするやうになつた。勘定をすまして歸り懸けた時に

は、もう意氣地なく蹣跚と女の肩や友の肩に凭れ懸つた。インバネスを年增に着せて貰つて、『しつかりなさいよ』と幾度も言はれて、室から廊下に出て來たが、ふと其處に梅代が色白の顏を闇に浮き出すやうに見せて立つて居るのを見て、『梅ちやん、左樣なら、……お蔭で今日は面白かつた。僕は、僕は一週間此處に遊びに來て居るがね、今日のやうな面白いことはなかつた。これも梅ちやんのお蔭だ。田舍はねえ、君、食ふ物は拙いし、見るものはないし、人間はぐつたし、我々東京の空氣を吸つて居るものにや、退屈で、馬鹿氣て居て居られやしない。田舍に居ると、人間は皆な腐つて了ふよ。……梅ちやん、こら、默つてゐるね、此先生を、此の財產家を、』と前に行く友の二重廻を引張つて、『さうだ、この財產家を手に入れなけれや手腕(うで)がないねえ。それに第一、今日の天神さまが生きて來ない。天神さまの獲物を本當にして了はなくつちや小說にはならない。乾度だね、乾度だね』と梅代の肩に又凭りかゝつて、『よし、乾度だな、乾度手に入れて見せるね、提燈を疊むやうにして見せなくつちや駄目だぜ。よし、誓つたね、梅ちやん、握手(シエクハンド)!』



お波

水野仙子

一

捨吉は今朝起きぬけに伊助を連れて山へ行つた。擔いだ鍬の先に緒の切れた下駄をぶらさげて、裸足に長裾の伊助を先に、片手には粘土や芝生を入れたバケツ、片つ方には桐の葉て根を包んだ小松などを下げて氣忙しさうに歸つて來た。

「あゝ腹がへつた〳〵おつ母さ！」と伊助は足も洗はずに騷ぎたてる。

朝の光りに馴れた目は、三方壁の檐のひくい家に入つて、一寸まごついた。佛壇の暗さに、濕めすのを忘れた豆ランプが、ぽつちりと赤くなつて居る。二隅だけ外した色の褪めた蚊帳の中から、今起きだしたお鶴が、腹掛一つてひよろ〳〵しながら鼻を鳴らして居る。それに着物を着

せようと、逃げるのを追ひかけてお糸は喚く。赤んぼは腹ん這ひになつて、兩手でそこらのものを掻き散らしながら、枯れた泣きようをして人を呼んで居る。

「ちよッ」と思はず舌打ちが出た。

「いつまで何愚圖々々してやがるんだ！」と怒鳴らうとした、がふとやめた。

「どうしたんだ？」

お波はそこに、足許に箒を投げ出したまゝ、鼻を兩手で抑へて立つて居る。

「鼻血が……」

捨吉はそのまゝ默つて顏洗ひに井戸端へ行つた。

背戸の井戸をはさんで並んだ三軒の長家には、粘土の竈にかけた鍋から盛に湯氣が立つて、夏蠶の糸をとる女房達が、壁越しに大きな聲で話し合つて居る。枠の音がかたみに縺れ合つて律を刻んだ。

「おい／＼大がいにして片付けつちまアねか、おきんさ達アはあ一鍋終へる頃だぞ」

鼻に紙の捩をかつて、眞つ赤な顏をして居るお波を圍んで、朝からお鶴は錢を强請る。叱る、泣き出す。一遊びして歸つた源吉は、伊助が朝飯を喰べてゐるのを見て、腹が空いたとぶす／＼言ひ出す。

「やかましい童どもだなア、馬鹿、何處の國に朝飯を二ん度喰ふ奴がある！ お鶴、源吉、ぶつ叩くぞ朝からやぶれてつと。飯喰つた奴アさつさと學校さ行げ！ 今日はよつぽど遲いんだぞ」

手盛で麥飯を掻き込みながら、箸を持ちあげて捨吉は怒鳴つた。

「ほんとに〱のぼせあがつちまア、どうしてかう煩さい子供達だか……」とお波は大儀さうに溜息をして蒲團をたゝみはじめた。

「あゝあ、年中かうして子供にばかり責められてんだ、こんな因果な體もねえもんだ」と聞えよがしに獨り言を言つた。

捨吉はあゝしてかうしてと、仕事の手順を考へて居た矢先、のび〱とした心が不意に躓いて、腹立たしいやうな氣持ちがしたが、腹がふくれるとまた暢氣になつて、鼻聲にさはりを唸りながら仕事にかゝつた。

捨吉はこの裏町へ越して來てからそれでも五年になる。はじめは隣近所の人達に、月の明るい晩なぞは、殊に首を締められる鷄の叫びが、何とも言へず厭な氣持ちをさせたものだが、捨さんと言へば直ぐにその義太夫を聯想するだけ、今では四邊の人達に、在つても無くてもいゝ人になつて居る。たゞ六つになる源吉が大の腕白者で、毎日のやうに近所の女房達に苦情を申し込まれて居る。

越して來た當時は少しは綺麗にもして、賣り出しの廣告の赤い字が勢ひのいゝ時もあつたが、おひ〱新らしい立派な肉屋が殖え、調子に乘つて手を擴げた養豚が、その年ぐいとコレラのために撲殺するやうなはめになつて、青くなつたほどの大痛棒をうけた。それからこつちはいくら焦慮つてもどうも思ふやうに行かない。子供は殖える。不景氣が續く。雨が漏つて納戸の蒲團が腐るやうなことがあつても、屋賃が滯ッて居るので屋根替へもして貰へないやうな始末、この頃は大分氣が太くなつて、何事に

もどうにでもなれといふやうな遁り口が見えた。

何肉に限らず、暑さに向つて來るに随つて捌けなくなるのが常である。それで捨吉も一昨年から夏は毎年氷水屋になつた。

二三日前に問屋から、氷倉の開いた通知が來たので、昨日から鶏屋を片づけるやら何やらて、新らしい仕事をする時はいつもさうて、捨吉は機嫌よく働いて居る。

「これよう、お聞き遊ばせや、今お館には悪人溜り、お近習小性に至るまで、ちつとも油断はなりませぬ……」

十八番の政岡が今日もまた初まつた。首を振つたり口を歪めたりしてゐる様を見ると、お波はいつも男は暢氣だと思つて、それが妬ましく口惜しく憎らしくなる。欲しいとも生まうとも思つて居ないところへ子供が生れる。育つ、また生れる。さうして年が年中その泣き聲に縛りつけられて、ほつとする隙もない。せめて活計ても満足にゆくことか、妹の縁づき先へ借金は殖えるばかり、それすらこの頃は何とか彼とか甘い断りを喰ふやうになつた。

子供をどうしようと思ふ。どうなるんだらうと思ふ。この頃そんなことを考へるやうになつて、その度に心が重くなつた。生んだ以上はそつちのものと言はぬばかりの顔つきする男、少くも子供といふものを餘外になし得る男、女ばかりが知る直接の苦痛に沒交渉な男、その男といふものがむちやに腹立たしい。子供といふ大切な寶の重い葛籠を背負せられた不平が、重いと思ふ時だけ背負せた人が憎くなる

愛も戀もない男と女、それが長年同棲して、結果の敗北に泣く時だけ女は悔いる。それも瞬間、悔いても及ばないと知つてるから我儘をはじめ出す。甘へてみる。自墮落にもして見る。ふとそれらが氣恥かしくなつては今度は獨り焦れ出して來る。それを度々繰りかへしてゆくうちには、初めはさすがに包まれて居た待ち設けない喜びといふやうなものが消えてしまつて、今度は責任の重さだけが際だつて感じられる。

お波には無論自分の心を順序だつて考へることが出來なかつたが――考へようともしないし――たゞ時々むしやくしやとなつて人に當り散らした。そしては氣の弱い女だけに後では一倍滅入り込む。

今日は一日赤い顏をして默つて仕事をして居た。常から赤い顏をしてゐる時はさうなので、捨吉は別段氣にもかけず、終日庭いぢりに暮した。

……

二

鷄屋は兎に角一角の氷水屋になつた。

小さいながらセメンで塗つた池なぞも一寸器用に出來て、淺い水を金魚の背がすい〳〵と分けて歩いた。腰掛には花茣座を敷く。硝子の簾をさげる。棚には澤山果實水やサイダの空罎なぞを買つて來て飾つた。そんなものにすら思つたより資本が要つたが、どうにかかうにか工風して、早速珍らしさうに一錢位を持つて來る子供等を對手に氷をかいた。

或る日捨吉は店の床几に裸足の足を組み合せて、玉垂れの風に搖れ合ふ音を聞きながら煙草を吸つて

居ると、鼻聲でわい／＼言つて居た子供達が、急にわつと大きな聲をあげて泣き出した。同時にお波の肝走つた叱り聲で、器を投げつけた音に續いて、驚いたやうに赤兒も泣き出した。

「ちよッ」と舌打ちしながら、捨吉はひそ／＼と起つて行つて暖簾を分けて首を出した。

「どうしたんだ？……あゝん？」

お波は大人氣もなく、袂を顔にあてゝひん／＼と泣いて居る。

「こんな煩せい餓鬼どもつてねえもんだ、畜生！　馬鹿！　何處へでも行つちまへやがれ！」

頰のこけた青い顔に血を漂はしてぶる／＼慄へて居る。

「手前此頃のぼせてるな、馬鹿！」

捨吉は一寸可哀いさうにも思つた。

「源吉、いつまでも吠えてねえてさつさと遊びに行つてこう、おつるを連れてくんだぞ、いゝか、そら！」

吃驚したやうに母親の顔を眺めて、聲でばかり泣いて居る。そつと捨吉は賣溜めの竹筒から、五厘づゝ出して持たせてやつた。

「仕様がねえなァほんに、子供のこつて眞つ向になつて怒つてどうしんだ」と忌々しさうに言ひかけたが、ふつとある不安が萠して、

「手前この頃のぼせてんだぞ、鼻血がよくてんでねえか」

茶椀や箸などが轉げて居る板の間に立つて、お波はまだ啜り泣いて居る。

此頃なんとも麥のにほひがげい〳〵かへして來て咽喉へ通らないので、今日は自分だけのを土鍋に少し白く炊いた。それを子供等が珍らしがつて、奪ひ合つて喰べようとしたのが、情なく忌々しかつたからである。子供が可哀いさうでもあり、腹たゞしくもあり、泣いてみれば何が何やら悲しくなつて、脱ぎ捨ての押しかためられた壁の隅へ行つてお波は背を向けた。

捨吉は泣きながら其方へ這つて行かうとする留吉を抱へてすかしながら裏へ出た。

「ない捨さん、明日薬師様のお縁日に義太夫があるつていふから捨さんも出たらよかつぱい、腹がへつてもひもじうないか、よつてどんてん〳〵」

端の長家の肥つた若い女が聲をかけて、手際よく繭をつけながら、退屈凌ぎにげら〳〵笑つた。

お波は二時頃、珍らしくお袋の墓へおまゐりして來ると言つて、留吉を背負つて家を出た。

日暮方になつても歸つて來ないので、庭掃きや何かを伊助に言ひ付けて、なんのかのと纏はる子供等を叱りつけながら、捨吉はごそ〳〵と臺所のことをやつて居た。やがて、

「おゝ暗い〳〵」といふお波の聲が聞えて、

「歸つて來た〳〵」とそこらに居た子供達が、猫の子のやうにお波を取り巻いた。

「何處かへ寄つたのか？」と捨吉は煮えだつた鍋を下す途端に熱くした手を、耳へやりながら穏やかな聲をかけた。

「えゝおせい家さえ」と投げやるやうな返事、風呂敷から新聞紙の袋を出して、穴のある煎餅を二枚づゝ子供らに分けた。

捨吉はぐつと癪に障つたが、今朝のことを思ひ出して怒鳴るのを控へた。

「お糸、お膳を出せ〳〵、さア飯だ〳〵」

伊助はそのひまに店の提灯へすつかり灯を入れた。雨が過ぎたあとの風が、風鈴の短冊を面白さうに弄んで居る。せまい四疊の勝手には紙笠の歪んだ洋燈がつけられて、汁を啜る音が一頻り騷々しくなる。腹が空かないと言つて、其傍で黒繻子と綿繻珍の合せ帶をたゝみながら、お波はきつと口を結んで居たが、其汁を啜る音や、ぴちや〳〵する脣の音やが、何とも言へず耳に障つて眉を顰めた。

「ちよつ」と舌打ちして、あ惡るかつたなと幽に思つたが、どうにもかうにもその音が癪に障る。厭なものを追つかけ〳〵聞かされるやうで、果ては耳を蔽ふてうつぶしてしまつた。

その横顔を時々ぢろり〳〵と見て居た捨吉も、怪訝さうな目をして二人を見くらべて居た伊助も、申し合せたやうに一寸箸の手をとめた。

「あゝあ、いつまでもかう涼しくつちやアやり切れねえなア」

欠伸まぢりに着物を脱いで、捨吉は勢よく蚊帳の裾を捲くつた時、

「……どうなつたつて大きなお世話だ……」

不意と切つたやうにお波の傍へ聲がした。ぎよつとして思はず、

「お波！」と呼んだ。

目の下にお波は、留吉を抱へて仰向けに天井を見つめて居る。其目が、枕を軋ませてこつちを向いたので、やゝ安睹して、

「お波、何寢惚けてんだ――」とは言つたが、睡つたのでないことは其目て知れる。

「なアお波、さア寢ろ〳〵、いゝか洋燈を消すぞ」

「世の中に寢る程樂なことはないか、やれ〳〵」と附元氣をして捨吉は蒲團をかけた。

「あゝあつ」と出もしない欠伸をわざと大きくして、それからそつと傍を窺ふた。靜まりかへつた闇は何處にも動く影をゆるさない。まだ天井に目を据ゑてるのだなと、なんとはなしにさう思つた。

いつとはなしにうと〳〵となりかけた時、

「なんだつて大きな面しやがつて‥‥ねえ貴方(あんた)、あれんばかりの借金さつさと返してしまひなんしよよ、あれんばかり‥‥大きな面しやがつて‥‥」と聲は低かつたがはつきり聞えた。

「お波！　手前何いつてるんだ、今日おせいと喧嘩でもして來たのか」と半ば身を起しかけたが、

「借金なんてそんなに苦にしなくたつていゝわな、僅(ちつと)ばかり‥‥返される時になりやいつだつてかへされんだ」と調子を替へた。

「そんなこと考へてねえて早く眠れ〳〵、そらもう一時打つたんだぜ」

そのまゝ靜になつた。

伊助の時には産が重くて、そのあがりとぼんとしたやうではあり、妙なことを走るやうなことがあつた。其當時、死んだ母親が御祈禱をあげたり何かしたことを思ひ出して、捨吉はなか／＼寢つかれなかつた。伊助が子供に似合はず大人で、なか／＼役に立つて、學校の出來のいゝことなども考へて、何だかから妙に哀れつぽくなつたと思つた。

曉近くにふと目を覺まして見ると、お波はすや／＼と鼻息を立てゝ居た。

三

あくる日、お波は當り前に起きて當り前に仕事をした。朝飯の時、

「昨宵は面白い夢を見た／＼」と繰り返してゐるので、どんな夢だと聞くと、

「私が十八位の綺麗な娘になつて……」とあとは言はずにさも嬉しさうに笑つて居る。馬鹿々々しいと思つたから、捨吉は對手にならずにそのまゝ店へ出て居ると、程過ぎてから頻りに「貴君、貴君」と呼んでゐる。

「何んだ？」と稍々面倒臭さうに顔を出すと、

「おせい家の借金はどの位なんだつけない」と聞く。

「また初めやがつた！心配しんなつうにな、十兩々々」と出鱈目を言つて首をひつ込めた。それでも氣になるのでやがてそつと覗いてみると、お波は長火鉢の前に坐つて、一心に何か考へ込んで居た。

昨日お寺へ行つた時にこんなことがあつた。途中から泣き出した留吉を、ほら鳩が〳〵と本堂の屋根を指さして立ち止つて居ると、ふと足音がしたので振りかへつて見た。お波は思はず眞つ赤になつた。今度の住持は年が若くて、そして綺麗な坊樣だといふことをちよい〳〵耳にして居る。それだなと知つた時に、自分が眞つ赤になつたのに氣付いて、はつとして猶更眞つ赤になつた。お波は逃げるやうにさつさと歩き出した。さうして怖々ふりかへつて見ると、裾長く着た白い着物の帶に兩手をはさんて、靑々とした形のいゝ頭の人が、ぶらり〳〵と靜かに向ふへ行く。ほつと安心したが何故かもの足らなかつた。門を曲る時に引かれるやうにまた振りかへつて見たが、何にしてもこの年になつて、男の前に面を赤めたのを恥かしいことゝ思ひつゞけた。見すぼらしい自分の姿を見廻して、これまでにない佗びしさを覺えた。

途中からふと妹の家へ寄る氣になつて、わざ〳〵道を迂曲つた。可なり大きな米穀店てあるけれども、まだ頑丈な姑がやかましいのて、妹は小さくなつて働いて居る。その姑に大きな顏されても仕方がないやうに借金はあり、妹のおど〳〵した樣を見るのが癪だつたり、さればといつて互に勞はり合つて居る妹夫婦を見ては、吾が身に引き較べて妬ましかつたりして、お波には常から閾の高い家てあつた。丁度その日は姑が三日ばかり前に湯治に行つたといふあとて、妹が嫁に來て以來、はじめて落ちついていろ〳〵な話をした。姑が居なければ自然さうなるのて、今日は何かにつけ主婦ぶつて歡待(もてなし)する。と思つてみるとそれが面憎くなり、夫婦てちやほやするのが、こつちを見縊つてるのだなといふやうに僻まれる。

耄碌して三年間といふもの、人のいゝ笑ひの種になつて居た祖母の話などが出て、久し振りで笑つたりしたが、やがておせいが聲をひそめて、

「姉さ、あんたまた出來たない」と言はれた時、お波は穴にも這入りたい程恥かしいと思つた。自分も今度ばかりは實際思ひがけなかつた。

「ほんとに子供ばかり殖えて大ていぢやない」とあり〳〵困つたといふ顔付が見える。困れば困るだけ自分の方にも自然と浪が及ぼして來るからである。おせいにはまだ一人も子供がないから、幾分か嘲ける氣味も含まれて居る。

恥かしいと思つて居た矢先だから、お波には犇と應へて、同時にぐつと癪に障つた。どうしてくれようと思ふほど腹が立つて、意固地な厭味を散々並べ立てゝ、ぷいと暇を告げて歸つた。

その歸途にまたふら〳〵とお寺の前まで行つた。ふと立ち止まつて考へたが、何が何して何しにこゝまで戻つたのか解らなかつた。やがてすた〳〵と引きかへした。

二三日過ぎてから、此間の容子が少し變だつたので、おせいは心配して來て見たが、その時お波は長火鉢の脇に立て膝になつて、前掛の紐を結んでは解き、解いては結び、氣をそれにばかり打ち込んだやうに、一心になつて繰りかへして居た。泣聲になつて、

「姉さ、あんたはまアなんて情けない、あんたが確りしてくれなくちや、子供達をどうする積りなんだい」に凝乎と見つめられた目を事もなくみかへして、

「おせい、そりやいゝ男だぞ」と言つた。

男を選り好みする心の自由さへも持たなかつた女が、妻となり、いつの間にか母となり、醜い男に不滿足を感じる感情(こゝろ)あるのを知る餘裕はなかつた。義理だの道德だの、そんな生れたまゝの心を包む皮を脫いて、お波は今こそ好きなものを好く自由を得たのだ。

或る晩お波はふつと刎ね起きた。四邊の闇に耳をすまして、寢過したなと思ふと氣が焦(いら)立つ。さぞ待つて居やう、或は途中まで迎へに出て居るかも知れない、とさう思つて手早く着物を着た。手探りに這つて來て框から庭へ下りる。下駄は音するからと思つて裸足になつた。音がしないやうにと表の戸をこぢあける。庭の隅の鷄屋の中で鷄がコヽコヽとないた。かへり戸を忘れて歩き出したが、ふと戾つて來て戸を閉めた。一間ばかり歩いてまた戾つた。ひとりでにすうと音もなく開いたやうな氣がしたので、今度は下締めもない着物の褄をとつて、ひた／＼と足早やに急ぎ出した。

靜まりかへつた寺の庭をうろ／＼して居たお波は、やがて芭蕉の葉の下をくゞつて、庫裡の板戸を割れるやうに叩き出した。

四

「やアい狂者(きちがひ)々々、鷄屋の色狂者！」

「面白いから行つて見ろ、また必とお寺さ行くぞ」

學校がへりの子供らがぞろ／＼と蹤いて行く。

「そらまた鷄屋のお波さんがお通りだ、あれ！　今日はお白粉なんぞつけ出したぞ。どんな氣で居るもんだかねえ、明蓮寺の方丈様もとんだ者に見込まれたもんだ、あれにかゝつちや、はあ往生だねエ」

店に居た内儀さん達が見送つて笑つた。

お波は時々ふいと家を出る。いつもお寺のあたりをうろ〳〵して、子供らに袂を引つぱられたり、石を投げつけられたりして居る。やがて何も彼もけろりと忘れてしまつたやうに歸つて來る。さもなければ從いて出た伊助に途中から連れかへされる。時々は何處からともなしに干物をはづして來て、捨吉を困らせた。

八月末からはそろ〳〵秋風が吹きそめて店も隙になるので、九月初旬からまた鷄屋にかへる。捨吉は何も彼も思ふやうに行かないのと、お波に對する不平から、此頃は少し自棄氣味になつて、賣り溜めをつかみ出して赤い顔をして歸つて來る時がある。それでも學校まで止させてしまつた伊助が、くる〳〵家の用をしてるのを見ると、氣恥かしくなつてもうこそ行くまいなど〵其時だけは思ふ。子供はこの頃つく〴〵可愛いと思ふやうになつた。

今てはお絲一人だけが學校へ行つて居る。十一月三日の朝、捨吉は自分から髮を束ねてやつて、心覺えの簞笥から晴着を引きずり出して着せた。何しろ育ち盛りの子供てあるから、行きも丈けも短くなつて居て、思はず、

「いゝ、ちよまよのやうだなア」と吹き出したが、仕方がないので、

「さアよし、手をちよこませるやうにして行げよ」と出してやつた。お絲はそれでも駄々もこねず出て行くのを見送つて、

「ちよんて行げよ」とまた聲をかけた。

お波は此節少しおとなしくなつて、幾日も〳〵櫛の齒を入れない髮を蓬々とさせて、家に閉ぢ籠つて居る。折り屈みも苦しさうな腹をして、男は薄情だ〳〵と言つて居る。

「何故？」と聞くと、

「こんな體の私を置いてあの人は何處かへ行つてしまつた」といふ。

「あの人つて誰だ？」と聞くと今度は默つてしまふ。氣違ひだとは思ひながら、捨吉は忌々しくなつて、「糞！」といふやうな氣になる。「子、俺の子てねえかも知れねえよ」とこんなことも思つて見た。しかしさう思つたところて、そんな馬鹿なことを言つて喧嘩をすることも出來ない。それよりも、この頃ふと關係をつけてしまつた近所の魚屋の肥つた飯炊き――少し足りない女――が、「あいつ懐妊でもしなけりやいゝが」などゝそんなことを心配した。

その年は兎も角も無事に暮れた。すると正月の七日八日の二日續けて、町のもの好き連が集つて、常舞臺を借りて素人義太夫の催しがあつた。無論捨吉も加はつて居る。木戸錢なし、下足料一錢といふ、赤い圏點のついたビラが茶屋や床屋に下つて、午後から太鼓の音が町中を觸れて歩いた。その日捨吉は、夕方から飯を早くして出掛けて行つた。

たつて居た。

家には十二といふ年の割に氣も働も利く伊助が、早くから店の戸をしめて、妹どもを集めて炬燵にあたつて居た。

材木屋の裏の松に當る風の音が、ゴウ〳〵といふ響を送つて、時折隙間を偸んで這入る風が、氣味わるく隔ての障戸を押したり引いたりして居る。稀れに通る人の足音が高く響いた。源吉とおつるはいつか兩手を高くひらいて寢入つて居る。きい〳〵する聲をたてながら、棲の取りつこをして居たお糸が、あゝと欠伸をしてばたりと仰向けにひつくりかへる。それが傳染つて伊助も思はず大きな欠伸をした。

向ふ側の蒲團に顔を伏せて、眠つたのかと思へばさうでもなく、頻りに首をかへして居たお波は、此時「む〻……む〻……」と重苦しく唸り出した。びくりとして見守つて居ると、やがてまた靜になる。程過ぎてからふつと顔をあげた。子供らの顔をづらりと見廻して、眉を顰めて深い息をつく。

「腹が痛いの？　おつ母さ」

當惑したやうな伊助の顔を、お波は見定めるやうに上づッた眸を据ゑた。尾を引いて來たやうに我が子の顔が甦つて、何故かその顔のこゝにあるのが不思議なやうな感じがした。

陣痛がおひ〳〵増してくるらしいので、子供心に伊助は殆ど途方に暮れたが、やがて襟巻をとつてあとに氣を殘しながら家を出た。舞臺へ行かうか、叔母の家へ行かうかと一寸迷つたが、少しても近い方へと思つてまづ叔母の家へ急いだ。緒のゆるんだ下駄が踵をはなれて、あとから追ひかけるものがあるやうに氣味惡るく響いた。

黑い頭巾で顔を包んで、肩掛けにくるまつて出て來たおせいは、途中から伊助を千樂座へやつた。心

も空に來てみると、目を覺まして好きな伊助が居ないので、「兄ちやアー〳〵」と泣いて居るお鶴を、お糸は持てあまして自分も泣きさうになつて居た。

肝腎のお波は、痛さに堪へられぬやう、滿面に朱を灑いて、着物の前を亂して、そこらをぐる〳〵立ち廻つて居る。淺猿しさと情なさがこみあげて、

「姉さーん」と泣き聲になつた。

「おせいか」とお波は立ち止まつた。凄い其聲が此場合なんとなく嬉しく響いて、

「確りしなんしよ、よ」と爲るまゝになるお波を蒲團の中へ入れた。

襤褸を搜さうと押入れをあけてみると、男手の屆かぬ汚れものや、子供の着物などが轉げ出て、落ちかゝつた壁から砂がざら〳〵と落ちた。

伊助は切れさうな耳を押へてひた急ぎに急いだ。

間口の廣い旅籠屋の角に建つて居る素人義太夫と書いた角行燈の不景氣な灯を曲ると、ツヽン〳〵と摘んだやうな三味の音が、そこらの低い軒並を越して、靜まりかへつたあたりに響いてくる。

行火に古ぼけた赤毛布をかけて、跨灸りをして居た禿頭の木戸番にことはつて、伊助は中へ入つた。まづ好奇と素見半分に行つた人の頭のうよ〳〵してるのが目にはいる。舞臺には鈍帳芝居の御殿などに使ふ小屋を建てゝ、ぴか〳〵と剝げた金襖、赤毛布を敷き廻した上に、淺黄の肩衣を着た人が二人並んで居る。膝を乘り出し〳〵、大きな手で合を入れて居る盲目の脇に、赤い房のついた見臺にのしかゝつて、口を曲げて枯れかゝつた聲をはりあげて居るのは、よく〳〵見るとそれが捨吉である。伊助は極りが惡るいやうな氣がして暫くとぼんと立つて居た。丁度もの賣りに入つて居る友達に會つたので、それに數

へられて地獄道から薬屋の方へ廻つた。燈(あかり)もない真の暗な中を、何かに躓きながらびく〳〵ものて傳はつて行くと、幽に燈の影がさして、さら〳〵と足に砂の氣持ちのわるい舞臺裏へ出た。種々な道具が、道せまくたてかけられてあるかげの方に、鐵葉(ブリキ)の火鉢にカン〳〵と火を起して、見しり越しの桶屋の爺や、二三人の若い男が頻りに何か話し合つて居た。

その中に交つて、伊助はもの珍らしさに暫く家のことを忘れた。

不意にばら〳〵な喝采が起つた。

「終へた〳〵」と一人が欠伸をして立ち上る。

「何時だもう、十時過ぎ？　そんなになつかなア」

「いよ！　御苦勞樣」

「さア寄りたまへ〳〵」と一人は脇をあける。

捨吉はさも滿足さうな顔してにこ〳〵寄つて來た。

「お父つさ」と脇から聲をかけると、初めて吃驚して、

「なんだ伊助」

「おつ母さが……」

捨吉は見る〳〵興ざめた顔になつた。

「よし、今直ぐ行く」

肩衣を脱いで桶屋の爺に何か囁いて居たが、

「さア行べ」と絆纏の衿を直しながら出て來た。

「なんだ捨さん、もう歸んのか、そんぢやらあれ持つてつたらどうだ」と一人がわざ〳〵起つて行つて小さな鮨の折を持つて來た。

裏口を出る時に拍子木の音がして、東西〳〵と口上言ひが、太夫の名と藝題を觸れて居る。

「あゝ今度は朝顔日記だ」と捨吉は殘り惜しさうに呟いた。

* * * * * * * * * * * * * *

「伊助か？」

待ち切つたやうにおせいは首をのばした。

「んゝ」

「お父つさは――？」

「今來る、産婆家さ寄つたんだ」

かたぴしと戸を閉めて、伊助はふう〳〵言ひながら入つて來た。

「もう今度の汐時だと思ふんだげつとな。童どもゝやう〳〵寢かしつけたし、お湯も大がい沸く頃だ、焚きつけがなくて困つたぞ」

「おせい」

お波は度々かうしておせいを呼んだ。

「あい〳〵、氣を確り持ちなんしよよ、今にない、今アに直きに樂になつから」と子供をすかすやうにおせいはいふ。

「捨さんは遅いことなア、伊助、汝ア御苦勞でも少つと手を貸してくつろやれ、なア疊を一枚剝かさざなんねえから」

疊を剝いだあとの床へ、敎へられた通りに伊助は藁や襤褸を敷いた。

刻一刻に、腰を抱いて居るおせいの手を、彈ねかへす程に力づいてくる。苦しまぎれに其手をむづと握つては「おせい」といふ。

力にされて見ると我ながら不安で心細く、萠すいろ〳〵な緣起でもないことが、ふとお波は今年三十二の厄年なのを思ひ出した。

「おせい、捨さんはえ」

「捨さんかい、捨さんは今產婆をつれて直ぐに來るぞい」といひながら、そろ〳〵本性がついて來たかと、おせいは淚がこぼれる程嬉しく思つた。

「おせい」

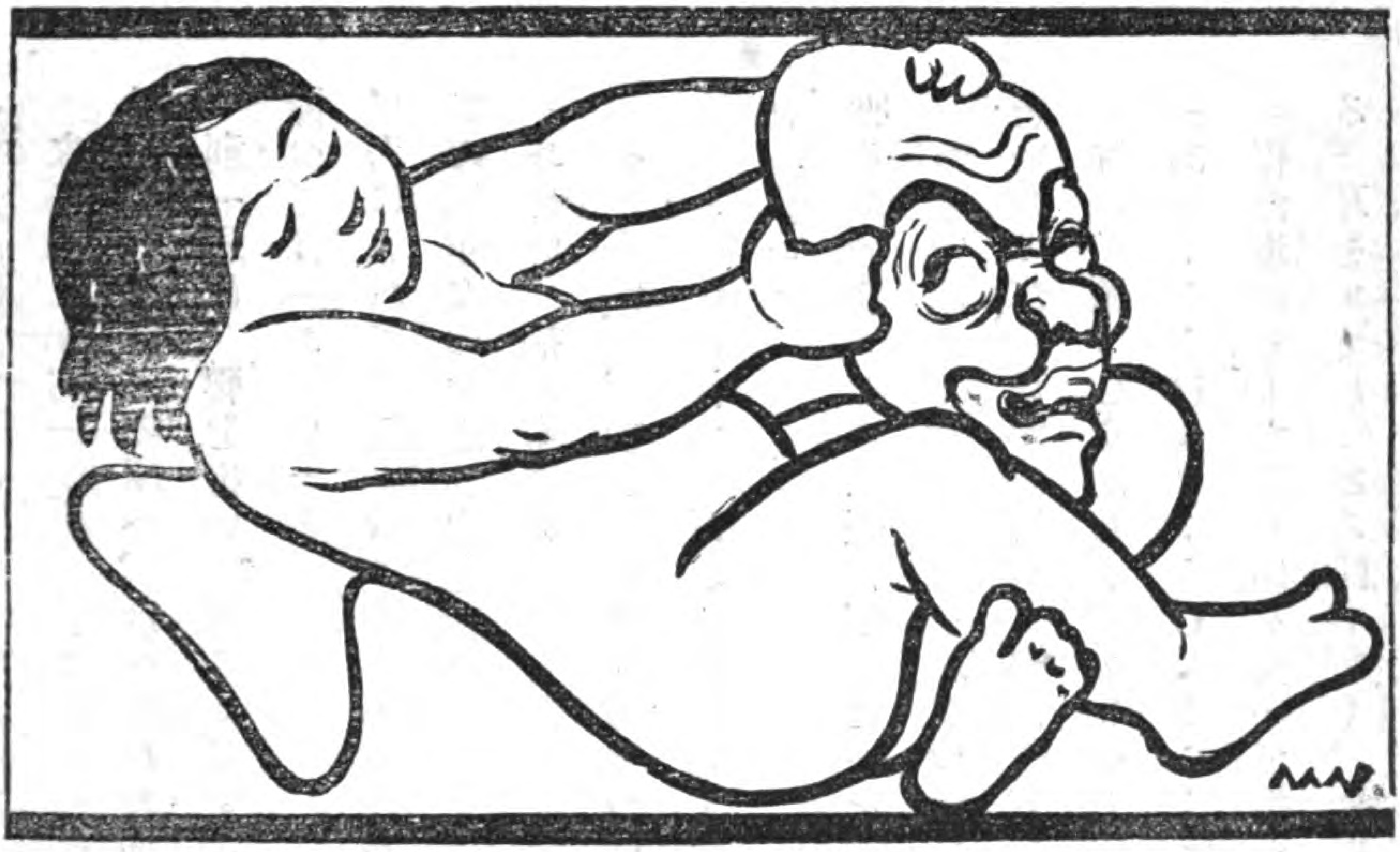
唸るあいま〳〵には絕えずおせいを呼ぶ。

おせいはふと妙なことを思ひついて自分の髮に手をやつた。いつか姑が上方見物にのぼつた折、土產といつて江の島から買つて來た子安貝の根掛けがかゝつて居る。力を入れて其絲を切つて、

「姉さ、確りしなんしよ、もう少しの間だぞい」と一つづゝ兩方の手に握らせた。

「あゝ……むゝ……むゝ……」

夜汽車の軋りが早く地を曳いて去ると、二三軒先の犬が太い聲で吠え出した。しつしつと叱る聲がする。耳をすましてゐる間もなく、今度こそはと思つた足音が、つひまた行き過ぎてしまつた。



旅舍

水野葉舟

一

人車が停車場に着いた。敏夫は膝の上に置いて來た手提げを持つと、いきなり捲棒を飛び越して降りた。そして、後て降りたお貞を振り向きもせずに、とつとつと待合室に入つて行つて、發車の時間が書いてある黑板の前に立つた。

お貞は後から、車の上に殘つて居たカバンを車夫に運ばせて、隨いて入つて來た。すると敏夫は振り向いて、一寸女の顏を見たが、忙しさうに何處かに出て行つた。その顏が家を出る時とは、まるで變つた表情をして居た。お貞は何となく

冷りとした。

ちらつと自分の顔に來た、敏夫の目の中には、今迄見せた事の無いやうな冷淡な……そして憎らしい心持が見えて居た。それが、はつと女の胸を打つたやうで、お貞は何となく情けない氣がした。その儘、室の眞中にぼんやりと立つて居たが、隅の方のベンチにカバンを置いて來た車夫が「奥さん」と呼びかけたので我に返つた。

自分は歩いて歸るからと言つて、車夫を返してやると何となくやるせが無いやうな氣がして、そつと荷物の傍に腰を下して、袂をかき合せた。

敏夫は待合室を出ると、そこに居た赤帽に、この停車場で公衆電報を取扱ふ場所を聞いた。そして少し息をはづませるやうにして、敎へられた處に行くと、外套のポッケットを搜ぐつて、そこに出してある賴信紙に

「イマ、S——ヲタツ、トシ」と書いた。胸の中には一種、押へられない興奮した感情が踴つて居た。字を書かうとする手が慄える。その慄える手でT——市に居る友人の宛名を書いた。このS——市を去ると言ふ事を思ふだけて、今、もうその爲めに停車場に入つて來て居ると思ふだけて、彼の胸の中は湧き上つて來る。頭も身體も波の中で弄ばれて居るやうて、ちつともこれと言つてものを考へ續けられない。彼は次第に興奮して來る感情にあえぐやうにして、この電文を書いた。そして、この宛名の友人は、今彼の行く先きには何の關係の無いT——市に居る人だ……

て、その電文を書いた頼信紙を出して、受取つてもらふと、い彼の心は又少しい凪いだ。汚い嫌なものを打捨つて、これから自由に快くまだ見知らぬ自然の中に入つて行くと思ふと、打勝つたやうな心にもなる。彼は、ぼつとなつて落ち付いた足つきでそろ〳〵と、待合室に歸つて來た。

室に入つて來ると、隅の方にお貞がカバンに向つて謹ましさうに立つて居た。男はその傍に寄つて行つた。女は堅くなつた顏の肉を無理に動かして笑ひを見せて彼に向つた。

「何處にいらしつたの？」と低い凋れた聲で聞いた。

「電報」と簡短に答へると、彼は肩を聳やかしたが女の顏から目を反らした。心の中で女の思つてる事はよく知つて居ると思つた。だけれど、今はこの女から自分の爲めに悲しい凋れた姿をされても、艶しく身體を寄せるやうにされても、如何されるのも嫌だ。全くはこの女がこの世界に居ないでほしい。

彼の心はもう縛ぎ止められて居た綱が切られてしまつた。お貞の家に居る中に幾度となく、自分の心が

「逃げろ！」と自分に向つて命ずるやうに言つた……それて居て何となしに、ぐず〳〵臆つて澱んだやうな日を送つたが、今日は愈々思ひ切つてその泥の中を――お貞の家を離れて來た。今迄、止つて居た脈が生々と打ち出したやうに、身體も心も息苦しい。

二人は立つた儘、默つて俯向いて向ひ合つて居た。彼はふと女が四邊を憚つてする吐息を聞いた。て、目を上げてぢつとその顏を見ると、女の目がしげ〳〵と自分の顏に來て居た。それが拍子てにつと

笑つて見せた。すると、彼は身體が冷いものにでも觸つたやうに感じて、冷淡に口を引締めた。と、クルッと後を向いて、ツカ〳〵とそこを離れて行つた。急忙しさうに出札口に行つて、

「H——まで！」と嚙み切るやうな調子で言つた。胸には動氣がして居た。

切符を買つてしまつたが、彼は落ち付かないで、お貞から離れて、室の中を行つたり來たりして居た。で、暫くすると、又つッと出て行つた。やがて片手に煙草の箱を持つて入つて來た。そしてお貞の前に來て、一寸、笑つてその箱の中から兩切の煙草を摘み出すと、器用らしく唇で啣へてマッチを擂つた。一口吸つて、その煙をフウッと戲けるやうに女の顏に吹きかけて、

「大變御厄介になつたね。近い中に又逢ひ度いもんだ。」と言つた。

お貞は男の變つたそぶりを見て、ものを言ひそびれて居た處なので、斯う言はれると、涙が込み上げて來るやうになつた。

「敏夫さん……ぢや、今夜はH——にお泊りになるのですね。それからK——にお着きになるのは明後日？」

「ウン、山の中を二日歩くんだ。まだ雪が大變だらう。いゝさ雪だつて何だつて……」

「でも、身體に障らないこと？」

「そんな事は知らないさ！」と言ふと、解けかゝつた彼の顏が又締つて、言葉も途切れてしまつた。女は默つてそれを見た。が、暫くすると堪へ切れないやうに

て、その電文を書いた頼信紙を出して、受取つてもらふと、い彼の心は又少しい凪いだ。汚い嫌なものを打捨つて、これから自由に快くまだ見知らぬ自然の中に入つて行くと思ふと、打勝つたやうな心にもなる。彼は、ほつとなつて落ち付いた足つきでそろ〳〵と、待合室に歸つて來た。

室に入つて來ると、隅の方にお貞がカバンに向つて澄ましさうに立つて居た。男はその傍に寄つて行つた。女は堅くなつた顔の肉を無理に動かして笑ひを見せて彼に向つた。

「何處にいらしつたの?」と低い凋れた聲で聞いた。

「電報」と簡短に答へると、彼は肩を聳やかしたが女の顔から目を反らした。心の中で女の思つてる事はよく知つて居ると思つた。だけれど、今はこの女から自分の爲めに悲しい凋れた姿をされても、艶しく身體を寄せるやうにされても、如何されるのも嫌だ。全くはこの女がこの世界に居ないでほしい。

彼の心はもう縛ぎ止められて居た綱が切られてしまつた。お貞の家に居る中に幾度となく、自分の心が

「逃げろ!」と自分に向つて命ずるやうに言つた……それて居て何となしに、ぐず〳〵腐つて澱んだやうな日を送つたが、今日は愈々思ひ切つてその泥の中を——お貞の家を離れて來た。今迄、止つて居た脈が生々と打ち出したやうに、身體も心も息苦しい。

二人は立つた儘、默つて俯向いて向ひ合つて居た。彼はふと女が四邊を憚つてする吐息を聞いた。て、目を上げてぢつとその顔を見ると、女の目がしげ〳〵と自分の顏に來て居た。それが拍子でにつと

笑つて見せた。すると、彼は身體が冷いものにても觸つたやうに感じて、冷淡に口を引締めた。と、クルリと後を向いて、ツカ〳〵とそこを離れて行つた。急忙しさうに出札口に行つて、
「H——まで！」と嚙み切るやうな調子て言つた。胸には動氣がして居た。

切符を買つてしまつたが、彼は落ち付かないて、お貞から離れて、室の中を行つたり來たりして居た。て、暫くすると、又つツと出て行つた。やがて片手に煙草の箱を持つて入つて來た。そしてお貞の前に來て、一寸、笑つてその箱の中から兩切の煙草を摘み出すと、器用らしく唇て啣へてマッチを摺つた。一口吸つて、その煙をフウッと戯けるやうに女の顏に吹きかけて、
「大變御厄介になつたね。近い中に又逢ひ度いもんだ。」と言つた。

お貞は男の變つたそぶりを見て、ものを言ひそびれて居た處なので、斯う言はれると、涙が込み上けて來るやうになつた。
「敏夫さん……ぢや、今夜はH——にお泊りになるのですね。それからK——にお着きになるのは明後日？」
「ウン、山の中を二日歩くんだ。まだ雪が大變だらう。いゝさ雪だつて何だつて……」
「でも、身體に障らないこと？」
「そんな事は知らないさ！」と言ふと、解けかゝつた彼の顏が又締つて、言葉も途切れてしまつた。女は默つてそれを見た。が、暫くすると堪へ切れないやうに

「お歸りには又寄つて下さるでせう？‥‥」と言つた。

「さ‥‥」男は困つたやうな色を見せて、「僕は隨分、行き當りばつたりだからね。如何なるか‥‥とにかく、先方から手紙を上げるよ。」

「えゝ、是非、手紙を頂戴ね。私も書くから‥‥あゝ、今日から又つまらない日を送るんだ。」

「何故‥‥‥」と言はうとしたが、敏夫は口を噤んだ。これから一分でも‥‥女の胸に深く入れば、必ずあの腐つたやうな、重い暗い雲がおつかぶさつたやうな、この數日間の‥‥あの感情に立ち返らなければならない。て、彼は

「手紙て何もかも言はう。ね、今夜旅舍に着いたら、僕の胸一杯の事を書くよ。」

「えゝ何卒。私ほんとに待つてるから‥‥きつとよ。」

男は何處か上の空でものを言つて居るやうに、薄笑ひをした。そして時計を出して見ながら、靴のかがとでコンクリートの上を二つ三つ踏んで見た。斯うして、こんな事を言ひ合つて居るのが、如何にも息苦しい。早く汽車が來て、一思ひに此處を去つてしまひ度い。

彼は又、煙草を一本摘み出して、火を付けた。時計の針が十二時を過ぎて六分から七分の間に行つて居る。それを見て

「あと三分だ！」と獨語をした。

女は又、吐息をした。人目さへ無い事なら、男の首に抱き付いて泣いて居たい。もう、その心の中には

世間も、親も、夫も、子も何にも思つて居ない。斷片に醉つて見た夢のやうな、この數日の間が過ぎてしまふと、男はフイと背を向けてしまつたやうに、今迄の懐しい顏を何處かに隠してしまつた。俄かにそわ〳〵して、心が何か外のものに向つて苛ら立つて居る様子を見せる。お貞には自分達が罪を犯した跡て、一人打捨つて置かれるやうな……不安や、寂しさや、それに加へて自分て終極まて自分の情を追つて走る事が出來ない、……心が目茶苦茶になつて居る、その紛亂の爲めに、その顏は少し赤くなつて居た。目も鋭く燃えるやうな光を帶びて、唇がかすかに慄えて居た。

と、ベルが鳴つた。そこへ忙しさうに、赤帽が入つて來て、カバンを受け取つて出て行つた。

敏夫は、晴やかな笑を見せて

「ぢや」と言つて、足早に勇んで改札の方に行つた。お貞はそれに追ひすがるやうにして

「あの……私も一所に途中まて行きませう」と言つた。敏夫は一寸振り返つて見たが、

「子供を置いて來たぢやないか？……」と、さも、輕蔑したやうに言つて、づん〳〵プラットホームに出てしまつた。

プラットホームに出ると、敏夫はお貞と並んで歩きながら

「身體を丈夫におし。………繁さんと仲よくするんだぜ。……子供をよく育てるんだよ」などと、さも、晴々した聲をして、他處事らしく言つた。その顏には少しも陰鬱な影も見えない。

大きいプラットホームの端の方に、小さいカーが五六臺連つた列車がぽつりと止つて居た。それに向

つて二十人足らずの客がぞろ〳〵と歩いて行く。どれも田舍の小さい停車場で降りる人らしい。男も女も雪頭巾をかぶつて、寒さうに着ふくれて居る。その中を敏夫は、恰好のよい大外套にくるまつて、大股にゆつくりと歩いて行く……

お貞は追ひ縋がらうとして、小さい身體を小刻みに馳けながら

「ね、私も夏には東京に是非行きますわ。」と、息をはづませて言つた。

「あ、是非おいで」と言つたが男は上の空だつた。何しろ、早くこの汚い町から……心を暗くし、腐らせた町を離れてしまひ度い。自分のした事を思ひ返して見る……そんな事よりも、今は一杯でも沸騰する酒を飮んで、この黑く蟠つた胸を、すつと透かせてしまひ度い……敏夫には何にも考へる余地はなかつた。たゞ、その快く沸騰して居る酒が目の前に置かれたやうに、黑い煙を吐いて、何時でも動かうと待つて居る列車を見ると、嬉しさに胸が湧つた。足も、身體も輕くなつたやうだ。

列車の處に來ると、三等車と半分宛になつて居る二等車がたつた一つ連結させてある。敏夫のカバンを持つて居た赤帽がその前に立つて居て、戸を開けてくれた。彼は外套のポッケットから金入れを出して、愛嬌よく金を渡してやると、お貞の顏は見もしないで、車の中につッと乘り込んだ。

車の中には、先きに二人、肥つた老人が居た。彼は自分の荷物の傍に腰を掛けると、窓から首を出して、改めてすぐ下に立つて居るお貞に向つた。

彼は目と口とに輕い笑ひを見せた。女もそれに答へて笑つた。が、危く女の笑ひの中に罪から逃げ場

の無いと言つたやうな暗い、不安な處が感じられると、彼の笑ひが消えてしまつた。

そこへ、赤帽が先に立つて、三四人の人がどやくと一團になつて來たのが、この二等車の前に止まつた。その中から黑い長いボアを頸に巻いて、同じ色のマッフを持つた目の大きい痩せた女が、すつと車の中に入つて來た。續いて若い下男らしいのが、大きい信玄袋を入れた。

敏夫はついその方に氣をとられて、ぢつとその女の顔を見た。青い……神經が爛れて居るやうな三十女だ。權高な樣子をして、ぢつと此方を見て身を据えた。

そこへ馳け込むやうにして、若い夫婦連れが入つて來た。と、

「敏夫さん！」と窓の外から呼ばれた。

「う……」と振り向くと、そこにはボアをかけた女の伴が二三人立つて居る。お貞は窓にピッタリと身體を寄せて居た。

「歸りにはきつと寄つて下さい。」と、何氣無いやうに言つたが、顔の肉は微に痙攣を起して居る。僅に涙を出すまいとして居る。

「多分寄らう。」と言つたが、心の中には、底から湧いて來るやうな悲しみが起つた。女が憐れになつた。この女は、夫と子供の處に歸るのだ。泥の付いた身體で……と思ふと、彼は思はず堅く目を閉ぢた。

女はそれをぢつと目詰めて居た。自分の運命はこの昔の戀人に逢つた爲めに、暗く冷くなつてしまつ

たやうだ。夫も冷い石のやうだ。夫の家に室毎に自分を咀ふやうな目が見張つて居る…子供…それよりも、この男は今去つて行く…。

處に車掌が後の方から列車の戸を閉めて來た。

お貞は

「後に下つて下さい。」と言つて、身體を押しのけられた。發車の相圖の笛が鳴つた。

女には男が窓に肱をかけて笑ひながら、「さよなら!」と言つた顏がぽつと見えた。黑く太い眉と、大きい口と、煙草て黑く染つた齒と…それが幻のやうに見えたと思ふと、列車は動き出して居た。

お貞は驚いて、男の窓にそつて早足に歩いた。そして無意識に

「歸りにもね。待つて居ますよ。」と言ふと、男は

「あ、子供を大事にお育て…。僕はこれから北海道の雪の中て、二月暮すんだ。歸るのはもう春になつてからだよ。」と言つた。その調子が如何にも勇んて居る。お貞は思はず淚が浮んだ。

「何より子供をよくお育て……大事にして立派な子におしよ」

男は重ねて言つた。女は心が搔き廻されるやうになつた。列車は速力が增して來た。三四間それを追つて歩いたが、男の乘つて居る窓はずつと離れてしまつた。

と、敏夫はずつと顏を出して

「さよなら!。博太郞さんにも宜敷。豐ちやんにもよろしく!」と言つた。そして笑つた。その顏がぽ

いと木の中で見えるやうで、お貞は堅く唇を結んだ儘、そこに立止まつた。その儘、そこで僅に身を屈めた。

二

敏夫は列車が通り過ぎる時、停車場の時計が十二時を十五分過ぎて居るのを見た。

「あゝ、愈々出た！」と思ひながら、ベンチに身體を落ち付けると氣がゆつたりとして、茫然と窓の外に轉つて行く町を見た。軒の低い、黑く煙つた汚い町が見えて居る。彼は却つて放心したやうになつた。たゞ何處か胸の底に、微かに哀しい感が蟠つて居るやうで、身體に始終冷い水がかゝつて居るやうだ。

それでも、胸の中で限りなく樣々の感情が相剋して居た、眞暗な中から逃げ出して來たやうで、斯う一人で居るとほつとした心持になる。その中に汽車は町はづれに出た。

杉や檜が處々立つて、生垣のずつと續いた、町端れの士族町が見えた。と、彼の胸にはやはりそれによく似た通りにあつたお貞の家を一寸思ひ浮べた。が、その時には汽車は町外の小さい雜木の立つた丘の間に來て居た。やがて丘の間を出て廣い田がずつと連つて居る處に出た。

田はすつかり刈られて、稻の株がずつと一樣に續いて居る。細い流れない水がその間の處々に見える。その偏平な廣い景色の上に日がぽつと薄く當つて、寒さうに廣々として居る。敏夫はその景色を

ると胸がわくわくして來た。笑ひ藥でも飲まされたやうに、何か心が刺撃されて踊り跳ねたい。……て、窓から外の景色をキヨロキヨロ見た。そして落ち付かぬやうに、立つて窓から首を出したり、坐つて見たりした。

その中に疲れたやうになつて、彼は腰を掛けた。すると目が自然と黒いボアをかけた女の處に行つた。彼はまぢまぢとその女を見た。

車の中で、一人で乘つて居るのは、敏夫とこの女と二人限りだつた。女は夫婦連と並んで此方向いて腰を掛けて居る。二列になつて向ひ合つて居るベンチの彼方と此方とで、敏夫の目はその女を離れなかつた。女は始終神經が慄えて居るやうな。鋭い目をして車の中には氣も懸けないと言つたやうに、正面を見て居る。彼は暫くその目から頰の處を見て居た。目が薄く隈取つて黑く、頰がいた〳〵しいやうに骨立つて居る……

「コンサンプションか……」と口の中で呟いた。この女がもう人間の若い水々しい快樂を奪はれてしまつたやうに思はれた。ボアや、マッフで外から防がねば、血の少い身體はすぐ凍つてしまふのだらう。と、こんな事を思つて行く中に、彼は…………

……………思はず醉はされるやうにその想像を續けて行く。

彼はその初めには恐ろしくも何ともなかつた。罪惡とも不道德とも思はなかつた。一度もお貞の夫の顏が彼の目を遮つた事は無かつた。敏夫は一週間ばかりの前の夜、深更にS——市の停車場に降りた。

今度、後志の某鑛山から捲きの山の視察を委托されて出て來たその途中で、先づこのS――市で二三日滯在して行く事にした。此處でもその干係した仕事で、少し見て置く必要があつた……それで汽車を降りると、兼ねて定めて居たK――屋に宿を取つた。で、次の朝目を覺すと、ふと友人の妹のお貞がこゝの縣廳の事務官に嫁いて居る事を思ひ出した。

「オ！、お貞さんが此處に居る筈だつたけナ。」と獨りで思つた時には彼は思は幻のやうに古い戀が胸に浮んだ。

その時に目に見えた、女の顔は美しかつた。小作りで、髮の濃い……それにものを言ふ時に唇を少し曲げるやうにする、その癖が一番に胸に浮んだ。そして二三年前に二人の間にあつた干係を思ひ出すと、

「逢つて見よう……」と何となく思つた。如何なそぶりをするか……それが見度くなつた。

て、電話帳を借りて、井口博太郎と言ふ名を捜した。それを見付けると、ノートに書き取つた。

その夕方敏夫は町の有名な呉服屋の商品切手を作らせると、主人が在宅らしい時を計つて、××町のその家に車を乘り付けた。玄關に立つと、取り次ぎに出た下女に

「奥さんはお在宅ですか？」と訊いて名刺を渡した。そして笑ひながら、女が出て來るのを待つた。

「あの時の女の驚いた顔！」と彼は自分の想像につられて、思はず笑はうとした。

その時、ふと、その女の夫の顔が目に浮んだ。何處か學者らしい、皺の多い顔で、眼鏡の奥で始終眠

つて居るやうな目付きをして居た。……彼はそれを外らすやうにして、その次の夜夫が宴會があつて遲くなるからと言つて、お貞が一人で宿屋に訪ねて來た……その時の事が浮んだ。

彼はその時に、昔の……心覺えのあるその女の香を嗅いだ。旅舍の一室の中には、電燈の光がたゞ明く何處かしんとして照らして居る。彼は自由に心を廣げて居られる室の中で、昔の女の香が漂つて來るのを嗅いだのだ。女が久し振りだと言つて、何處かに隔を置きながら、話すのを聞いて居ると彼の心には昔の事が頻りと思ひ出される。よく女から手紙が來て逢ひびきをした……

と思つて行く中に、彼は窓についた肱に身をもたせかけた儘、とろつと眠り入つた。暫くして、ふつと誰かの話が耳に入つたので目を覺した。汽車は山の登りにかゝつて居た。

重い、苦しい疲れた身體をぐつと引き起されたやうだ。彼はぢつと下唇を強く嚙んだ。目が覺めると同時に、何とも名付けられないやうな哀愁が胸を襲つて來た。

彼はそれに反抗して、心を靜めようと、暫く目を閉つて見たが、やがて、やるせが無いやうな顏をしてそしてガラスに顏を凭せ掛けた。そしてやり場のない目で外の景色を見た。

外には枯れ草や、落葉した雜木の立つた、小山が、重り重りして居た。その土が灰白色で、それがさも力の無い色をして見えた。彼はそれを見ながら罪の恐ろしさ……自分がお貞が口實をこさへては、訪ねて來るのを迎へながら、心の中でその夫を嘲つて居た。その自分の心が犯した罪が、恐ろしく悲しい。

と、山の陰に來て、一團の雪が見えた。

「雪か？」と言つた。それから次ぎ〳〵と、沼に張つて居る厚い氷や、消え殘つた雪が見えると、北海道の雪に埋つた景色が見えて來た。

三

列車はその山の中の、M——停車場に着いた。ポアの夫人も、それに並んだ夫婦連れも車から出た。敏夫はこの山の中の停車場で、如何な生涯を送つたとも分らない人が降りて行くのを、淋しさうに見送つた。そして急に人が少くなつた車のなかを見廻はした。

「敏夫さん、私もうこの先きの事は何にも考へない！」と言つた女の聲が、ふと耳に聞えた。汽車の動く音に耳が馴れると、闇の中に座つて居るやうに思ふ事が頭に集中して來る。女の身體が激動した感情の爲めに慄えて居た。泣きじやくりをして居ながら、自然と彼の顏を見て笑つた。……ふと又、女がよく自分の一身を捧げたとか、私がこれ程に思つてるのにとか、よくその愛情を押し付けようとした、昔の事を思ひ出した。て、

「その癖、結婚して子供まで生んだ。」と思ふと、女は卑しいものだと思ふ……

が、暫くすると彼は嫌な幻を振りすてるやうに、目をはつきり見開いて、急に立ち上つた。そして何

もかも忘れようと思つて、一寸窓の外の景色を見た。座を改めて、腰をかけると手提げの中から持つて來た書を出して開いた。が、字が順序よく目に入つては來なかつた。やがて烟草に火をつけた。停車場が二つ過ぎた。山を出ると林に入り。林を出ると山に入りして行くに從つて、雪が多くなる。彼は疾走して居る汽車に搖られながら、淋しい心持に包まれたやうになつて茫然として居た。

山を離れた。すると目の前には廣々と凍つてその上に雪が積つて居る湖水が見えた。湖水の周圍はすつかり雪だ。

「雪だ！」と言つて、悲しさうにそれを見た。湖心の處はもう氷が解けて、青い水が波を打つて居る。

汽車はその湖に沿つた停車場に止つた。

凍るやうな心持をしながら、彼はその湖水を見て居た。遠い方に處々黑い鳥が飛んで居る。その鳥を見ながら彼は

「おれも北海道で死んぢまふかもしれない。」と言つた。

汽車はその停車場を離れて、平野の中を走つて行く。周圍の自然とこれ迄通つて來た何里かの山を境にして明かに變つて居るらしい。遠い方には、雪がまつ白に積んで居る高い山が聳えて居る。その間の野は廣い……が、それは皆雪に埋れる居る。

寒さも加はつた。スチームの代りに型ばかりに置いてある湯たんぽでは、車の中に少しも溫味が傳つ

て來ない。

第七の停車場に着いた。こゝはこの廣い雪の野の中の北側に向いた小さい停車場だ。雪除に高く木を組んで、蓆で壁が作つてあつた。こゝでは前の車から、どや〳〵と七八人連れの百姓が降りた。その顏を見ながら、この雪の中の生活を想像すると、彼には人間と言ふものを高い値をつけて見る事が出來なかつた。

「たゞ死んで行く……木の葉が落ちて泥の中に腐つて行くやうに。」とばかり思はれた。汽車が動く時に見ると、この小さな停車場の時計に、斜の日がさして、三時二分過ぎて居た。

「それが何だ！」と、彼は自分に言つた。又ふつとお貞の顏を思ひ出したので、思はず身體がぞつとした。

あの始めて、井口博太郎の顏を見た時——始めてお貞を訪ねて行つた時に出て來たのを見た時に、「おれの女を横取りした奴はこの男か。」と、その少し青黒い顏を見た。お貞の戀も夢も、この男の前で終りを告げたのかと思ふと、口の邊にかすかな冷笑が浮んだ。その時に彼は樣々の事を話しながら、ふと

「や、お貞さんも立派な奥さんにお成りてしたね。」と言つて女を尻目にかけてやつた。

「何て嫌な心だ！」と彼は又自分を罵つた。彼は自分が淺ましくつて淺ましくつて、身の置き處がなく思はれる。

と、初から同じ車に居た二人の老人が、話にも飽きたかして、ぼんやりして居たが、敏夫が――髮を美しく意氣な分け方をして、大きな外套にくるまつた、青年が書の同じペーヂを開けた儘、ぢつと身體を堅くして居るのを見ると、不思議さうにぢろ〳〵見て居たが首をさし出して、

「何てすね？それが横文字かね。」と聞いた。

「エ？」敏夫は面白味も無いと言つた樣子でそれを見返したが、默つて書を閉ぢた。

「何方にお出てか？」と老人は又聞いた。

「北海道まてですがね。」彼はそつけなく答へた。

「それは〳〵……」

「……………」

暫くすると、敏夫はふと

「あの日――町と言ふのを御存知ですか？」と聞いた。

「ハア。私の居る町てす。そこにお出てすか？」

「え、そこて一寸友人に逢つて行きたいので……宿屋は何と言ふのがいゝんてす？」

「吉野屋かな……」

敏夫は一寸うなづいた。と、汽車が小山の裾を廻つて、又廣い雪の野に出た。窓から東の方に鉛を鎔したやうな水が雪の中に横はつて流れて居た。

「何てすか？」と言つて敏夫は老人を振り向いた。

「ハア、K——河てす。」

「K——河……あの有名な。」と彼は驚いて見た。暗い灰色を含んだ水の流が、雪の廣々とした野の中に蜒りながら横はつて居る。その岸から野にかけて落葉した白楊が林のやうに立つて居た……

四

H——町て降りて、敏夫は車をその吉野屋に走らせた。時にはもう日が暮れて居た。

吉野屋は町通りから少し入つた裏だつた。田舍町風の宿屋の門で車を降りると、ヒステリーらしい痩せた年增の女主人に迎へられた。て靴を脱いで上りながら

「あゝ、あの恐しい記憶のある家から、今夜はこんな家に來て泊るのか！」と思つた。

友人は一日掛けて出て居て、家には居なかつた。

て、その晩は彼は獨、爐傍に座つて居てたゞはてしも無く襲ひかゝつて來る寂しさを感じて居た。心に負つて居る樣々なものがある……

幾度も吐息をして見た。が、ふと、せめてお貞でもがこゝに來てくれゝばと思つた。今迄夜には必ず女が訪ねて來てくれた‥‥

て、思ひ出して、お貞に手紙を書き出した。すると自分のこの心が、襤褸のやうだ。

「汚い！。汚い！‥‥」と自分を咀つた。でもう神樣に向ふやうに自分の罪を懺悔して、お貞に夫を思へと書いて行つたが、遂々筆を投げてしまつた。

「いやだ！。おれは自分の仕た事が何であらうとも、人に頭下げて膝をついて行くなんて事はしないに自分の罪は自分で咀ふ。」と思つてぢつと手紙を見詰めて居た。

が、終にはつくづく、お貞の顏を思ひ浮べて

「淫婦！」と言つた。と、涙が止められなく出て來た。彼は手を力なく垂れた儘、目を閉つて居た。

（完）

和歌

尾上柴舟選

○ 本間清

海をみし堪へがたかりしあはれまたしづかなりける果敢なごこちに

いちはつの濃むらさきかななつかしきわが初なつを花はよそひぬ

魚のはら白くあさまし柳ちる河岸の市場に秋はるるあさ

海のいろひとみをすぎて夏山の草らそよぐに戰かれける

晝さびし草に眼をふせうつくしう涼しき秋に入るおもひかな

○ 坂梨葉村

青き靄錆びたる空に日は逼ひぬ君を待ちつゝあればこの日も

霧這へる窓の入日を眺むるにことさらけふはやすかりしかな

さびしさは烏瓜咲くうつろ木に霧にひみつるごとき山の日

憤水の青きひとすじ夕暮の闇にひらめく憂きこゝろかな

雪に似る雲の一ひら野平のかなたに浮び冬は來にけり

時と云ふ大まがものが作りたる黑き瞳の美くしきかな

野のをちの千草のつゆに日をふみて始めて君と相見しものを

○ 山村龍子

歎きつつ別れて此處に來つる我れこのはからざる幸に逢ふ

春の夜はほのに明みぬこの今ぞ世界は圓きものてふを識る

よく走る我れの心よ日に幾度百里をちなる君を連れ來し

長椅子にかかりたる時しみ〲と一人なる身の淋しみを知る

○ 小島ますこ

行く所水としいへはよろこへる人とありきぬ山
城の秋
忘れざる葛の葉踏みてさかのぼる保津川べりの
夕暮の雨
あゝかくて過ぎ行くことか思ふ事語るといふも
まれ〳〵にして
比叡だひらを薄しろしいつしかと京も琵琶湖も
暮れまどふ頃
灯呼ばんもためらはれぬる靜けさよ鐘の名殘の
音長うして

○ 堀 露 洋

ものうき夜姉が物縫ふ針の手を機械のごとく見
てありしかな
いさゝかのいさかいごとにわが母をのゝしりし
後のさびしきこゝろ
君と居て倦みぬ勞れぬ爭ひぬよろこびもしぬ秋
の一日を
神よ神よわがよこしまの行をいちいち罪し悔ゆ
る日給へ

○ 森 園 天 涙

ものおもへばいよ〳〵かなしこのまゝに一人死
にゆくものの如くに
あかつきの磯松林月かけのうするゝ中に立つ愁
かな
眼を閉ぢて靜にありぬ起り來るかなしみどもの
あまり多きに
何事もわがいふまゝになりけるが君かなしさに
多くそむかす
海暗しほのかに白く見ゆる夜に比すればこゝろ
やゝ安きかな
一片の淡き雲さへ浮ばざる蒼空のごとわれはさ
びしき

○ 小 澤 紫 紘

にび色に草枯れはてし總の野はわが心をば誘ふ
ものなし
月光の纖きにあはれうち顫ふ木の葉と我れと何
れ淋しき
風白き總の大野の遠方に月波さやけく野はあけ
にけり
春の朝柳ぬらして小雨するしめやかさをばなつ
かしむかな

石だゝみその冷たさの足先に泌み入るあさの靜
やかさかな(香取神宮にて)

○　尾張十穗

毒盃にあらずや醉のしばらくは君が性など惡し
ざまに云ふ

黒う立つ油煙をすかし衰ろへし男かすかに何ご
とか云ふ

綿かたき蒲團の絲をよじりては君を思ひぬつれ
〴〵のまゝ

もる雨は亞鉛の桶のそこたゝきをさな馴染の豆
太皷めく

小旗ふり喜戯する兒等にまじらひて少女も肩を
そびやかし居ぬ

○　本間五丈原

街屋かげふところ手してゆく人をもののあはれ
に數へけるかな

心いましづかに夜のものを見て若さ消ゆらしか
く思ふかな

南風にふかれてあればわが髮のかをりなびきぬ
白日もと

○　天野謙二郎

うす曇るみ空の下に灰色の瓦ならべて街うめき
ゐぬ

鷗などとびかふさまを心なく見てもありけり君
まつあひだ

窓硝子あをきおもてに春雨の雫ながれてたそが
れにけり

薄月はかすかに杜に落ちはてぬ君とわれとはと
もにかたらず

杜の香ぞ身に滲む夕べさ靑なる影をおとして鷺
わたるかな

しめやかにくれてゆく日のやちまたにつどへる
人のむれをわれみる

○　橋本義雄

よわき子になぞ生れ來しいさゝかの空事聞くも
泣かれぬる哉

玉霰すこしく降れば雪降ると謎らしく云ひ君は
歸りぬ

けしき程媚の笑ひをたゝへつゝ一日二日はうち
過にけり

○　志賀紫宵

さゑさゑと月は照るなり小草よる風もなき夜の

物たらぬかな

わずかなる雨のたまりに曉のはれたる空の光うつりぬ

遙るかなる空へ憂ののがれゆく如き心地にあさの戸をくる

はてしなき空ヶ流るゝ雲の群しづかにわれをかへり見てゆく

○ 橋口暮山

風の樹に悲しきこゑをたてぬれば別れがたかり君が眼を見る

風の音しづかに空にうすれゆく林のなかにわれぞ憂ふる

ゆふぐれの月ほの白し悲しみに深く落ちたるひとみあぐれば

○ 指田白緑

灯影さす方を選り選りゆきたりき寄りどころなきさすらひの子は

たゞ一人街を歩めばゆふぐれの有り無しの風身にはしみぬる

灯は淡くともりいてたり戀しくも哀しくもある君すむ街よ

○ 鈴木鳴象

十日程別れてあれば我か病重ると君へ僞りも云ふ

鉢叩去りて時雨るゝ下京の妹が垣根の山茶花のはな

海見ゆる丘にし立てばふるさとの樂の音響きばらの香ぞする

○ 大谷冷果

幸もなき路傍の石の冷めたさにいさゝか似たる心われもつ

あな悲しと思ふ刹那の安らけき思ひの中に今日も尚生く

悲しみのありてえらるゝよろこびを悲しきときはひたに思ひぬ

○ 山路徑川

死の國をまぼろしに見る心地してあらゝぎの上黒き雲とぶ

草蓬丈のたかきにふしまろび青の空見るあはきかなしみ

青海を帆ゆき帆はしり帆かくれて秋の日の窓となく暮るゝ

わが涙この大海にそゝげども何ごともなしあきたらぬかな

○　飛川晶轡

停車場の待合室の片隅におもひたたずむ夜の悲しみ

出てゝゆく夜の列車の赤き灯を見おくりしばし物を思ひぬ

ものの本原稿紙など散らばれる中に寢そべり君に文書く

この戀をおもひ捨つれば明日よりは世の凡人となるが悲しき

○　岩崎雨洋

日はけふも空にかゝれりものうげに町ゆき來する人をてらして

眼を耳をとざしてけふもありしかど悲しみはなほ胸をさらざり

ひとり來てひとり唄ひぬ夕なぎの沈默の海に日の沈む頃

○　尾崎渡水

枯れ果てし丘の芝生にねころびて暮れゆく町と海を眺むる

月光は木の葉をもれて肩に落つ林の中を獨り步めば

○　月森紳來

淋しげに山繭などの二つ三つ梢に殘る秋木立かな

花はただ眺むるがよし女等はただ美しと見てあるがよし

○　川奈部琴風

湖に山は抱かれ安らけき心地に今日も暮れそめてける

午後の日の唐人笛の音を聞けばかなしくなりぬあゝ幼き日

○　上野良英

乞食そをことにあはれと思はねど人のゐしかば錢呉れて見ぬ

面白うひろがりて行く夢の國ふと縱斷す電車のひゞき

○　小河原素山

これぞこの吾が生來の性ならむ涙はてき三日四日かな

やうやくに穢れき心つゝみ得て世に生くるてふ

さびしき誇りよ

○

あけぼのゝ川ほの白み星あまた流れぬと見る白梅の花　駒居旭洋

○

かなしみを償ひがたみ灯にそむき風にそむきて走る巷よ　玉木松郎

歌稿は總て東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛の事

俳句

大根　高田蝶衣選

味噌汁の濃厚を思ふ大根汁　風水
瘠地云ふ汁の大根の苦味かな　同
獵談を漁論を大根汁旨し　同
さして來しを宿の喪中や大根汁　同
太腹の細首大根男かな　回
關中の一國富める大根かな　へき生
霜あれを云ふ狩人や大根汁　同
神農を祀る小村の大根かな　同
貧中に二百干したる大根かな　同
大根の太りもおびく亥の子風　不騷
鍬授與や殊に褒奬す大根主　同
はらの兒の動くやなとゝ大根汁　同
大根主譽められ好きの遣り好きよ　同
大根晴れ山ふところの霧の波　夢笠

大根引くや古城も程の眺望に　同
大根引くや畔木の落葉踊る　同
新倉を祀るに飾る大根かな　翠雲
老農の德化あまねき大根かな　同
拾ひ子の育ちて戸主や干大根　同
遠耳の時に近耳大根煮る　春呂
蕪賣らん期を妻言ふや大根引　同
釘打たん大根盗みし足跡に　同
大根賣るも機代金のたそく哉　人生
日一日盃も取らざり煮る大根　同
過ぎ鰒も在所うれしと大根漬　同
大根煮るや僧も與かる村評議　蛙念子
茶に語る猿化爲人や大根漬　同
墓一基たゝるといふや大根畑　叱竹
大根引くや帆の影寒き河原畑　同
大根ひたす湧井月寒う水の聲　風來子
穀藏の鼠穴補ふ大根秋　同
板の間に大根寒し夜機の灯　春溪
落窪や牛飼ふ家の大根藏　同
三つ股は數なきものや大根引　順風郎
向ゆすり前ゆすり引く大根かな　同

大根食はぬ日とては無しと里便り　水馬
退隱や小規摸に大根等作る　同
山仕事終へて日高し大根引　忠多庵
大根を引くや東海の模範村　同
秀才も學ばざるにや大根賣り　幽堂
蚯蚓掘る豚も歩むや大根引　同
灸師坊に來宿の觸れや大根引　明兮
厨裡又た大根添ふるも胃剤とて　同
大根引くや女馬子嫁ぎの謠寒に　巨剪王
大根村副業の事も廻文に　同
神代よりか種傳ふ島の大根かな　倨人
わが庵の尿に易へし大根かな　同
寄食して法話も聞きつ大根煮る　釜洋
大根引けば句を知れば風呂吹もせん　同
鍬納むれば農に餘事なし大根干す　虎鳴
大根干す日和東家の二夫婦　同
書によつて大根つくる主かな　姑洗
大根干す古繩されし夜雨の音　同
大根の尻に屆かぬ地熱かな　耳山
土間臼に投げかけ長き大根かな　同
大根引くや山火事の煙流れけり　易川

さびしき誇りよ

○

あけぼのゝ川ほの白み星あまた流れぬと見る白梅の花　　駒居旭洋

○

かなしみを償ひがたみ灯にそむき風にそむきて走る巷よ　　玉木松郎

歌稿は總て東京小石川區原町一三三尾上柴舟宛の事

俳句

大根

高田蝶衣選

味噌汁の濃厚を思ふ大根汁　　風水

瘠地云ふ汁の大根の苦味かな　　同

獵談を漁論を大根汁旨し　　同

さして來しを宿の喪中や大根汁　　同

太腹の細首大根男かな　　回

關中の一國富める大根かな　　へき生

霜あれを云ふ狩人や大根汁　　同

神農を祀る小村の大根かな　　同

貧中に二百干したる大根かな　　同

大根の太りもおびく亥の子風　　不騒

鍬授與や殊に褒奬す大根主　　同

はらの兒の動くやなとゝ大根汁　　同

大根主譽められ好きの遣り好きよ　　同

大根晴れ山ふところの霧の波　　夢笙

大根引くや古城も程の眺望に　同
大根引くや畔木の落葉掻る　同
新倉を祀るに飾る大根かな　翠雲
老農の德化あまねき大根かな　同
拾ひ子の育ちて戸主や干大根　同
遠耳の時に近耳大根煮る　春呂
蕪賣らん期を妻言ふや大根引　同
釘打たん大根盜みし足跡に　同
大根賣るも機代金のたそく哉　人生
日一日蓋も取らざり煮る大根　同
過ぎ鹽も在所うれしと大根漬　同
大根煮るや僧も與かる村評議　蛙念子
茶に語る猿化爲人や大根漬　同
墓一基たゝるといふや大根畑　叱竹
大根引くや帆の影寒き河原畑　同
大根ひたす湧井月寒う水の聲　風來子
穀藏の鼠穴補ふ大根秋　同
板の間に大根寒し夜機の灯　春溪
落窪や牛飼ふ家の大根藏　同
三つ股は數なきものや大根引　順風郎
向ゆすり前ゆすり引く大根かな　同

大根食はぬ日とては無しと里便り　水馬
退隱や小規摸に大根等作る　同
山仕事終へて日高し大根引　忠多庵
大根を引くや東海の模範村　同
秀才も學ばざるにや大根賣り　幽堂
蚯蚓掘る豚も歩むや大根引　同
灸師坊に來宿の觸れや大根引　明兮
厨裡又た大根添ふるも胃劑とて　同
大根引くや女馬子嫁ぎの謠(ウタ)寒に　巨剪王
大根村副業の事も廻文に　同
神代よりか種傳ふ島の大根かな　倨人
わが庵の尿に易へし大根かな　同
寄食して法話も聞きつ大根煮る　釜洋
大根引けば句を知れば風呂吹もせん　同
鍬納むれば農に餘事なし大根干す　虎鳴
大根干す日和東家の二夫婦　同
書によつて大根つくる主かな　姑洗
大根干す古繩きれし夜雨の音　同
大根の尻に屆かぬ地熱かな　耳山
土間臼に投げかけ長き大根かな　同
大根引くや山火事の煙流れけり　易[illegible]

大根畑に道ある島や宮も見えて　同
綺羅血統の家の大根やきめもよし　痩骨
伊丹樽買うて大根漬けにけり　同
菜園日記に句あり黄大根赤大根　猿子
(還俗)寺聲聞けば導師思ひつ大根引　同
同役過ぎて遊ぶが如き大根引　鳴子
法の舌に辛辣の香やすり大根　麥門冬
干大根繩抜けするも日數かな　鶴人
飯の火や大根きざめど心せる　曉鐘樓
狩の詩など草す博士や大根汁　翠風
鴉なければ雨降るといふに大根引く　痩脚
暇時の出茶屋女や干大根　哲郎
大根引く農事納めや志學の子　曉川
輔佐の身も燒大根に歸依しけり　託子
胸やけに嚙む大根の辛さかな　保赤
油斷遂に雪下となりし大根かな　翠雨
師我れを笑ひ大根に比喩しけり　唐辛子
雨がちに枇杷島寒し大根秋　美川
月光は水勢にあり大根洗ふ　榴柄子
大根引の一吼響く山居かな　刀楊子
奇語偶然皆手休めぬ大根引　柳洲

大根や此里嫁せば齒を染むる　夢吊
串柿は甕にかこひぬ大根干す　萩泉
一偈得て引けば折れたる大根かな　皷醉
逸樂の夢さめし人や大根引　蕉雪
大根洗ふ童子の唄も手の冷に　花鵬
門跡に喜捨し大根百駄賣る　柿紅葉
城南の野莊大根の肥りかな　弓里
年あたゝかく室大根の骨硬き　竹茶
大根室野鼠冬を籠りけり　馬餞子
落つる日に早土凍てぬ大根引　琴星
納屋と見しが人住む樣や干大根　不寝庵
吊大根四圍藁垣の小家かな　江洲
鑛山の不首尾嘆や大根汁　綠童
梵妻に笑啞ありけり大根汁　十八公
磊落の詩思大根に逢着す　青雉
おほゐ洗ふ音も江添の月の宿　渡水
大根干さん軒に梯子や雁仰ぐ　涼眉
書を措くや大根嚙む徒弟來るを叱す　慘冬

前々號正誤

春待つや●斃入る丶干割れ臼●　都之
齒藥の雞肋も古りぬ春を待つ　十二峯

募集課題　寒食　二月十五日締切
　　　　　朧（本題に限り五十句以下）　三月十五日締切

規定

一、應募句は淡路國假屋在釜口高田蝶衣宛郵送の事
一、一人三十句以內、用紙は半紙、「中央公論俳句」と明記の事

寒さ

蝶衣

婦寒し瓢の米に爪じるし
野ら猫の內井に落ちし寒さかな
失言を書て詫び來たる寒さかな
のけざまの鏡魔のさす夜寒し
米の爲めに奔走す弊履寒さかな
過去の我にあこがるゝや對酒寒し
說敎の論空虛なる寒さかな
袖ふかく笏ひつ込めて寒さかな
晝寒し短檠の灯に物を煮る
皿割りて婢の秘めおきし寒さかな
雁回山飛雲も過ぎず寒さかな
鄰壁を罵る文辭寒さかな
懸君の穢多と知れたる寒さかな
灯盞を大池と觀ず寒さかな
釜切りを誓ひしが刀の寒さかな
落暉玻璃に風樹の動く影寒し
金(カナ)の杓に水汲ふ甕の音寒し
女汚れ弓折れし試射寒殺す
もとあがり良しと杜氏いふ寒さ哉
召捕の一ト騷過ぎて門寒し

評論

米國外交の失敗

露國政府は米國に對して、其の提議せる滿洲鐵道中立案に同意すると能はざる旨、公然通牒するに決したりといふ、日本政府も亦一月十六日を以て、山縣、井上の兩元老、桂、小村の兩大臣と會合して略々其の方針を決し、更に十八日夜外務大臣官邸に於ける大臣協議會を以て、略々露國と同一趣旨の回答を爲すに決したりと聞く

茲に於てか米國の外交は、正さしく失敗に歸せる也、米國の當局中には、此の提議假令成立せざるも、日露兩國をして滿洲に於て守成的態度を取らしむるに至らんと明白なりとて、私に滿悦を表すといへり、斯くして滿悦せば甚だ芽出度と謂べきのみ

米國内政の失敗

米國前大統領ルーズヴェルト氏は、吾人の曾て擧げたりしが如く、山林を治むるの必要を切論し、其の國會に與へたる教書中に、清國洪水の慘狀を詳論し、之に挿入するに其の洪水の寫眞を以てしたるとあり、山林整理のため竟にプリンショット氏を森林局長に任用して、頗ぶる治蹟を擧げしめたりしが、今や氏が少しく内務卿に反抗の態度を執りしとて、現大統領タフト氏は、直ちに氏を罷免したるより、レパブリカン黨中の前大統領派は、頗ぶる之を非難し、殆んど黨中に分裂を生ぜんとするに至れり

但だタフト氏が黨中の非幹部派を慰諭したるため、幸ひに分裂を防止し得たりと雖も、タフト氏の鼎の輕

重は頗ぶる分明したるが如し、タフト氏が竟にルーズヴエルト氏の偉に非ざるとは、米國の多く一致する所らしく、吾人は彼の外交失敗と一對に、之を内政の失敗と稱せんと欲す

統監の改革案

韓國統監曾禰子一月九日を以て歸京せり、世或は統監病のために辭せんといふも、恐らくば事實ならざるべし

統監府に於ける石塚長官の非難、及び各次官の軋轢の如き苦々しき狀勢を一變し、且つ十三道の地方政治を改革するの意見は、曾禰子之を齎し歸りて、今正に桂首相等と協議中なるが如し

日韓合邦問題の起るや、統監は確かに機宜の一着を過れるが如し、一進會の合邦論を一喝する能はず、又李完用一派の排日運動を叱咤する能はず、各々其の欲するまゝを爲さしめて、統監の威信頗ぶる減ずるや、却つて多少の改革案を提げ來つてお茶を濁さんとす、改革案必らずしも非ならざるべし、然かも之を以て統監の能事畢れりとするは、吾人容易に與する能はず

韓國內閣潰へん

韓國の自稱志士李在明なるもの、十二月廿六日を以て京城に韓國首相李完用氏を刺し、氏は一時出血のため絕息せるも幾くならずして蘇生したり、伊藤公の哈爾賓に殪れしは十月廿六日にして、恰かも二箇月を相隔つ、李氏は、瘡痍幸ひにして癒ゆと雖も、刺客の一擊に膽落ち氣沮したれば、再び當年の怪腕を揮ひ得ざるべしと傳ふ、李氏已に然り、他の碌々者流の如き知るべきのみ

斯くして韓國の閣臣等屛息して恰かも氣死せるが如し、是れ寧ろ曾禰統監に取て意外の幸ひならざらんや、然りと雖も是れ我が威信の大に韓國君臣に及べる結果のみ、吾人は之を以て我が國のために祝す

關東都督の更迭

關東都督大島大將其の意見の行はれざるを理由として辭表を提出せり、政府は衞戍總督川村大將をして其の後任を兼攝せしむるに内定したりとか、果して然らば、是れ民政長官白仁氏をして事實都督たらしむる也、否、都督府の縮少也、吾人は政府が何故に百尺竿頭一歩を進めて之を全廢せざるかを怪む

諸税整理關税改正

政府は一月十七日に衆議院に營業税、通行税、所得税及び地租條例の諸改正案を提出し、十九日に關税改正案を提出したり

前者は所謂税制整理也、甚だ姑息なりといへども、爲すは全く爲さゞるに優されり、但だ地租輕減論の聲甚だ高き時、此の改正が悉く行はるゝや否や疑ふべきのみ

關税改正は、概して異論なき所なるべし、吾人は唯だ兩院が眞の眼を開きて根柢より其の眞利害を討究せんことを望む

地租輕減運動

米價の思ひの外なる下落は、地主をして少からず恐慌せしめたり、彼等は怜悧なる政黨の煽動により、若くば恐慌の餘り例の運動手段に出でゝ、幾百人幾千人の連署を以て、所在に地租輕減の請願を提出す

而して各政黨々派皆地租輕減論を唱ふるに後れざらんことを恐るゝ色あり、彼の大同派すら、時機と税率とを問題とすと唱へて、同じく輕減贊成の旗を飜へし、而して政友會中の各派及び院外者等は、必らず一歩以上を減少せんことを決議して、益々國民、否地主の意を迎へんとす

然れども四十三年度より地租輕減實行せらるべき乎、抑も又一歩減行はるゝ乎、五厘減行はるゝ乎、事總て政友會と政府との妥協に由て決すべし、多くの觀察は、四十三年度より五厘減行はるべしといふに一致

ず、吾人も亦斯く推定せんと欲す

各銀行の利下

日本銀行は一月十一日より貸附日歩二厘を減じ、市中の大銀行また悉く預金利子を引下げたり、然れども事業は依然として未だ興らず、其の興るは蓋し三月以後か

炭坑業者の大トラスト

九州の炭坑者三井三菱を始め貝島安川の徒主となり、北海道の北海炭坑、満鐵の撫順炭坑等を糾合して、一大トラストを組織せんとすといふ、蓋し九州の炭抗は總て一千尺以上の深度に於て採掘し、其の費用漸く増加するも、炭價の騰貴之に伴はずして、坑主の利益漸次低減の傾向あり、故にトラストを組織して以て炭價を引上げんと欲する也

吾人は敢て之に反對す、我が國の炭價法外に高きがために、東海道筋の工業の如き、往々休業又は業務縮少を爲さゞるを得ざりしとあり、此の時に方つて、撫順炭の如き良炭を廉價にて輸入し、以て炭價の騰貴を緩ぐは、工業の發達上極めて必要なりとせざる可らず、トラストは單に坑主を利して多數者を苦むるものなれば也

政界の一怪聞

海南鐵道の併行線とも目すべき坂堺電鐵の認可せられしに就て、我が政治界は又々鼻を蔽ふべき臭聞を傳へ來れり

前期議會に政府が郵船補助金を減ずるの提案を爲すや、政友會の一部にては會社の請托を容れて、政府案より多くの補助金を與へんと欲し、密かに運動する所あり、元田肇氏極力之を排し、竟に政府案を成立せしめたるも、然かも尙ほ何等かの利益を與へざれば物情を鎭す可らず、茲に於てか坂堺電鐵に注目し、一日從容として遞相後藤男に許否如何と問ふ、男答ふるに必らずしも許さゞるに非ざるを以てす、元田氏以下乃ち

起て大に奔走す

坂堺電鐵が出願するもの曾て二十餘會社あり、前内相原氏將さに孰れかへ許さんとするや、政友會の某策士は、輕々しく之を決定して却つて世の非難を招くを不利とし勸むるに寧ろ地方廳に一任するの可なる所以を以てしたりき、而して原氏竟に斷ずる能はざりき、今や後藤男は或る條件の下に之を認可すべしと唱へ、内務省は大阪府知事を透して、大坂堺の兩市會に諮問せしめたり、兩市會豈反對せんや政府は即ち出願の二十餘會社に内諭せしめ、將さに特許命令を下附するに決し、元田以下の政友會員等は、雀躍して早くも祝宴を催ふすに至れり

此の報を聞て駭きしは海南鐵道也、此の併行線出て、最も肝腎なる大坂堺間の乘客を電車に奪はれば、鐵道は到底自立し能はずと爲し、重役某萬金を懷にして上京し、密かに官民間に奔走せるも、容易に奏効せざるや、後藤男を抑ゆるは杉山茂丸氏なりとし、之を叩きて請ふ所あり、氏之を諾し、一日首相桂侯を訪ひ、突如として問て曰く『一美人其の頭より足端まで與て貴人に捧ぐ、他に人あり、來つて其の局部のみを借らんと乞はゞ、貴人は之を許すべきや否や、貴意果して如何』侯笑て何故に然か問ふやを反問す、氏曰く『兎に角貴答如何、敢て問ふ』侯曰く『局部を借すは全部を奪はるゝ也、貴人何ぞ之を貸すことを諾す可んや』氏曰く『洵に命の如し、海南鐵道の堺大阪間は即ち其の局部ならずや』と、諄々として電鐵認可の非を論ず、侯意大に動く、次て侯の大阪に至るや、藤田傳三郎翁また極力其の非を鳴す、侯の意茲に於てか決し、歸京後直ちに後藤男に告ぐるに認可す可らざるを以てす、男去つて直ちに辭表を提出す、侯沈吟稍々久ふして以爲らく、一電鐵の許否のために閣臣を更迭し、延きて内閣の輕重を問はるゝが如きは、必らず忍ばざる可らずと、竟に勉強して電鐵を特許したりき

政友會員の此の利に浴せしもの正さに六十人に達すといふ、然かも他の一派其の醜を憎み、後藤男を併せて元田氏以下を彈劾せんと欲し、秘密に畫策中なりと

傳ふ、吾人は記して茲に至て筆も亦汚るゝを覺ゆ

(以上XY生)

印度改革失敗

印度政治改革は豫想通りの成功を收め得ざるものに似たり、吾人は深く英國印度事務大臣モオレー卿の爲めに之を悲み、印度民族の爲めに之を悲む、

然かも翻つて想へば此失敗の罪は印度民族に在らずして寧ろモオレー卿に在るには非らざる乎、蓋し昨年十一月中旬發布の印度立法參事會案は一昨年末發表せられたる改革案に一層の修正を加へたる苦心の計畫也、其總督の諮問府と各洲の會議とを擴張し、選擧と任命との二法に依りて印度一般人民より民論を主張する議員を出さしめ、加ふるに課税、公債等財政問題の討議をも許したるは確かに文明の潮流に接したる印度人が近年の熱望たる代議政體の前驅たるを拒む可からず、(英國政府は然らずと稱し居れども)唯怪しむ、モオレー卿は何が故に其代議員分配方法に於て人口に根底を置かずして階級若くは人種に根底を置きたる乎、更に切言すれば何が故に「ヒンヅ」人と回教徒とを區別し特に回教徒を寵遇し人口比例以上の議員數を出さしむることゝなしたる乎、

答ふるものは曰く是回教徒が英國印度統治の始めより最忠實なる臣民なりしを以て也、回教徒間にはヒンヅ人の如く革命を稱え、獨立を叫び若くは爆裂彈を投ずるものあらざりきと、吾人は賢明なる英國政府に斯くの如き謬想潜在せざることを確信せんとす、何ぞや、是一部の罪を以て全部を懲罰するものなれば也、否な斯くの如きは却て全部ヒンヅ人の同情をして少數革命黨に向はしめ、英國の印度統治を危うするものなれば也、

カーズン卿の言

前印度總督カーズン卿曾つてエヂンボロオに於て演說して曰く、印度は英國の寶庫也、貿易に於ては加[illegible]

陀、濠洲を併せたるものよりも大也、又英國製造品殊に棉製品の最大なる華主也と、然り印度は實に英國の寶庫也、

然るに此寶庫に於て昨年末以來行はれつゝある各地の參事會議員選擧が住民の最大部分を構成するヒンヅ人の協力無き爲め豫期通りの効果を收めざらんとする狀あるは抑も何等の憾事ぞ、吁嗟印度改革案は議員選擧の方法に於て宜しく速かに改められざる可からず

清使と歐洲

列國海軍視察の途に在る清國籌辦海軍大臣載洵貝勒、同薩鎭氷以下特使、一月中旬獨逸を去つて路都に入る、その歸東の期蓋亦遠からざる可きか、

清使一行は英佛墺三國に於て歡待到らざる所なきを見たりしが、其獨逸に入るや歡迎の度は一層高かりき、オスカル親王が宿所案內者となり、皇帝、皇后、皇太子、皇弟ハインリツヒ親王妃等が各所に於て總掛りにて歡待を力められたる、將た漢堡、ステツチン、キイル以下諸地に於ける歡迎會が盛況を極めたる、皆異常の事例に非ざるは無し、是に於て乎吾人は疑ふ、彼等は歡迎又歡迎に忙殺せられて爲めに短時日に海軍視察を遂ぐるの素志を果行するに到らざりしことを。

嗟莫、我國民は確かに一事を學び得たり、他無し、歐洲列強は清國を以て將來に於ける自國の發展地區となし、爲めに其甘心を得ん爲めには汲々として其手段を講じて止まざること是也

匈牙利政局難

難なるかな匈牙利の政局や、ウエケルレ內閣死せんとして後繼者無きが爲め死するを得ざること七月、僅かに大命を新進のクカクスに下すの運に到りたるも、內閣成立は猶遼遠なるに似たり、是近來希に見る珍奇の現象也、

左れど仔細に檢すれば是寧ろ當然而已、匈牙利議會に依りて代表せらるゝ匈牙利人は成る可く墺國より特立せんことを望み、之に反して墺帝と墺匈政府とは成

る可く墺匈兩國を密接にせんことを求む、目下激烈なる紛爭中にある所謂獨立匈牙利銀行設立問題の如き即ち此兩思想、兩主張が産み出せる一紛爭なり、此間に在りて一方に墺帝の信任を保ち、他方に匈牙利議會に多數を制せざる可からざる匈牙利内閣も決して樂園的國家の内閣に非ざる也

ルカクス氏前路の問題は、蓋し思ひ切つてジユスト等過激派と協同するか否かに在り、吾人は多少の苦情ある可きに係らず彼が思ひ切つて一先づ民論に從ひジユストと一致合同せんことを望む、是他なし内閣は一日も無かる可からざるを以て也、而して墺國のみに遠慮する内閣の成立刻下不可能なるは最早や充分に經驗せる所なるを以て也

前奉天總領事ストレート

米國の滿洲鐵道中立提議は海外の時事と言はんよりは寧ろ日本の時事たり、誌上恐らくは別に論議あらむ、此處海外時事子の關はる可き所に非ざる也

唯之に關して珍らしき人物一あり、誰ぞ、米國シンヂケート支配人ストレイト是れ、彼は五年前には東京、京城、滿洲の路上に於て路透通信社通信員たりと聞きしが次て朝鮮駐剳米國公使秘書官兼米國副領事となり、又最近まで奉天米國總領事たりし男也、誰か知らむ、此男こそ先きにモルガンを動かし、唐紹怡を動かし、徐世昌を動かし、第一國立及クーン、ロープ兩銀行を動かし、今亦タフト、ノックスを動かし、奇怪の中立提議を見せしめたるものならむとは、

彼や明治十三年一月の誕生、老熟、恬憺、無爲の境に入らせ給へる、我霞ケ關の外交家と比すれば其齡に於て正さに乳臭兒也、宜なるかな、其有爲、有能の蹟を示すことや、

白耳義新帝と公果

白耳義新帝アルバート一世、明治四十二年末を以て即位す、列國相賀して曰く、公果改革必らずや新帝の下に遂行せらるゝに到らむと、

夫れ公果は面積九十萬方哩、白耳義の本國に比し約九十倍に當る、護謨、珈琲等を産して白耳義の富源たり、然かも一千九百〇七年白公合併條約成るや、英米兩國は之が承認を拒絶し、要求するに改革の事を以てせり、其要に曰く先づ土民虐待を廢止す可し、曰く行政官の専横を制す可し、曰く門戸を開放し自由貿易を行ふ可しと、

世上誰か此要求を以て至當なりとせざるものあらむ而かも先帝―レオポルド二世―貨殖の念に富ませ給ひて久しく土民の權利を蹂躪し給へる先帝には形式以外に改革斷行の御誠意ありとは見えざりき、新殖民卿レンキン氏の改革案は或は空文に終らんかと危惧せられたりき、此點より觀んか、公果土民に深厚の同情ある新帝アルバート一世の即位は蓋し白耳義及公果の幸福也、

英米の眞意

然りと雖も玆に記せざる可からざるもの一あり、何ぞや、英米の抗議は表面こそ人道を叫び、土民保護に重きを置くが如くなれ、事實に於ては寧ろ自由貿易、門戸開放を主眼とせること是也、換言すれば英米の大事業家をして白耳義の小事業家を壓倒せしめんとするものなること是也、

已に然り、改革は固より必要なるも、其方法及順序に到ては恐らくは白耳義政治家が自國將來の利益の爲めに、今一段の苦心を經可き所たらむ、

英國總選擧と統一黨

英國總選擧第一回の一部選擧（一月十五日擧行）は黨として統一黨が多少勢力を回復し來れるを示し、官野對抗の大局に於ては猶政府が些小の多數を維持せるを示したり、即ち統一黨は前拓相チエムバレーン氏以下四十三名當選し自由黨は三十七名、勞働黨は六名、國民黨は五名の當選者を出し、此内後記の三黨は政府黨と見る可きものなれば也、然かも是唯一部の結果而已、最終の成績に到ては何ぞ今に於て斷するを得ん哉、

吾人の選擧觀は先きに之を述べたり、今茲に詳説せず、唯た一言し置くの要あるはバルフォル、チェムバレーン兩領袖が選擧間際に連名の檄文を發し、統一黨の關稅改革は勞働者必需品課稅を含まざることを言明して所謂二シリング志食料品課說を放棄したること是也、

何を以て此擧に出でたるかは昭々瞭々たり、統一黨內自由貿易派が反旗を飜へすを恐れたること確かに其一因也、一般勞働者の投票を誘致せんとすると確かに其二因也、是れ統一黨の選擧政略として其勢力回復上に一大効果を生ず可きは殆んと疑ひ無き也、左れど所謂關稅改革の精神と意義とは之が爲めに其半ばを喪失せざる可からざるを奈何せむ、

統一黨對殖民地

萬一斯くの如き綱領の下に統一黨の勝利を見るとせんか、

最も統一黨に同情し日夜その成効を祈りつゝありたる英國殖民地農民就中加奈陀農民の如きは先づ失望する部類たらざる可からず、何となし所謂殖民地特惠關稅は最早や彼等に利益を附與すること無ければ也、

米國政府黨動搖

曰く米國共和黨內訌、曰く民主共和兩黨謀叛人の一致、曰くタフト攻擊、曰く森林局長ピンショット(前大統領ロ氏の寵兒)免職、曰く何々、頃日の外報は殆んど米國政府黨の動搖を以て充滿す、

是亳も驚くを要せざる也、共和黨執政十四年人民は未だ之に倦かざるも、彼等自ら之に倦かんとす。內相對森林局長衝突と言ふが如き小問題が意外の大波浪を擧げたるも之が爲め也、アルドリッチ(上院財務委員長)キャノン(下院議長)反對熱も之が爲め也、

片々錄

旅順の敗將ストイセル將軍出獄後莫斯古に於て茶商と化すと米紙の露電に見ゆ浮世を茶にして殘生を送らんとする心か否か▲ニカラグア征伐に對して米紙の論

議紛々たり國務卿ノックス氏の苦心思ひ遣らる然かも中米は猶ほモンロオ主義の範圍内に在り猶恕す可し滿洲鐵道は則ち然らず宜なるかな、クロニクル、ポースト諸紙の猛烈なる攻撃を惹起せるや▲獨逸財政窮乏す昨年度の二億五千萬圓增稅も燒石に水也又々公債募集を見る可しと是亦重に軍備擴張に因る則ち自業自得而已▲萬國阿片會議再び上海に開かれんとす願くは眞に之が喫烟及栽培禁止の方法を講せよ、如何に名義が阿片會議なればとて茫漠烟の如き決議は贊せず、

（以上懷沙隱客）

新刊批評

▲文藝百科全書

▲早稻田文學社編纂
隆文館發行

「文藝全部の一大俯瞰圖として、過去及現在に於ける之が事實と理論とを一系統の下に記述せん」との目的を以て編纂せられたるものにして、四六二倍約千八百頁三段組の大册子にして中三分の二は五號、三分の一は六號組なり。第一部は文學部にして先づ文藝概論より詩歌論、小說論、批評論を揭げ日本、支那、印度、ヘブライ、アラビヤ、ペルシヤ、ギリシア、ローマ、イタリア、フランス、ベルギイ、イスパニア、ホルドガル、イギリス、アメリカ、ドイツ、オランダ、スカンディナギア、ロシア、ポーランド、ハンガリア等の文學發達略史を載せ尙日本現代文學の大體、聲音學、言語學、修辭學の大要、神話傳說梗概等を附せり。第二部は演劇、音樂、美術部にして劇評論、劇場及び舞臺、俳優敎育、日本演劇史、狂言、西洋演劇史、音樂理論、器樂論、聲樂論、音樂論的音響學、日本音樂史、淨瑠璃史、西洋音樂史、日本繪畫史、支那繪畫史、西洋繪畫史、繪畫雜纂、版畫、書學、日本彫刻史、印度彫刻史、西洋彫刻概說、西洋彫刻史、東洋建築史、西洋建築史、裝飾美術、美學入門、日本近世繪畫史等に分ち第三部は解題部にして名著、名劇、名曲、名畫、名彫刻、名建築の解題を擧げ、第四部は文藝家人名辭彙なり。印し各部の專門家が此書によつて深き研究をなさんとずれば、說いて詳名からざるを憾むべきも、一般の讀者が文藝全部に亙る一通りの智識を

得んとするには最も便利にして有益なる書なり。且つ書中の主もなる記事には概れ署名して筆者の責任を明かにしたるは至極よき事なり。又挿畫には見るべきもの極めて多く、殊に第二部には珍らしき繪畫鮮からず。近時最も注目すべき出版の一にして、文藝愛好者の机上一本を缺くべからざる也。（定價金拾五圓）

▲明治教育思想史　藤原喜代藏著　富山房發行

近々四十有餘年といふけれど恐らくは我明治年代程種々雜多の思想が、宛ら狂瀾の地を捲いて到るが如、一時に泰西より輸入し來つて押し合ひ込み合つた事はなかろう、教育思想といつても諸多の時代思潮と沒交渉に存在すべきでないから、その歴史といへば其叙述の詳略如何によつて直に一般思想史ともいへろ、本書の如きは即ちそれて材を採る極めて廣く且つ又密かてある。これによつて一目の下に我思想界の變遷推移、而して其間を縫うて進んで來て居る我教育界の狀態が知れる、慾をいへば矢は說いて尙ほ深からざる處にある、精からざる處に在る、早い處がプラグマチズムの意義、自然主義の意義といつても體系、立つた論述の方法が無く、讀み返しても々々々々矢張り茫洋たる憾ある計りである、教育界の人物評。率直にして敢て粗宕せぬ所に取得がある。（定價金貳圓參拾錢）

▲都の手ぶり考證　附梅ヶ枝物語　關根正直著　大倉書店發行

純中古文ぶりに寛政頃の江戸風俗を書き記した六樹園の此書、仲々に捨て難き妙好文辭であるが、それを一々考證し詳な註釋を加へたもの、附錄の梅ヶ枝物語亦同樣なもので、くだくだしからずして而かも明確なる說き方は確に稱すべき特長と信ずる。

▲諸戸清六翁　稻田淳光著　三重縣城南社發行

能く節し、能く働き、能く積み、能く散じた事業家として故諸戸清六翁を寫したもの、修養叢書の第一編として出たものだが正に其名に背かぬ値がある、行文亦易直にして姿致あり、極めて家庭向てある。（定價廿錢）

▲緣の絲後篇　伊原青々園作　萬朝報社發行

醍醐の侠氣お園を救ひ出す、不幸な與江が船中にて又救はるゝ、園や貝塚や、藤名や力蔵や背後には一所に落ち合ひ絡み合つて走馬燈の目まぐるしき許りの局面があつて、遂には戀の縺れの結果、園と與江との目出度婚緣の席に再び藝妓となつたお園があれば込む、それが又圖らざる一陣の狂風、力蔵の叶はぬ戀の嫉刃に果敢なき落花の運命を止むるといふ、至つてお芝居的のものながら其處に面白味があるとて讀み耽る子女は少くあるまい。（定價四拾五錢）

▲實業訓　澁澤榮一述　成功雜誌社發行

目的の撰擇法から常識の修養法から立身すべき青年の性格といふ樣な問題二十四項を掲げて澁澤翁が自己の經驗より得た所見を語つたもの。（定價金六拾五錢）

▲滑稽諧謔双胎兒　山下破鏡著　榮江堂書店發行

種が西洋ものと見えて場面の我々の眼には映り難い感じがするが譯文は十分コナれた日本のもの旨いものだ、珍芬漢な處があつても臍茶の功だけは保證付。(金四十錢)

▲東京の女

松崎天民著
隆文館發行

東京朝日の三面に出て相應に讀者を得たる記事、それを集めて一書としたもの、樣々の境遇の樣々の女の生活やら氣質やらが一寸分る所は先づ覗き機關式で面白い。(定價金五十錢)

▲權利の保護策

岡部學三著
樂山堂書房發行

日く擔保付金錢貸借に就いて心得置くべき事項、日く無擔保物の金錢貸借に就て心得置くべき事項、日く金錢貸借に就いて一般に心得置くべき事項と、以下尙ほ項を設くる十一、更に細條に分けて一々の場合を揭げ、一々それぞれの場合に對する法律上相當の手續を明示したもの、法律學的智識なくして而かも十分に法律的措置を誤らぬ樣に敎えた便利な著書である。(定價金五拾錢)

▲今日の歷史

高橋淡水著
樂山堂書房發行

今日の歷史といへば東京朝日の同じ題目のそれを集めたるものらしく思はれ樣が、それと此れとは何等の關係はない、題に冠して古今東西とあるが、如何にもその日に關係ある古今東西の重大事件は殆んど全く說かれて在る、過去を現在に繫いて敎えるといふ事は聞くものの耳に親密な感が起るから記臆し易い、歷史を覺えるといふ點からも効力ある事と信ずる。(定價金七拾五錢)

▲二十二篇

田山花袋選
東雲堂藏版

此四年間に「文章世界」に載せられた青少年文士の作中より其尤なるものを選れ丈け抽いたもの、人樣々、境樣々、從つて想樣々、趣樣々、筆樣々の、仲々に目もあやなる野面に咲き交ふ八千葉の草の花の亂れの觀がある。(定價金五十五錢)

▲英語手紙と句讀

礒部精一著
東西社發行

英文は日本文と違つて餘り七面倒な形式が無いとはいふものの、只餘りといふ丈て絕無ではない、本書はその一その形式を委敷說いたもの、添ふるに句讀法の解說を以てして居る、初學者に取つて多大の便益を感ずるであらう。(定價二十錢)

▲俳聖五家集

杜南編
昭文堂發行

宗因、鬼貫、芭蕉、蕪村、一茶の五人の句を四季と無季とに分ち、更に又天文地理時候人事動物植物等の項の下に類聚したもの、卷首に略傳が添へてある。(定價金五十錢)

▲人之敎育

フレーベル原著
啓醒社發行

開發主義敎育の主唱者フレーベル氏の好著として米國にては諸大學の敎科書とまでなつたもの、譯文平明にして暢達、兒童敎育に携はるものの良參考書と信ずる。(定價金壹圓五拾錢)

▲人生の妙味

エヴベリ原著
實業之日本社發行

世に處すべき要諦を學識豐富なるエーヴベリー男爵の說述されたるもの、之によつて學ぶべき處は甚だ多い。(定價金八十錢)

▲店頭讀本新販賣術　　堀内新泉著　實業之日本社發行

販賣術に於ける新研究で、商界に於ける成功術を委しく項目を分つて論じたものだ。(定價金五十錢)

▲二宮尊德勤儉貯蓄法　　矢土論昌一著　成功雜誌社發行

尊德翁の遺說の中その勤儉貯蓄に關するもののみを併せ集めて更に著者の解說し批評したものだ。(定價三拾五錢)

▲黄金の林　　獨歩、治子合著　日高有倫堂發行

獨歩氏の短篇「親子」と治子女史の長篇「破產」とを收めたり、獨歩氏のは氏としては寧ろ不出來の作なれど、治子女史のは獨歩社の創立より解散までの出來事を描きて讀みて面白きものなり。(定價八十五錢)

▲草山の詩　　青山霞村著　至誠堂發行

「池塘集」の著者霞村氏の長詩短歌を集めたるもの、長詩は口語體を取りて比較的成功せるもの多し。(定價五十錢)

▲忘れな草　　紫園山人譯　警醒社發行

プレンチース夫人の「ステッピング、ヘヴンワード」を抄譯したるものにして宗教的教訓を含める讀物なり。(定價金四十錢)

▲ゴーリキー集　　相馬御風著　博文館發行

「チエルカッシュ」「秋の一夜」「青い小猫」「道連れ」「仲間」「意中の人」の六篇を譯したるもの、譯文に多少譯者の癖と思はるゝ節なきにあらねど概して流麗なり。(定價四十五錢)

▲信仰と理想　　原田助著　警醒社發行

著者十數年來の文章を集めたるものにして「健全なる信仰と高尚なる理想を鼓吹せん」とする志望は何れの篇にも現はる。(定價六十錢)

▲心靈と修養　　宮川經輝著　警醒社發行

基督教界一方の旗頭たる宮川氏の心靈の修養に關する講話にして、痒ゆき所に手の屆くやうの說き方、斯道に志ある人に有益なるものなり。(定價一圓)

▲天野屋利兵衛(前篇)　　碧瑠璃園著　隆文館發行

文章句法にコンヴエンショナル箇所多く、從て文藝上の價値は高きものにあらねど、脚色可なり巧にして通俗の讀物としては成功せるものといふべし。(定價七十五錢)

▲佐久間象山　　齋藤謙著　隆文館發行

「近世偉人傳」の一篇にして、近世の偉人の面目を小說的に記述し、教科書以外青年の修養に資せんとの目的を以て著はされたるものにして、暢達なる筆路、著者の目的は略ぼ達せられたりといふべし。(定價九十錢)

▲死生の境(前篇)　　田中萬逸編　博文館發行

曾て「報知」に連載せられて好評を博したるものにして、現代の名士が生死の境に於て感じたること、若くは實驗したる事實の談話を記載したる面白き讀み物なり、一面には精神修養の一方法ともなり、一面には往々隱れたる史實の材料を給せり。(定價十五錢)

▲英文隨想錄　　新渡戸稻造著　丁未出版社發行

先きに好評を博せる隨想錄の原文に更らに英文數篇を增補せるものに

して、吾人は和譯に比して更らに一段の興味を以て本書を讀めり。此篇に顯はれたる著者は多くの場合に於て常識的詩人にして、又時に常識的倫理學者、常識的哲學者、常識的思想家たり。文字といひ、思想の形式といひ、著者の英文はその日本文よりも遙かに優れるを思ふ。標題は Thoughts and Essays なり。（定價一圓五十錢）

▲人物分布觀（上篇）　大庭柯公著　梁江堂發行

「大阪每日」に連載せられて好評を博せるもの、面白き讀み物なり。柯公の文は黑頭巾の如き奇魄なきも、概して穩健にして、觀察も亦多く偏倚する處なきに似たり。下篇の出版の速かならんを望む。（定價六十錢）

▲後藤隱岐　綠園生著　隆文館發行

後藤又兵衞を主人公とせる歷史小說にして、脚色可なり面白し。附錄「宇都宮公綱」亦捨て難き趣あり。（定價八十錢）

▲自然と人　森田有秋著　博盛堂發行

著者の論文及び美文等を集めたるものにして眞面目なる著者の面目は何れの篇にてもあらはる。本誌に出でたる現代の小說家を評したるものも此書の中に收められたり。（定價四十錢）

▲處世訓話餅　和田垣謙三著　至誠堂發行

博士の滑稽諧謔最もよく此篇にあらはれ、又博士の滑稽諧謔の面を破つて、世上の子弟を教訓せんとするの底意も最もよく此篇にあらはれたり。要するに博士の持前を最もよく發揮せる書物にして、讀んで心持よし。（定價廿五錢）

▲乞食倶樂部　白雲子譯　易風社發行

甞て「新古文林」に連載せられしものにして譯文暢達、內容奇拔、頗る痛快なる小册子なり。（定價三十五錢）

▲國民禮法　相島、加藤共著　良明堂發行

訪問、招待、會食、書簡、及び日常の起居動作に我國の禮法一定せざるを慨し、和洋折衷的の禮法を說き勸めたるものなり。（定價五十錢）

「田舍教師」「藤村集」「落日」「微温」「寄生木」の批評は次號の評論欄に掲載すべし。

前號所載中村星湖氏の「野國から」中眞敎とあるは心經の誤なる旨、作者より訂正し來れり。

○壹冊定價 金貳拾錢外ニ郵稅金壹錢五厘（海外郵稅八錢 但清、韓兩國を除く）

冊數＼國別	內國	外國
六冊	金壹圓貳拾錢	金壹圓六拾錢
十二冊	金貳圓參拾錢	金參圓拾錢
以上郵稅共		

▲但し特價號は規定以外に代金を申受くべし▼

送金注意

一郵便爲替にて御送金の場合は本鄉西片町十番地反省社と指定し拂渡局を東京東片町局と指定せられなば途中盜取せらるゝの虞なし
一弊社振替貯金口座は東京三十四番なりこれにより御送金の方は登記料貳錢を加へらるべし然らざれば御送金の內より差引くにより端金となりて却て御面倒となるべし
一郵券代用は必ず壹割增に送らるべし
一前金切の節は帶封に朱書いたすべし後金が送られざれば其號限にて發送を止むべし
一領收證を出さず緊まるゝ向は返信料を添へらるべし

關東大賣捌所

東京神田表神保町	東京堂
仝 神田裏神保町	上田屋
仝 京橋尾張町	東海堂
仝 日本橋呉服町	北隆館
仝 本郷本富士町	盛春堂
仝 京橋鎗屋町	良明堂
仝 日本橋本石町	至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町	盛文館
仝 京町堀	太華堂
京都佛光寺	東枝書肆

中央公論廣告料

一行（五號文字二十四字詰）	一回	金參拾錢
半頁	一回	金八圓
一頁	一回	金拾五圓
表紙の二、三、一頁	一回	金貳拾圓
表紙の四	一回	金貳拾五圓

明治四十三年一月廿八日印刷及納本
明治四十三年二月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 天野耕一

發行所 東京市本鄉區駒込西片町十番地 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 秀英舍第一工場

